
鍊機動騎士スフルツァンド

森鷗 皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬機動騎士スフルツアンド

【NZコード】

N1948X

【作者名】

森鶯 皐月

【あらすじ】

人類が生きていく為に錬機術が繁栄をもたらす時代。

貧富の差が激しい町に住むアルバイトに精を出す少年、シスカは騎士隊の艦へ配達に向かつた際に、巨大な錬機獣ルーディメンツに襲われる。

戦う術をなくした騎士隊にシスカは、誰にも乗れない筈の政府直属騎士隊の兵器、ブレスであるスフルツアンドに呼び寄せられる。無我夢中でスフルツアンドを動かしルーディメンツを撃退するシスカ。

その出来事が、貧しくも少しだけ平穏な生活を送る少年の運命を変えることになった。大幅ストーリー改変のため、一部ストーリーを削除します。近日つゝしていくのぞよろしくお願いします。

第1話 平穏

人類が生きていく為に鍊機術が繁栄をもたらす時代。

そんな時代に俺達は、生きている。

鍊機術による蒸気機関、生活の火種、戦争の兵器までもそれで出来ている。

そうだ、俺達は鍊機術に生かされている。それが当たり前の生活。当たり前の平和。

でも、その平和は政府直属の騎士隊がいるからだ。

人々を脅かす、人類の敵：ルーディメンツ。

何者かが操縦しているのか、生物なのかわからない。

ただ、巨大で生身の人間がどう立ち向かっても敵うはずの無い、大きなその存在は時に俺達の平和と心を搔き乱す。

だけど、それを守つてくれるのは騎士隊だ。

騎士隊を統括する政府に全部任せたければいい。

誰もが安心しきっていた。

自分達には関係ない。外の世界のような…そんな感じがした。

太陽が昇つて朝が始まり、陽が沈んで夜になるように…それが当たり前のことだって、ずつと思っていた。

明日の不安を恐れるより今日の食い扶持を稼ぐ。

貴族や中流の人間と違う下町の俺達にとつて、生きていく為の術が全てだから。

「ロイドさん、ただいま！」

バタバタと足音を立てて、少年シスカは小さな店の扉を開く。見るからに泥だらけの擦り傷だらけ。しかし、笑顔で明るい声を上げる。

それ待つていたのは、スキンヘッドにサングラスをかけた派手なシャツを着た咥え煙草の男だった。

「んだ、シスカおめー…またやられたのか」

「はは…でもバイクと伝票は死守したよ。大事な商道具だからさ下町で暮らす者たちは大人であるうと子供であるうと、生活の為に働くことを余儀なくされる。

幼い頃に家族を失つてからスラム街で育つたシスカは、ある人物に拾われ、そして今現在、ロイドの店で配達の仕事をしながら生活をしている。

だが、幼い頃の生活もあり、今でもシスカを色眼鏡で見る者は少なくなかつた。

しかし、そういう冷遇や理不尽な暴力を受けても屈することは無かつた。

「喧嘩買えたか？」

「まさか！勝てるわけないし…なんか、面倒だし」目を逸らして気まずそうにするシスカに呆れたロイドは、シスカにタオルを投げた。

「取り敢えず、風呂いってこい。そんな泥んこだとますます苛められんぞ」

「べ、別に苛められてるわけじゃ…」

「だったら一回くらい見返してやれ！ オメーはもう石投げられてスラムにこそ逃げるガキじゃねえんだ」

「う…でも…」

「でも？ オイオイ、まだ弱虫シスカのままか？…おめー、苛めつ子の貴族のガキと荒くれルカのどっち怖い？」

「ルカ！ 断然、ルカの方が怖いですっ！ 何するか分かんないから…」

「だつたら胸張つておめーのバイクと共に突つ切つて、そいつらを轢き倒せ」

「そ、そんな無茶苦茶な…」

「あん？」

ロイドが睨み付けるとシスカは肩を震わせ、タオルを持ち直して扉へと急いだ。

「お、お風呂行つて来ます！ わーい、銭湯楽しみだなあ～」
伝票を置き、わざとらしく笑顔で逃げようとする。

「おい、シスカ」

代わりにタオルと桶を慌てて逃げようとするシスカをロイドが呼び止める。

「は、はい…」

これまでかと観念したシスカは、そろりとロイドを見た。

「風呂行つてからでいいからよ、もう一軒頼む。ちょっと町の外出がいいか？」

「町の外…？ あ、そっか」

「根性なしで逃げやがった馬鹿の尻拭いで悪いが、次の奴見つかるまで頼むわ」

「うん、わかった」

さも当然のように返事をしてシスカは店を出る。

外でバイクのエンジンがかかる音がした。

シスカが去つた後、ロイドは伝票をめぐり煙草をふかした。

「…即答かよ」

くくつと喉元で笑い、ロイドは短くなつた煙草を灰皿に擦り付けて消した。

「臆病で腰抜けのくせに根性だけはありやがる…。面白えガキだ」

そう言つてロイドは柔らかい笑みを扉の向こうに向けた店の裏口にある倉庫へと消えた。

臆病者、弱虫、腰抜け、スラム育ちのドブネズミ。
もう何十回、いや…何百回かもしない。聞き飽きた言葉だ。

俺の両親は、優秀な政府直属の研究施設のメカニックだった。ルーディメンツを迎撃つ為の兵器プレスの開発に関わっていて、その影響か俺も小さい頃から機械が好きだった。

親の書いた設計図を参考にそれを改良して、新しい玩具を作つては友達に自慢して一緒に遊んでいた。

だけど、二人は俺が九歳の頃に突然死んだ。

本当に突然だつたんだ。研究所にいた父さんと母さんは、実験中に死んだって聞かされた。

機密事項だから死因も分からぬ。

最後の顔を見ることすら許されなくて納得いかなかつた。

でも、当時の俺には何も出来なくて、それどころか身寄りが無い俺は泥臭くて薄暗いスラムで生きることを余儀なくされた。

スラムは荒れ放題で食べ物も奪い合いで…力が無かつた俺は、お腹が空いたら道を這つてでもパンの欠片を探し出して食べる。そんな生活が毎日毎日続く。

人のものを盗むのは嫌だつたけど、人の捨てたものを拾うのは罪悪感を感じなかつた。

同じスラム街にいる奴等に殴られるのも日常だ。

その代わり、心は死んでいた。

自暴自棄になつて何もかもが滅茶苦茶に壊れて、ただ息をしてい るだけだつた。

そんな生活が四年も続いて、生きることすら面倒臭くてこのまま死んでも良いと思っていた。

そんな時に、そいつは現れたんだ。

「なーに死んだ振りなんかしてんだよ、てめえ」

そいつは、態度も体もでかくて見上げるのが眩しくて…泥の中を

無理矢理這い蹲つて生きる俺とは違う太陽のよつな男だつた。

その男が、俺を泥沼から太陽の下に戻してくれた。

それが…そいつこそが、ルカだ。

「ちょっと待つたあああああああ！」

バイクで走るシスカの前に両手広げて飛び出してくる男が一人。

「うわあああああ！」

突然目の前に現れた人間にシスカはタイヤを思い切り地面に擦り付けてドリフトをして止まつた。

「な、な、な…！」

ハンドルを震える手で握り締め、肩も震わせてその人物を見た。

「へっ！ 湯にあたつてのぼせてんのか？ ぼーっとして走つてたら危ねえぞ」

「飛び出してくるほうがよっぽど危険だよ…」

「うつせえなあ。いちいち細かいこと気にしてつとハゲんぞ。ロイドのジジイみてえにな」

「全然細かくない上に、ロイドさんのあればハゲじやなくてスキンヘッドだから」

「うつせえ！ この俺！ ルステイカ＝ピッシイカード様がそう言つたらそなうなんだよ！」

「…意味わかんないし。もうルカどいてよ。俺、まだ仕事中」

バイクに乘ろうとしたル力を退にじうとシスカは溜息を吐いて、エンジンをかけなおす。

「配達か。何処だ？」

「町の外。ほら、二ムさん辞めちやつたから俺が…つて何してんの？」

シスカが話をしている途中で、事もあるうかルカはバイクに乗つた。シスカの前に。

「進め、シスカ！」

「何馬鹿なこと言つてんだよ！」

シスカはグッとハンドルを握り締め、勢いを付けてルカを振り払つた。

「うおつ！ 何すんだテメ！」

再びバイクに縋り付き、ルカは牙を剥き出しにする。

今度は後方に積んである荷物を掴んだ。

「潰れる！ 荷物潰れちゃうつて！」

「だつたら俺も連れてけ！」

いくら振り払つてもルカはしがみ付いて来るだろう。そういう男だ。今に始まつたことじやない。

「…分かつたよ。ただ、荷物傷つけないでよ。怒られるのは俺で、最終的にロイドさんに迷惑掛けるんだから」

「おうつ！ 僕もあの親父の拳骨は痛エからちぢやんと弔つてやるぜ！」

！」

無邪気な子供のように歯を出してルカは笑つ。

こんな顔をされると、神経質になる自分が馬鹿らしくなつて実際そうじやないのにルカが正しいと思えてくる。

でも、それは嫌じやなかつた。

どこか体の中がほつとするよつなそんな感覚で、自然に顔が綻んだ。

町を出て広い荒野を走り抜けると、荒野に駐在している艦が見えてきた。

「おー、あのデカブツか。クソ政府の騎士隊の巢じやねえか」

「うん。暫く動かないらしいから直接持つて来て欲しいつて。なんか、機密限定荷物だから俺も中身はわかんないんだけど」

「…開けちまおうぜ」

ニヤリとルカは笑う。

驚いてシスカはバイクを止めて、掛けていたゴーグルを頭へと上げた。

そして、後部座席に座るルカを見る。

「は、はあ？ 何言つてんだよ、駄目に決まつてんだろ！」

「いいじやねえか、元に戻せば問題ねえつて」

「問題あるから！ 怒られるだけじやすまないつて！ しかも政府のものだよ？ 生活できなくなつちゃうよ！」

「大丈夫だ。そん時は俺が面倒見てやる！」

「あああああ！ 開けちゃ駄目だつて！」

シスカが止める暇も無く、ルカは積荷を開ける。

「お？ なんだこりや」

「箱の中に箱…？」

「相當なお宝だぜ、こりや」

「もうやめようよ！ 箱の重ねがけなんてほんとまずいよ、この荷物…つて、ああああああ！」

シスカが制止する暇も無く、幾度も重なる箱をルカは開け続ける。頭を抱えて悲鳴を上げるシスカの声は虚しく空に消えていく。

「よし、これが最後だな」

小さな箱が目の前に現れる。

「だああああ！ 駄目だつてばあああ！」

必死に守りうとルカから箱を取り上げる。

「あ」

既に半分テープを開けられたその箱は、シスカが取り上げた反動で開き、中身が飛び出してしまう。

「あーあ、出しちまつた。シスカ、お前も共犯だな」

ニヤリと笑うルカに抗うどころか涙目になりながらシスカは、中

身を持つたまま放心する。

「んで、何だこりや。鍵か？」

それは鍵の形をした透明な宝石だった。

「え、えお…え、お…」

涙目でぱくぱくと口を開閉させて言葉にならない言葉を発するシスカの目の前で、ルカは手を振ってみせる。

「おーい、シスカ。大丈夫かー？」

「馬鹿ルカ！ これ、エオリアだよ！」

「は？ エオリア？ …なんだ、それ」

「何だそれって…鍊機動の原石だよ！ 鍊機術つてこの石から物質

作ってるんだって…子供でも知ってるよ！」

「ほう。んで、なんでそんなテンパつてんだよ。そこまで仕事に命かけなくたって…」

「そうじゃない！ そうじゃないんだよ！」

中身を開けたショックと叫びより、その中身自体に恐れをなして
るようシスカは怒鳴る。

「エオリアの鍵！ これ、ブレス起動のキーなんだよ。こんなの俺
達みたいなの持つてたら犯罪者つて思われても不思議じゃないだろ
！」

「…なんで持つてると犯罪なんだ？」

「ブレスは、政府の最重要兵器だし…。そんなのを動かす鍵なんか
持つてたら、俺達みたいなのだって兵器を動かすことが出来…」

「

そこでシスカは止まった。

失言だった。こんなことを言つたらルカは面白がるに違いない。

恐る恐る目を向けると、案の定シスカが想定した通りの表情をルカは浮かべていた。

「よつしゃあ！ そうと決まつたら、艦に行くぞ！」

「行ける訳ないだろ！ 中身出しちゃつたんだから、捕まっちゃう
よ…」

「おいおい、お前のバイクがそんじょそじらの騎士なんかに捕まるかよ」

「全力で捕まるよ！ 逃げられるわけ無いよ！ そんなにパワー出るわけじゃないんだから」

「いや、出る！ 走れ、シスカ！」

「い、嫌だ！ つ！」

首を振つて拒否を示そとするシスカだったが、手の中のエオリアキーが白く光り輝いた。

それが、一本の線となつて艦へと導く。

「な、なんだ…」「れえええっ！」

止めたはずのエンジンが掛かり、動かしてもいないのにも拘らず勢いよく艦に向かっていく。

「と、ととと…止まれえええ！」

何度もブレーキをかけようとすると、全くびくともしないで勢いは止まらず、バイクは艦の中の格納庫へ転がり込む。

「うわああああっ！」

バイクごと叩きつけられ、シスカとルカは目を回す。

「いつて…大丈夫か？ シスカ」

「う、うん。頭ぐわんぐわんするけど…」

頭の中で散る星を振り払うように首を横に振る。流石のルカも頭を抑えて落ち着いた。

「誰っ？」

階段から少女が血相を変えて向かってくる。

「うわっ！ ルカ、逃げようよ…」

「おい、そこのお前！」

シスカの行動とは逆に、ルカはシスカの首根っこを掴んで少女へ向かつていぐ。

「ちょっと、ルカ！ 何やつてんだよ… 此処、騎士隊の艦なんだよつ？」

「んなもん知つてる！ おい、お前！ ブレスのとこに案内しろ」

「な、ななな…何言つてんだよ、馬鹿ルカ！」

そんな二人の掛け合いに少女は不信がり、通信端末をつけた。

「此方、ユリアニアナリーゼ。不法侵入者が二名。指示をお願いします」

ユリアという名の少女が上に報告すると、シスカは震えながらぐくりと息を飲む。

「…分かりました。では一時的な拘束を…はい」

雲行きが怪しくなり、シスカとルカは足をそろそろと後ろに下げる。

「…行くぞ、シスカ」

「う、うん…。せえーの…」

それを合図に一人はこの場から逃げるべく走った。

「あ、こら！ 待ちなさい！」

『どうした？』

端末の向こうから男の声が聞こえる。恐らくユリアの上司だらう。

「二人が逃げました。足止めします！」

そう言つて通信を切り、ユリアはホルスターから拳銃を取り出し二人を撃つ。

「ひいいいっ」

「うつわ！ あつぶねーな、このクソ女！」

銃弾を避けながら一人は一心不乱に走る。

「ルカ、捕まつて！」

「よつしや、あの女にぶちかましてやれ！」

「馬鹿！ 逃げるんだよつ。完璧に俺達お尋ね者状態じゃん！」

そう言つて、シスカはバイクのエンジンをかけようとする。

「あれ…？ あれっ？」

何度もエンジンを掛けようとするが、何の音もせず、鍵を回す音が力チカチと鳴る。

「何やつてんだ、シスカ」

「エンジンがかからないんだよ！」

「は？」

「さっきので使い果たしちゃったのかな？…ビ、ビハシヨウ」「どうしようつたって、お前…」

シスカが何度もエンジンをかけようとするが、鍵が虚しくカチカチと鳴るだけでエンジンがかかる事はなかった。

タイムリミットか、ユリアは銃口を至近距離で一人に向ける。「大人しくしなさい」

鋭い眼光でユリアは引鉄に手を添える。

シスカとルカは観念して、両手を挙げた。

「じゃ、ついてきて。下手なことしたら撃ち殺すわよ」

ビクツと肩を震わせ、シスカはカチカチと歯を鳴らした。

「る、ルカ…」

ルカの服の裾を引っ張り、シスカは視線で降伏を提案した。

「はあ…。わーつたよ！ 行けばいいんだろ、行けば」

「じゃあ、はい」

ユリアは二人を拘束しようと手錠を用意する。

「て、手錠…。ルカ、やっぱ俺達捕まっちゃうのかな…」

「まあ、半分もう捕まってるけどな。はは、悪い」

「本当に悪すぎるよつ！ ああ、もつ…」

この先のことを考えると怖かった。

こんな重要犯罪を犯してどんな刑罰が待っているのだろうか。もしかしたら、死刑にでもされたらと思うと涙を流すわけには行かなかつた。

「この忙しい時に余計なものが…」

溜息を吐いてユリアが悩ましげに言葉を発する。

「良い？ 取り敢えず大人しくしてなさい。そうすればこれ以上の罪は重くならないわ。多分ね」

ユリアなりの慰めといったところだろうか。

それでもシスカの震えは止まらない。

（情けない奴…。男の癖にめそめそしちゃつて）

正直、シスカはユリアの嫌いなタイプだった。

思い思いに今後のことを考えながら歩く。

突然、ずしんと重い音がして激しい揺れを感じる。

この揺れは何度も感じたことがある。

敵襲だった。

「うわっ！」

「な、なんだ？」

大きな揺れにルカやユリアはよろけてしまい、シスカは尻餅をついた。

「いて…」

床に打つた尻を押さえながらシスカは立ち上がる。

艦内に警報が鳴り響き、クルー達が慌しそうに走り回っていた。

「これは、まさか…！」

ユリアは周囲を見渡し、シスカとルカを睨む。鬼気迫る真剣な表情だ。

「早く来て！ ルーディメンツが攻めてくる！」

「ルーディメンツだと？ よつしや、見に行くぞシスカ！」

「馬鹿、何言つてんだよ！ 」この人の言つとおりにしないと危ないよ…」

外に出ようとするルカの腕を掴んで、シスカは叫ぶ。

途端、目が眩むような光がシスカのポケットから発せられる。

「これは、さつきの…！ いや、違う…」

先ほどの白い光とは違い、今度は青い光が強く発せられ道標を示す。

（…行かなきやいけない気がする。さつきの光も今の光も何かを伝えたいのだとしたら…）

「ちょっと、待ちなさい！」

光の示す方にシスカは走り出した。

ユリアがシスカを追いかけようとすると、その腕をルカが掴む。

「な、何？」

「何じゃねー。その銃下ろせ。」こうなつたら逃げも隠れもしねーよ

「…わかったわよ。ただ、妙なことしたら容赦なく撃つ！」

「へいへい。分かつてつから、そんな怖い顔すんなつて
頭をぽりぽりと搔き、ルカは欠伸をする。

しかし、少女は警戒を怠ることなくルカを睨み彼の後ろを歩いていた。

「はあ…はあ、はあ…」

光の示す方に走ると、格納庫の奥の暗い場所へと辿り着く。
エオリアキーが唯一の光となつて、その場所を照らし、輝きは増していく。

「うわわっ！ 眩しつ…！」

眩む目を堪え、光り輝くエオリアキーの示した先を見る。
一際輝く鋭い光がその方向を示すと、それが明らかになる。

「…ツ！ これつて…ブレス？」

目の前には巨大な体があつた。その顔は、高く見上げないと見えない。

綺麗に磨かれたスマート色の装甲が薄暗い格納庫でその存在を主張し、視線を離せない。

瞬間、胸の高鳴りを感じた。

少しずつ、それに近付いていくうちに胸の高鳴りは増していく。
そしてひとつつの単語が脳裏に響く。

「スフォル…ツア…ンド…？」

その名を呟いた瞬間、それに呼応するよつにブレスが起動しスペークしたよつに光が発せられる。
眩しくて目を開けられない。

「うわあああ…！」

あまりの眩しさに悲鳴が出た。

「シスカ！」

後ろからルカがシスカを呼んだ。

「ルカ！ これ…」

「ちょっとあんた！ 何やつてんのよー！」

ユリアが怒りの形相でシスカの胸倉を掴む。

その表情にシスカは、肩をビクッと震わせた。

「い…ごめん」

「民間人が何でエオリアキーなんか持つてんのよー！」

「そ、それは…その…」

「はつきり喋りなさいよー！ あんた、ただじやすまないわよー！」

「何やつてんだ、ユリア！」

怒鳴り声を上げるユリアの背後から男の声が聞こえる。

カンカンカンと鉄製の階段を急いで降りる音がした。

振り向いて男に気付くと、ユリアの手がシスカの胸倉から外れる。

「ロック隊長」

「今、ジエントが戻る。ルバートもかなりの損傷だ。手があいてるなら手伝ってくれ」

「損傷つてまさか…！」

「左目と右足がやられてる。これ以上の戦闘は無理だ」

「そんなん！ 唯一ブレスに乗れる副隊長が動けなかつたら、もう…」

ぐつと隊長と呼ばれた男、ロックは歯を食い縛る。

ガラガラガラとストレッチャーの音がして、そこには恐らく今話していたであろうブレスのパイロットが左目と右足を血塗れにして苦悶の表情を浮かべながら運ばれていた。

その姿にシスカの顔が青褪めた。

今まで考えたことも無い騎士隊とブレスの戦闘がこんな間近で現実として視界に入っている。

関係ないと思っていたものが、妙にリアルで戦場に出るのはこんな怪我が出るほど命がけでリスクが高いのだと理解できた。

「おい、誰がブレス乗りがいねえって？ お前ら見ろよ。此処にいるじやねえか」

ルカがニヤリとシスカへと目を向けて肩に手を回した。

「なあ、シスカ」

「へつ？」

何を言つてゐるのか分からないとでもいつよにシスカは不安げに

ルカを見た。

その様子を見てルカは不敵に笑い、シスカの背中を思いきり叩いた。

「いつた！」

「この俺が説明してやろう。シスカの持つてゐるエオリアキーが光つた先にブレスがある！ そんで、こいつはシスカが現れたことで起動した！ ブレスがシスカに反応したつて事は資格があるつてこつたる。イケるぜ！」

「は…はああつ？」

ルカの簡易的な説明にシスカは、信じられないよつなのを見る目でルカを見て叫んだ。

「無理！ 無理だつて！ 俺なんか、ただの庶民だし騎士でも何でもないよ！ 動かせるわけないから！ イケない！ 全然、イケない！」

大体、怖いし。

死にたくないし。

涙目でルカに抗議するシスカは、自分には無理だと首を横に振つた。

「無理に決まつてる！ 何も訓練を受けていない民間人が戦えるわけ無いでしょ！ あんた何言つてんの？ その子に死ねつて言つてるよなもんよつ？」

怒りの頂点に達しそうなユリアも叫び、ルカを非難した。だが、ロックは少し考えるようになんて首を捻つた。

「君のエオリアキーが反応したのか？」

「え、いや…俺のつて言つた…これは、そもそも騎士隊のもので…俺は届けに来ただけで…その、えつと…ごめんなさい！」

焦つたように頭を下げて、シスカはエオリアキーをロックに渡した。

しかし、渡した瞬間、光は薄れ、次第にただの透明な石に戻ってしまう。

そしてブレスも反応を示さなくなつた。

「……イケるな」

「……へ？」

ニヤリと何かを企むような凶悪な笑みをロックは浮かべ、エオリアキーをシスカに渡す。

再び青い光が瞬き、同じようにブレスも起動する。

「そのキーは持ち主を選ぶ。こいつに乗る資格のある奴以外に光を委ねることは無い。坊主やってみないか？ 寧ろ、やれ」

「や、やつてみるつて？ え、や…やれつて…どうこう」と…ですか？」

ピクリとシスカの額が引き攣つた。

「ブレスに乗つて戦わないか？ 大丈夫だ、死んでも俺が全ての責任を持つ」

「し、死んでも…つて…む、無理無理無理！ 無理です！ 俺なんかが戦えるわけ無いですっ」

首が取れそうなくらいシスカは首を横に振り、涙目で訴えた。

「隊長！ 民間人に戦わせるなんて、いくらなんでも無茶苦茶です！」

「おー、おもしれえじゃねえか。やつてみるよシスカ。こいつで勝つて政府の鼻へし折つてやろうぜ！」

「じゃあ、ルカがやつてよ！ 無理だよ、俺には…！」

面白がるように笑うルカに対してもシスカは拒否を止めず、ルカにエオリアキーを差し出す。

しかし、ルカはシスカの額をペчинと叩いた。

「あたつ」

「お前、さつきこのオッサンが言つた事忘れたかよ。そいつはもうお前のもんだ。このデカブツもな」

「だ、だけど…」

言い訳を探すシスカにエオリアキーを握らせると、ルカはシスカの頭に片腕を乗せて笑った。

「な？ やつてみろつて」

「うつ…そんなん…だつて…」

「頼む、坊主。もう乗れる人間がいない。さつき見たとおり、唯一のブレス乗りはとてもじやないが戦える状態でもないんだ。俺が代わつてやりたいところだが、条件が照合しない。このままだと、この艦も近隣の町も…いや、この世界が奴らに滅茶苦茶にされる」

「隊長…」

男が哀願するように頭を下げる。ユリアは止めに入ろうとしたが、彼の命を預かるという責任の重さを覚悟していることを理解し、それ以上は言えなかつた。

「お、俺がやらないと…みんな、死ぬ…」

「そうだ。出来る限りでいい。危険を感じたら逃げても構わない。少しでも可能性がある以上、賭けたい。どの道、奴らを倒さない限り俺達に未来は無い」

事の重さにシスカは震えた。

もしかしたらさつき運ばれた人間のように大怪我をして五体満足じやいられなくなるかもしれない。

五体満足どころか、死んでしまうかもしれない。

でも、自分が負けたら人類は全滅だ。

自分が敵を倒さなければ、多くの命が失われる。

共に生きてきた友人も恩人も全て。

その重みで恐怖を更に煽られる迷いの中、大きな揺れを感じた。

「うおおおおつ！」

「きやああああつー！」

「くそ…もうこんな近くまでつー！」

大きな揺れに全員、体のバランスを崩してしまいゆつくりと起き上がる。

しかし、シスカは迷いの中で起き上がることなく、伏したままだ

つた。

「俺…俺が…！」

可能性が低くとも、今、沢山の命を守れるのは自分だけ。
だとしたら怖くても何かをやれるのは自分だけなんだとシスカは
体を起こし、カタカタと震える肩を手でグッと押さえ身体を起こし
た。

「俺…やつて、みます」

小さく呟いてシスカはブレスと向き合つた。

「よつしや、それでこそ俺の認めた男だ！バシッと決めてやれ」

「う、うん！」

シスカとルカはハイタッチして、拳をぶつけた。

「よし、じゃあ坊主。改めて頼むな。騎士隊長のロック＝レントだ」

「シスカです。シスカ＝ブルー＝ネル」

「ブルー＝ネル…つて、まさか…」

「え？」

シスカの名前を聞くや否やロックの表情が変わる。

「いや、こつちだ。来てくれ」

「あ、はい」

余計なことは考えまいと首を軽く横に振り、ロックはシスカを連れ
ていく。

「頑張れよ、シスカ」

二人の背中を見送るルカは、腕を組んだ。

「こんな…民間人に頼るなんて…！」

ルカの隣にいるユリアは不安と緊張で悔しそうに小さく呟いたが、
ルカは何も言わず視線を向けることも無かつた。

今は何を気にするよりも友人の背中を応援することだけが今自分
に出来ることだと、ルカはそう思つた。

『準備はいいか?』

コックピットの中に入ったシスカは、緊張の息を吐き、顔をあげた。

「はい…！」

エオリアキーを鍵穴に差し込むと、シスカが乗るプレス…スフオルツアンドは立ち上がった。

「うわわっ…、つと…」

バランスを崩しそうになり、慌てて操縦桿を握り直す。握りなおした瞬間、スフオルツアンドは艦を飛び出しその勢いは止まらない。

それは、シスカが方向転換をして歯止めをきかせることで止まつた。

「な、な、なんだこれ…」

目が回りそうな感覚に酔つてしまいそうで、思つたよりも上手く動かせないことに手に汗を握る。

(…落ち着け。落ち着くんだ、俺…)

深く深呼吸をして操縦桿を握り直す。

今度は勢いをつけることなく、脳内に操作が全て入つてくるような感覚を覚え、一步足を前に出した。

「よし、歩いた」

第一関門突破とでも言つようにしてシスカは、ほつと息をついた。

『坊主、何やつてんだ。敵に仕掛ける』

モニター越しにロックとの通信が繋がる。

「し、仕掛けるつて…どうやつて…」

『遠距離ならライフルやマシンガンがある。接近ならナイフが搭載されてる。上手く使って戦え!』

「そ、そんな！ 扱い方なんか、俺…ツ、うわあああっ！」

しどろもどろに言い訳している間もなく巨人を模したルーディメンツがスフオルツアンドに気が付き、エネルギー砲を発射する。間一髪のところで避けるも、シスカの表情が恐怖で歪み、腕と膝

は震えて笑っていた。

「あ、あ…あんなのが当たつたら…」

『しつかりしろ！ 何もしなかつたら的になるだけだぞ！』

「は、はいっ！」

やらなきややられる。

今、戦場に立っているのは他人じやない。自分なんだ。助けてくれる人なんかいない。

シスカは俯いていた顔をあげた。

とにかく、仕掛けないと。

「うおおおおああああっ！」

敵に向かい、マシンガンを撃ち込む。

戦意高揚のシスカに敬意を払つよう、敵も負けじとエネルギー砲を発射した。

激しいエネルギー砲の粒子がスフォルツァンドに何発も狙い、シスカはそのたびにスフォルツァンドで逃げていた。

「ひいいい！」

やはり怖いものは怖い。

あんなものに当たつたら死んでしまう。

「くつそおおおおっ！ もう、どうとでもなれええええ！」

むやみやたらに攻撃するより、敵の手を封じるのが先だとシスカは涙目で敵へ突っ込んでいった。

接近戦に持ち込めば、なんとかなる筈。あのエネルギー砲は武器の位置的に近いと死角で当たらない。

だが、それに持ち込むにはあまりにも無謀な突っ込み方をシスカはしていたのだ。

早く終わつてほしい。これ以上此処にいたくない。怖い。逃げたい。

そんな事ばかり脳裏に浮かんでくる。

「うわっ！」

躓いて転んでしまう。

「いつてて…。ひつ！」

顔を上げると、至近距離で敵がスフルツアンドを狙っていた。

「ひいいいいつ！ 死にたくないつ！」

情けない声を上げながら、敵から逃げる。

一定の距離を置くと素早くナイフを取り出し、敵に突き刺して体当たりをすると敵がよろけた。

「い、今だ…！」

そこから距離を置くことも無くマシンガンを撃ち込む。

怖くて怖くてたまらないけど、初めて乗ったとは思えない。

自分の手足のように動かせる感覚に、シスカは自分の機敏さに驚いていた。

シスカだけではない。

艦の中にいた誰もが、その戦闘の鮮やかさに目を離すことが出来なかつた。

一方、ブリッジではその様子を艦の者達は唖然と見ていた。

「あれが…初めて乗つた人間の戦い方か？」

ロックは、生唾を飲んだ。

モニター越しに情けない悲鳴が聞こえ続け、戦い方も滅茶苦茶だつた。

しかし、確実にルーディメンツへダメージを与えている。
戦い方を磨けば、確実に化ける素材だつた。

「こりや、いい拾いもんしたな」

ニヤリとロックは笑つて見せると勝利を確信したように頷いた。
「敵前方から高エネルギー反応！」

オペレーターの少女が戦闘の状況を伝える。

「坊主、いいか。闇雲に突つ込むな。遠くから…」

「シスカ！ やれ！ やるんだ！ 正面突破で蹴散らせええ！」

ロックの言葉を遮つてルカが絶叫する。

「なつ…！ お前、何を…。ユリア！ お前、何をしているんだ。

勝手にブリッジに入れるんじやない」

「も、申し訳ありません…！ いきなりこの男が凄い勢いで走り出して…。はあ…はあ…。お、追いつかなくて」

ブリッジに息を切らしたユリアが入り、呼吸を整えた。

その様子に仕方ないとでも言つようによくロックはルカに目を向けて肩を落とし、再びモニターに目を向けた。

「いいか、坊主。生き延びたかつたら言つ事を聞けよ。慣れないお前が出来ることには限界がある」

このまま焦つて闇雲に突つ込んだままだと、死んでしまう確率が上がるだけだ。

必死にロックは指示を送つた。

ブリッジのやり取りと命令を聞き、シスカは操縦桿を握った。
しかし、それを握ったまま、敵からの攻撃を避けるだけで、中々
反撃のチャンスを伺えない。

「遠くからにしても近くても…敵が素早く狙えない…！　さつき
の攻撃もあんまり効いてないし…あんなの当たつたら、死んじゃう
よ！　も、もう無理だよ！」

『シスカ、逃げるんじゃねえ！』

ひたすら逃げ場を探し走り回るシスカの耳にルカの怒号が聞こえ
る。

「ルカ…？」

『お前は一度やるつて決めたんじゃねえか！　だつたら、ちゃんと
やりやがれ！　お前のやり方で！』

「お、俺のやり方？　何言つてんだよ。いい加減、限界が…」

『うるせえ！　お前ほど根性のある人間はこの世界の何処にもいね
えんだ！　自分で限界作つちまつたら、そこで終わりなんだよ…』

「そ、そんなこと言われて…だつて、死んじゃうよ…！」

『その程度の奴にやられるくらいなら死んじまえ…』

「なつ…！」

ルカのその言葉に流石のシスカも頭を熱くさせた。

「戦つてるのは俺なのに…好き勝手言つてんな！　この…馬鹿ル
カアアツ…！」

シスカの怒りと同調するようにスフォルツアンドもパワー出力を
上げていく。

それをさせまいとも言つように敵が一際強いエネルギー砲を発
した。

「ちまちまちまちま…遠くから攻撃してんじゃねえつ…！」

恐怖の震えではなく、やり場の無いルカへの怒りをぶつけるよつ
に突進をして敵の攻撃をエネルギーのシールドで防御し、拳をル

ディメンツの顔に減り込ませる。

「お前を倒して、少しでも早く…ル力をぶん殴る！」

目的が履き違えたことを当然のようにシスカが叫ぶと同時にスフオルツアンドの拳から増幅されたエネルギーが溜まり、手を開くと大きなエネルギーが発せられルーディメンツが爆発する。

その様子をブリッジにいたロックを始め、ル力を除いた全員が硬直した。

「ユリア…あんな防具と武器どうやってつけたんだ？」

「…あんなのつけようがないです。…と/or>いうか初めて見ました」

「怒りと根性で新しいものを生み出したって…解釈でいいのか？」

「現実的には考えられないの…回答できません…」

結果はオーライだが、信じられないことと突っ込み所が多くて開いた口が塞がらない。

その中でルカだけが満足そうに笑った。

「相当、イケてんじやねえか」

新しい玩具を見つけた子供のようにルカはモニターに釘付けになつていた。

しかし、ほつとしたのも束の間、警報が鳴り響く。

「な、なんだ！」

「スフォルツアンドから高度の熱源発生！」

「パイロットはどうしたつ」

「脳波メーター、レッドゾーン！　パイロット生死不明！　コック

ピット内の温度が急上昇しています！」

艦内で警報が鳴り響く中で、バタバタと幾人もの者達が走り出す。

「スフォルツアンドを回収しろ！　パイロットの救出を最優先！　早くしろつ！」

ロックが指示を出すとますます人数は増え、その場を動ける者全

員が機体回収と救護作業に入つた。

「シスカ！ おい、起きやがれ！」

モニターに向かい、ルカは大声で叫んだ。

しかし、シスカにはその声は届かなかつた。

「シスカ！ シスカアアアアー！」

叫ぶことしかできないルカは友人の目を覚めることを願い、喉が

はちきれそうな程にシスカの名を呼んだ。

しかし、スフォルツアンド内で倒れるシスカにその声は届かなかつた。

身体中が熱い。熱くて溶けそうで息が苦しくなる。
このまま死んでしまうのかな…。

そんなことを考えて、ぼやける頭が徐々にまづまづとしてくる。

「う、ううん…」

薄つすらと目を開くと、シスカはベッドの上にいることを認識する。

こつも下宿しているロイドの店の古臭いベッドとは違つ清潔感のある真つ白なベッドだつた。

無機質で殆ど物が置いていない。

横を向くとベッドの隣には何かの波を刻む機械が稼動され、その機械はシスカの頭に取り付けられている。

「なんだ、これ…あぐつ！ う、うう…」

起き上がるうと身体を起こすと頭に激痛が走る。

眩暈がするほどの激痛に頭を抑えずにはいられない。

いう事の聞かない身体と謎の機械に混乱するシスカは目が回りそうだつた。

その時、見たことの無い一人の少女が部屋に入る。

「あ、駄目ですよ。まだ安静にしていな」と

「え…あ、あの…頬は？」

「あ、はい。アニー＝アナリーゼと申します。騎士隊の戦況オペ

レーターをしてこます」

「あ、う…うん。俺は…」

「シスカ＝ブルーネルさんですよね。もう」の艦であなたを知らない人はいないと思いますよ」

ふふ、とにかくに笑い、アニー＝は手に持ったタオルでシスカの汗を拭つた。

「え、な…何で？」

「シスカさんはルーディメンツを倒した英雄さんですから。ただ、あの後コックピットがオーバーヒートして…あと少し遅かつたら手遅れだつたみたいです」

アニー＝の言葉に想像したシスカは背筋を凍らせ、怯えた表情を浮かべた。

「お、俺…ちゃんと生きてるんだよね？」

「はい。足もついてますよ」

「良かつた…本当に良かつた。もう俺…あんな怖いの御免だよ」

「え？ シスカさんって…騎士隊に入隊するんじや…」

「はつ？」

アニー＝の言葉に耳を浮かべた。

誰が何に入るつて？

「「めん、もう一回…」

「はい。だから、シスカさん…騎士隊でのプレスパイロットとして入隊するんですね？」

「なつ！ななななな…！」

動搖とショックで言葉にならない。

取り付けられた機械の波は激しくなり、シスカは目を回した。

「無理！ 何が無理つて、あんなの乗りたくないし戦いたくないし

！ 騎士なんて無理だし！」

「シスカさん、落ち着いてください！」

「うう…」

アニー・ミに怒鳴られ、シスカはしょんぼりと肩を落とす。その様子にアニー・ミは苦笑をして機械を止め、機械からシスカの頭へ伸びてるコードも外した。

「これは…？」

「シスカさんの脳波状態を示す機械です。倒れた時、以上に高い脳波粒子が出てそこから脳死状態だつたので」

「の、脳死？」

「はい。でも、三日前には通常の脳波に変わりましたのでシスカさんの意識が戻るのを待つだけだつたんです」

「み、三日？ 待つて、あれから何日…」

「今日で七日目です。あ、でもあまり動くと…」

「あ、大丈夫。こう見えて身体は丈夫だか…ら？」

シスカが心配をかけまいとアニー・ミに答えようとした時、布団がもぞりと動いた。

「きゅ？」

「え？」

布団から飛び出し、白いゴムボールのような感触の動物がシスカの身体をよじ登り、頬を舐めた。

「うわっ！ な、何？」

「へー、もう生まれたのか」

シスカの肩に乗る謎の生き物をつつく突然現れた男に、シスカもアニー・ミも驚きの表情を浮かべた。「ジェント副隊長」

見覚えがあつた。

先日の戦闘で大怪我をした人物だ。

左目には眼帯をしている。

引き摺っている右足は恐らく義足だろう。

ジェントは優しげな表情をアニー・ミに向けた。

「すまない、アニー・ミ。彼と二人で話がしたい」

そして、再びシスカに向き直る。

意味深なジェントの笑顔と謎の生き物に、シスカは戸惑いを隠せない表情を浮かべていた。

第4話 ソルフェージュ

「騎士隊の入隊…って、俺には、無理です…！」

震える声で、シスカは俯いた。

シスカが意識を失っている間、先日の戦闘の映像を見ていた上層部がシスカを騎士隊に入れる手続きを行っていた。

スフォルツァンドに唯一乗れる人物。

そして先日の戦闘でルーディメンツを倒したという功績。

戦力として、シスカを手放したくなかった。

「この間の戦い…。初めてにしては…いや、君のあれは熟練した騎士に値するほど君のドレスの扱いが巧みだつた」

「でも、あの時は…無我夢中で…」

「それでも、上は高く評価していたよ。また、興味も示している。勿論、戦力としても欲しい逸材だ。でも、それ以上にシスカ＝ブルーネルという君個人に対する興味を持っている」

「え、俺…？」

「君は、ドレスを設計した技術者…ブルーネル夫妻の息子だそうだね？」

「は、はい。でも、父さんと母さんはもう…」

「うん、既に亡くなっている。六年前にね」

「はい…」

両親の死を知らされた時のことを思い出し、シスカは俯いた。

「辛いことを思い出させて悪かった。しかし、君とスフォルツァンドが共鳴したことにはかしらの可能性を感じているんだ。これは、君とブルーネル夫妻を繋ぐ形見に等しいものなんじゃないかい？」

「だけど、それとこれとは別で…！」

「…こういう言い方は、あまりしたくないんだが」

眉間に指を添えて、ジェントは溜息を吐いた。

「正直、君に拒否権はないんだよ」

「え…？」

シスカは顔を上げた。

拒否権が無い？

どういうことだろうか。

「君が元々この艦に来たのは何の為だ？」

「そ、それは配達に…。…あつ」

シスカは、艦に来たいきさつを思い出す。

政府極秘の配達物を開封してしまった上に成り行きとはいえ、それを持ち続けてしまった。

立派な犯罪で、捕まつても何ひとつ文句は言えない。

捕まるどころかこんな大きな犯罪を犯したら最悪、死刑になる可能性もある。

「分かつてくれたみたいだね。明日にでも本部に来て欲しいんだが… 身体は大丈夫かな？」

「は、はい…。大丈夫…です」

何も言い返せず、俯いて布団を爪が食い込むほど握り締めるシスカを見兼ねたように謎の生き物がシスカの頬を舐める。

「おー、随分懐かれてるね。俺の時は全然懐かなかつたのに」

「あ、あの… これは一体…」

「ああ、そつか。何も聞いてないから知らないんだ？」

「へつ？」

目をパチクリとさせるシスカに小さく笑つてジェントは続けた。

「そいつはエオリアキーから生まれた生態系なんだ。普通は孵化するのにもっと時間かかる筈なのにな」

「…はい？」

「ブレスに乗り続けることでそいつは成長し、そいつとの信頼でブレスは強くなる。ブレス乗りとしては貴重な存在なのさ」

「…ということは…エオリアキーの分身って考えていいんですか…」

？」

「物分りがいいな」

「いえ…そんなこと…」

言いかけた時、シスカの瞳が戦慄いた。

「ルカ！ ルカはっ？」

自分と同じようにこの艦に来たルカが何の処罰を受けない筈が無い。

自分が目を覚まさなかつた七日間、ルカがどうなつたのか。シスカの中で嫌な予感がして声を荒げた。

「心配しなくていい。彼は今個室に監禁してゐる。食事も与えてるし大丈夫だ。ただ、退屈のせいか暴れてはいるがね」

「よ、良かつたあ…」

ほつと一息つくシスカにジョンントは笑つた。

「彼も君のことを心配してたよ。シスカに何かしたらこの俺がぶつ飛ばしてやる！ てね」

「…何やつてんだよ。自分の立場考えろよ、少しさ…」

小さく溜息を吐いて頭を押さえるシスカに再びジョンントは小さく笑う。

「じゃあ、明日迎えに来るよ。それまでゆっくりと身体を休めるといい」

そう言つてシスカの返事を待たず、部屋を後にした。

「…でも。俺にはやつぱり…騎士隊なんか、無理だよ…」

声を搾り出すように震えてシスカは呟いた。

「きゅー？」

心配そうに謎の生き物は、シスカを見遣る。

それに見向きもせず、シスカは布団に潜り縮こまり、ただ震えていた。

呆然とシスカは、その建物を見ていた。

今まで見たことの無いくらい巨大な建物。

「Jの建物を見てしまえば、ブレスなんて小さな人間に見えてしま
い、自分達はそれ以上にちっぽけな者だと思い知らされる。
これが、世界で一番大きな建物……。

政府直属の騎士隊を取り纏めるソルフェージュ。

ごくりとシスカは息を飲む。

今から自分がその組織の関係者になるとと思うと、緊張で震える。
そんなシスカの背中をジェントが優しく叩く。

「行こうか？」

「は……はい」

緊張したままシスカは、ジェントの後ろへついていった。

中に入ると、鍊機動を使った機械が数多に作動していた。
どれも興味の引くもので、アシスタンントロボットや建物全体を把握するためのモニター や関係者のみ使用が許される指紋認識することで開くことの出来る扉。
「……凄い。まだ汎用的に使われてないシンフォニーハッタまで登用されてる……」

自然とその言葉が出て、シスカは目を輝かせる。

機械好きで自然に鍊機術の知識を蓄積し続けたシスカにとつて、此処の最新技術は宝の山だった。

「ほう。随分と博識な少年だな」

背の高い中肉中背の軍服を着た男が歩いてきた。
どうやら、迎えらしい。

鍊機術に夢中になつてたシスカは、現実に引き戻され言葉を搜していた。

「す、すみません。えと……あ、その……」

「何を謝つてるんだ？ シロフォン＝サステインだ。役職は大尉にあたる。… 錬機術にお熱なのは良いが、先に用事を済ませようか。

シスカ＝ブルー・ネル君

「は、はい…！」

やつてしまつたとばかりに、シスカは肩を落とした。どうしてもこういった技術を見ると興奮してしまつ。

ずっと、昔からそうだった。

錬機術が、唯一の物質と残る家族との絆で自分にはこれしかないから。

だから、その興味だけは何があつても薄れることはない。自然にそう出来ている。

それでも、この場所に来た意味を考えると『氣を落とさずにはいられない』

れなかつた。

＊＊＊

シロフォンにとある一室に案内される。

「失礼いたします」

そうシロフォンが声をかけると、扉が自動でスライドされる。部屋の主の操作によるものだ。

入つても良いという証拠だ。

どんな人物が待ち構えてるのかと思つと緊張で胸の高鳴りが止まらなかつた。

部屋に入ると妙な匂いがした。

これは、煙草の臭いだ。

顔を上げると、アシスタントロボットに灰皿を持たせ氣だるそうに椅子に座り堂々と煙草を吸つている女性がいた。

眼鏡をかけたスタイルの良い女性だ。

格好だけ見れば、キャリアウーマンに見えるがそのワイシャツの着崩し具合で胸の谷間が覗く。

灰皿には山のような吸殻。

「おー、やつと来た？ 待っていたよ」

「ヤリと笑い、その女性は吸殻を揉み消し立ち上がった。まさかと思うが… もしかして、彼女が…」

「初めまして、カペラ＝ノクターン。一応、どうでもいいけど… 階級は大佐。ま、よろしく」

あまりにも軽い言葉だった。

「は、はい。シスカ＝ブルーネルです。あの…」

しじろもじろのシスカに、カペラはチッと舌打ちをする。

「あア？ 何だよ、ルーディメンツを瞬殺したっていうのに思いつきり草食系のガキじやねえか。シロフォン、マジでこいつがあのブルーネル？」

「はい、間違いありません。先日、資料をお渡ししましたが…」

「んなもん見るかボケ。あたし見る資料は戦績とサインするものだけつて知つてんだろうが。ま、いいや… 話には聞いてるし、あの映像で力は分かつたしな」

そう言って、カペラはシスカに顔を近付けて睨む。

まるで性質の悪いチンピラだ。

「成る程…。面立ちは似てんな」

「え…？」

「ん、いや別に。まあ、取り敢えず… 今日からお前はあたしの部下… つまり騎士だ。よろしくつづーか、『愁傷様』

人事のように言う。

とにかく、ルカとは違う意味で怖い人間だ。

しかし、スマッシュ育ちのシスカはチンピラなど怖くないがこれが騎士隊のトップとなると話は別だ。

カペラに対する不信よりも、シスカは彼女の言葉が胸に刺さつた。騎士になる…。

その言葉が重い。

「ま、でもジエントがこの状態だ。人を動かすほど余裕はねえし、

適応者もない。…悪いけど、当分一人で戦ってくれ

「そ、そんな！ 無理…俺には、無理です！」

「こないだの戦い方なら問題ないだろ。命令だ。やれ」

「だつて…あんなの、俺だつてわけわかんなくて…次、同じように

いくか分からぬし…それに…」

「あー、うぜえ。逃げ道作るよつに言い訳すんじゃねえよ。もう一

回言つぞ。命令だ、やれ」

につこうとカペラは笑う。

「…ッ」

苦しそうにシスカは俯いて拳を握つた。

「おい、シロフォン」

「はつ」

「あとよろしく。煙草切れた」

そう言つて、カペラは部屋を後にする。

その背中をシロフォンとジェントは見送つた。

「相変わらず適當な人だなあ」

「しかし、それ故の力と信頼があつてこそ、この場を束ねられる。ブルーネル。軍服とエンブレム、それと資料を用意した。今日から、身に着けるように。資料は戻つたら熟読し、現場のレント少佐に従え」

「…」

シスカは言葉を発せず、動かなかつた。

シロフォンが渡した紙袋をジェントが代わりに受け取つた。

「サステイン大尉。あとは俺が…」

「うむ…」

シロフォンは頷き、ジェントを全てを委ね、その場を後にした。

「さ、行こう。シスカ」

ジェントは、シスカの肩を抱き歩かせた。

現実味が沸かなくて、シスカはただ呆然とするしかなかつた。言葉でしか理解できない現実が…明白になつていく。

そんなシスカをジョントは、眞面目な顔つきで見ていた。
唯ひとつ言えることは、こんな状態のシスカが戦場に出たら間違
いなく勝てない。
それだけだつた。

第5話 決意

騎士隊の艦に戻ったシスカは、部屋に閉じ籠りベッドに横になっていた。

強制的に正式入隊。

しかも、前線に出るのは自分一人。

どうしてこうなった？

誰のせいでこんなことになつた？

ルカだ。

ルカが積荷を開けなければ…「こんなことにならなかつた。違う…。

ルカのせいじゃない。

誰のせいでもない。

人のせいになんかしちゃいけない。

分かつてる。

分かつてるけど…俺は、俺じゃない原因を探したがつていい。

「最低だ、俺…」

掠れた声でシスカは呟いた。

「様子はどうだ？」

エレベーターでジェントと居合わせたロックは、ジェントの顔を見ずに尋ねた。

「予想通りかな。震えて部屋に閉じ籠つてゐる」

「ま…かなり強制的にやらせたからな。ただの民間人がいきなりブレスに乗つたり騎士隊に入隊したり…展開が早すぎて、戸惑わない

方がおかしいな

「それに加えてあの性格…か。まあ、それだけ人と時間が足りないんだけど。悪いね、俺がへマしちまつたせいで」

「いや、よくやつてくれたな。義足の調子はどうだ?」

「あんまり慣れてないけど何とか歩けるくらいには。まあ、でもロック隊長も人遣いが荒いってか何と言つか…」

「すまん。人手が足りないんだ」

「分かつてる」

チーンと音がして、エレベーターの扉が開かれた。

「んじゃ、行つて来ます」

「ああ、気をつけて行けよ」

笑いながら敬礼するジョントに苦笑を浮かべてロックは手を振つた。

エレベーターの扉が閉まり、再び動き出す。

「民間人の子供に無理矢理戦いを強要する大人か。人手不足とは言え、本人としては堪らないだろ?」

深い溜息を吐いてロックは頭を搔く。

「まあ、早いとこ立ち直つてくれることを祈るしかないか」

「そうでなければ、使い物にならない。」

折角の適応者に簡単に死なれたのでは、それこそ取り返しのつかないことになる。

戦う術をなくしたら、人類が絶滅してしまう。

その為に、自分達がフォローをしてやらないといけない。

万全な状態で戦えるように、環境もコンディションのケアも仕事だ。

隊長として、一体何が出来るか…ロックは頭を悩ませた。

部屋を出た後、シスカの足は自然に格納庫へと向かっていた。

与えられた軍服は、まだ着ていない。

今は、袖を通す勇気がない。

シスカの肩には、エオリニアキーの具現化した謎の生き物が乗っていた。

シスカは、氣にも留めなかつた。

ただ勝手にこの生物がついてきただけで、氣にする余裕なんてなかつた。

スフォルツァンドを見上げた。

大きな大きなその存在は、自分の手には余りすぎて捨いきれない。あの時、どうやって戦つたのかよく覚えていない。だから、次に戦つことを考えると凄く怖かつた。

「……」

シスカは、ぐつと胸を抑えて俯いた。

「ちょっと、あんた」

背後から声が聞こえる。

「うわっ！」

突然声をかけられ、シスカは驚いて声を上げる。

「そこに立たれると邪魔なんだけど」

「ごめん。えつと……」

「ユリア＝アナリーゼ。メカニックよ。これでいい？ もうもどり

いて

「あ……うん」

ユリアの氣難しい顔に怖氣付いて下がると、シスカはその場を去ろうと踵を返した。

「ちょっと、あんた」

「え……？」

ユリアに声をかけられ、振り向く。

「あのバイクって、あんたの？」

格納庫に置かれたシスカのバイクを指差す。

「うん、 ただけど……」

「整備とかもあんたが？」

「え、うん。… 何で？」

「何でって、鍊機動エンジンとか部品とか普通の民間人が改造するには難しい部品ばつか使ってるから。何？ 整備の仕事でもやってんの？」

「え、いや…。俺は、ただの配達のアルバイトだけど」

「…鍊機術の知識があるってジエント副隊長から聞いたけど、知識どこの話じゃないわよ」

「え…？」

溜息をついてユリアは、少し考えた後にシスカの腕を引いた。

「うわっ」

「ちょっと来て」

ユリアに腕を引かれたまま、シスカはついて行く。

「一体何事だらうか。

自分が何かしでかしたのではないかと不安になる。

連れて行かれたのは、奥にある機関室だった。

「一箇所が作動しないのよ。この艦が今、飛行出来ないのはこれが原因」

「そりなんだ…」

ぼうっと機関室を見渡し簡略的な感想を述べるシスカに、ユリアは訝しげな表情を浮かべる。

「…手伝つて」

「え？」

「あたし、そこまで鍊機動エンジンに詳しくないのよ。業者もあちこち忙しくてこいつちまで回らないし…。飛行機関が無いと不便なのが、色々とね」

「でも…俺、手伝えるかな」

自信なさそうにシスカが言つと、ユリアは少し離れた場所からいくつかの機械を持ってくる。

そしてそのうちのひとつをシスカに向けた。

「これは？」

「え？ 錬機モーターのアゴーギグだよね」

即答。

ユリアは次の機械を取り出す。

「これは？」

「浮遊CPU。タブ」

そして更に次を取り出す。

「これは？」

「錬機チップ。チター」

全て即答だつた。

どれも一般的に使用用途がない部品ばかりだ。

ユリアは悔しそうに拳を握つた。

「…ぐ、悔しい」

「え…？」

「あんたがマニアックすぎて悔しいって言つてんのよー。」

ペシッとユリアはシスカの額を叩く。

「いてつ」

「あー、もう！ チンタラしてんな。早く来なさい！ そんだけ詳しければ、業者なんかいらないわよ！」

「え、ちょ…ちょっと…」

無理矢理、ユリアはシスカの腕を引っ張り、制御室へと連れて行つた。

少しだけ忘れられた。

沢山の命を抱えるプレッシャーから、少しだけ逃げる時間が出来たと、シスカはそう思った。

機関室ではユリアがモニターでの操縦、シスカが飛行機関の内部での調整を行つていた。

「ユリア、タブ一一番六番上げて」「わかつた」

シスカの指示に従い、ユリアはモニターを操作する。

機械の一部が上に上ると、シスカは更にそこに潜り込む。その顔は普段の頼りない表情と違い、活き活きとした職人の顔をしていた。

オイルまみれで器用に部品を丁寧に取り付けていく。

それは、まるで機械に息を吹き込んでいくようだった。

そんな姿にユリアは、拳を強く握った。

悔しいが、メカニック技術では歯が立たない。

それを見せつけられた気がして悔しかつた。

この艦では誰よりもメカニックでは一番の筈の自分が完敗だと思うと悔しい。

「次、七番と十一番お願い」

そんなシスカの次の指示。

だが、ユリアは拳を握つて歯を食い縛つたままだった。

「…ユリア？」

反応がないユリアに何かあつたかとシスカが顔を上げてゴーグルを外す。

俯いていたユリアに駆け寄る。

「…大丈夫？ どうか、具合でも…」

「触らないで！」

シスカが手を伸ばそうとした瞬間、ユリアはその手を叩いて振り払つた。

「…ごめん。汚れちゃうよね。えっと、その…大丈夫？ 結構時間経つてるし…疲れた？」

「…違うわよ。何でもないから。次、何処？」

「え…タブ七番と十一番。多分、これで故障部分は終わると思う。まだ飛べないけど、準備くらいなら…。多分、飛行まで一気に手を回すと、早くても寝ずに三日くらいかかるから」

「そんなにかかるもんなの？」

「う、うん。プログラムで設置しても… シュミレーションテストと欠陥調整、浮遊速度と高さの計算、耐熱衝撃テストとか…」

何で初めて触ったのにそんなことまで分かるのか、本当に整備士じゃないのかと疑ってしまう。

ただの知識だけだったら、此処まで実際に手を付けられるわけがない。

少し、意地悪をしたかつただけだ。

民間人が簡単に戦場で戦つて騎士隊に無条件で入れたシスカが妬ましい。

ずっと勉強して何回も試験に落ちて、漸く入れた自分と全く違う。努力もしないで…此処にいる。

そんな気持ちがあつて、嫉妬していただけだ。

自分が如何に幼稚か分かる。

「やっぱ、あんた…メカニック業やつてたでしょ？」

「や、やつてないよ」

「…絶対、暴いてやるわよ！ あんたの秘密… 早く行くわよ、一番と十一番よねつ？」

「う、うん」

一体何事がと流れについていけないシスカだつたが、早いとこ終わらせてしまおうと再び飛行機関に潜り込んだ。

そして暫く経つと、漸く故障された部分が修復された。

「悔しいけど、本物だわ。あんたくらいのメカニックがいればいいのに…」

「…」

再び現実に戻されて、シスカの表情が暗くなる。

「でも、あんたの仕事は別よね。ま、頑張りなさいよ」

「頑張るって…何を頑張るんだよ」

語氣を荒くして、シスカは咳く。

「一人あんなのと戦えなんて、俺に死ねって言うのかよ！ 死ないよう頑張れってことか？ それとも死んでもいいから敵を倒せってことかよ！ 無理だ、そんなの…俺は…俺なんか…」

捲くし立てるシスカの言葉の途中でコリアの平手打ちが、シスカの言葉を遮った。

シスカは、腫れたその右頬を抑えた。

「甘つたれてんじゃないわよ」

「だつて…俺なんか、勝てるわけないよ。こないだのなんてまぐれだし…次、同じことが出来るかなんて…」

「何言い訳して、自分正当化させようとしてんのよ…。じゃあ、何であんたは此処にいるの！ 何ですぐ逃げようとするのよ…。」

コリアは、強くシスカの胸倉を掴んだ。

「無理だつて決め付けて、自分を卑下してそれで何？ そんなに抱え込む必要なんかある？ 自分が周りに認められてるなら、自分が出来ることやりたいことを貫きなさいよ！ 何でスフォルツァンドに乗つたのよ！ あんたのそういうとこが嫌いなのよ、あたしは…」

「俺は…怖くて…でも、俺がやらないと皆死んじゃうつて…皆を守らなきゃつて…でも、怖い…怖いんだ！ 何が悪いんだよ！」

「だから何よ！ いいじやん、そんなの怖くたつて！ あたし達だつて戦つてんのよ！」

コリアのその言葉に、シスカは止まった。

「え…？」

言つてゐる意味が分からぬ。

戦つてゐるのは自分だけじゃない？

「パイロットとプレスを万全な状態にして、常にサポートする。それがあたし達の仕事。パイロットが命をかけて戦つてるなら、あたし達は命がけで最良の環境を作る！ パイロットの命を預かるのがあたし達の仕事なの！ 一人で戦えるわけなんてないんだから、思いつきりあたし達を頼りなさいよ！」

真摯に向けたコリアの表情にシスカは、この目を逸らしてはいけ

ないと思つた。

怖くてもいい、怖かつたら頼ればいい。

その言葉が、安心を与えてくれる。

「きゅー」

地面にいた謎の生物がシスカの身体をのぼり、肩に伝わると頬を舐めた。

「…一緒に戦つてくれるのか?」

「きゅきゅきゅつきゅー」

任せろとばかりに、それは頷いた。

分かつていた。

逃げたかつただけだ。

誰かが助けてくれるのを待つていた。

でも、毎回誰かが助けてくれるなんて甘い世の中じやない。

だつたら、俺が…俺が、手を伸ばす側に入りたい。

だから…!

「…ありがとう。ユリア」

シスカは、ユリアの手を解いた。

まだ、恐怖は残つてゐるが、決意を固めた瞳だつた。

「俺、頑張つてみる。何処までできるか分からぬけど…多分、その…出来る事は少ないと思つ。でも、皆が支えてくれるなら…きっと、怖くても大丈夫な気がするんだ」

「…シスカ」

先程の臆病風に吹かれたシスカではなく、まだ頼りないけどそれでも充分だつた。

そして、シスカは柔らかい笑みを浮かべる。

緊張して泣きそうで張り詰めていた顔ではない。

「よしぃ」

自分の両頬を叩いて、気合を入れたシスカは謎の生物に笑顔を向けた。

「一緒に頑張ろうな、スフォル」

「きゅつ」

その言葉にユリアは首を傾げた。

「スフォル?」

「あ、うん。エオリアキーの具現化された生き物だし……こいつの場合、スフォルツァンドだし。長いから、スフォルで」

その言葉に、ユリアは噴き出して笑った。

「何それ。単純すぎ」

くくつとユリアは、笑いを堪えた。

「な、なんだよ。いいじゃないか……こいつだって気に入ってるんだし」

「ま、何だつていいけどね。……それより、あんた」

「え…?」

「シャワー浴びたら? オイル臭いし。悪いけど、そのままでコッシュピットに入らないでよね。後処理大変だから」

「あ…う、うん」

思えば、自分はオイルだらけで汚れることに気付いた。服も顔も汚れていて、流石にこのままでいたら、スフォルツァンドが可哀相だと思うのは否定できない。

それに、覚悟も出来た。

戦う恐怖はまだあって、考えるだけで震えそうになる。

それでも、みんなも戦ってくれている。

その人達の助けになりたい。

そう思うと、少しだけ勇気が湧いて来る。

一人じゃない。

ただの捨て駒なんかじゃないと、そう思えた。

ソルフェージュ本部。

ジエントは、再びカペラに会いに行つた。

傍らにはシロフォンもいる。

「じゃあ、頼むよ。お前も今日からあたしの部下だ」
煙草を吹かして、カペラは笑った。

その人物も同じように不敵に笑う。

「おうよ、任せておきな！ このルステイカ＝ピッティカードので

つけえ花火見て驚きやがれ！」

そう言つて、エンブレムと軍服を手に取つたのは、ルカだつた。

「あ、でもまだ戦闘は出られないよ。ジェントの代わりなんだし、ルバートも今修理中。ま、周りに迷惑かけない程度に大人しくしてな」

「んだとオ？ ジヤ、あれか！ 僕の派手なステージは？ ルーデ

イメンツの打ち上げ花火はつ？」

「暫く後だね」

「くつそおおおおお！」

ルカの悲鳴がソルフェージュ内に響いた。

その後、うるさいとカペラに蹴られシロフォンに叩かれジェントの毒舌を喰らつたルカは肩を落とした。

こうして、彼も騎士隊に入隊することになった。それもジェントの後継として。

その事実をシスカは、今は知る由もなかつた。

第6話 蜘蛛の脅威

「んで、話つて何だ?」

ロイドの店に戻ったシスカは、今までのあらましを話した。
そして、今後の自分のことを説明した。

積荷を勝手に開けたことの謝罪。

騎士隊に入隊して、ブレスパイロットになること。
そして、この店を辞めること。

「なるほどな。まあ、騎士隊と一足の草鞋は無理だしな
「勝手ですみません。でも、俺…」

「何言つてやがる。おめえが決めたことだ。やるからにせ、しつかりやれ。…と、その前に」

ロイドは、拳を「キッ」と鳴らし、シスカの頭に拳骨をした。

「いつて!」

ゴツい拳の第一関節が思いつきり当たつて痛い。

半分涙目になり、シスカは頭を抑えた。

「積荷勝手に開けやがつて。馬鹿か、お前らー、つーか、ルカも一緒だつたんだろ? あいつはどうした

「それが…ちょっと、わかんなくて」

「あ? どういうことだ」

「なんか、捕まつてるらしいんだけど…余つのも駄目だつて
「ま、あの野獸は何するかわからんねえからな」

「や、野獸つて…」

はは、と苦笑するシスカの頭の上にロイドの大きな手が乗る。
優しい撫で方だ。

「ま、あんま氣イ張るなや。おめえの部屋はそのままにじとくから

よ

「はは、うん。ありがとつ。でも…」

頬を搔いて笑うシスカは、何かを決意したようなそんな笑みを浮

かべた。

「逃げ道は、自分で作らないって決めたから」

その笑みに、ロイドは喉元で笑つた。

弱虫シスカなんかじゃない。

まだ頼りないが、強い意志を込めたその表情に成長したのだと嬉しくなつた。

しかし、何処か無理してその意思を固めたように見える。

「ま、人間やろうとしてすぐ出来るものとそういうじゃないものがある。ゆつくりやんな」

「…今まで、お世話になりました」

最後の教えを感謝すると同時に、今までの礼を含めシスカは頭を下げた。

こんなに自分のことを考えてくれている恩人の為にも自分は、

守られる側”ではなく”守る側”にいたい。

その為に、戦う。

怖くても、少しずつ…出来る」ことを。

騎士隊に戻るとシスカは、軍服に袖を通し左肩にエンブレムを付けた。

きつちりとした着方はどうも堅苦しくて苦手だった。

胸元のボタンを二つ程外し、袖は七分に捲くつた。

軍服をいかに動きやすく着こなす為の措置だった。格納庫でスフルツアンドを見上げる。

「おー、似合うじゃねえか」

「ロック隊長…」

背後から聞こえたロックに振り向き、シスカは顔を強張らせ、敬礼をした。

「本日付より、騎士隊ブレスパイラットとして尽力させていただき

ます。シスカ＝ブルーネルで……」

折角の堅苦しい言葉が最後まで言えなかつたのは、言葉を噛んでしまつたからだ。

「あ、そ……その……。あう……」

顔を赤くして恥ずかしそうに慌てるシスカにロックは笑つた。

「え、な……わ、笑わないで下さい！ 僕だって慣れない言葉使って……えと……」

「いや、悪い悪い。ホント、そういうとこ『ゼウスさん』に似てるな。顔はジエシカさん似なのに」

「え……」

ロックの言葉から両親の名前を出されてシスカの表情が固まつた。「ああ、アレだ。プレスの設計チームがあの人達がいた研究所だからな。俺も昔、世話になつたんだよ」

ロックは、シスカの背中を軽く叩いた。

「ま、あんま氣張るなよ。俺達もいるんだからな」

「あ……はい」

ぼうつとシスカは、ロックを見た。

この人が騎士隊の司令だなんて思えなかつた。

確かに戦闘での指示は、それっぽいが目の前の人物は妙にフランクで……。

「どうした？」

「あ！ い、いえ……何でもないです」

「お前なあ……」

ロックは、呆れたように溜息を吐いた。

「言葉飲み込むのやめろよ。ストレス溜まるし、周囲にも良い影響与えないぞ」

「……でも」

「でもじやねえ！ 気合を入れろシスカアアアー！」

ロックから目を逸らしたシスカの背中にぶつけるように大きい声が響いた。

ハツと振り向くとそこには「王立ちのルカがいた。

軍服のボタンを全部外して、胸元が全開になつている。

シスカが驚いた顔で瞳を戦慄かせると、ルカはニヤリと笑つた。

「何、豆が鳩鉄砲喰らつた顔してんだよ」

「それ、逆だから」

鳩が豆鉄砲喰らうだと内心冷静に思いながらも、ルカが軍服を着ている事実にシスカは驚きを隠せなかつた。

「何でルカが軍服着てんの？……誰かの身包み剥がして着たの？」

「お前、俺を何だと思つてんだ？　あア？」

「いや、だつて…信じたくないんだけど…まさか。いや、「冗談だろ

？」

「冗談なわけあるかよ！」

ビシットルカは、天井を指差した。

「このルスティカ＝ピツツイカード！　騎士隊ブレスパイロットとして就任！　でつけ花火上げてやつから、覚悟しやがれイ！」

「……」

シスカは、手元にあつたレンチをルカに投げ、それはルカの頭に直撃した。

「いっでえええええ！　てめえ、何しやがる！」

「寝言は寝てから言えよ！　現実に持つてくんna！」

「寝言じやねえ上に、信じらんねえからつてこんなもん投げんじゃねえ！　下手したら死ぬぞ！」

「だつて、何でルカが…！　これ以上ブレスないだろ、此処に！」

「あ、それ俺の後継」

シスカとルカが取つ組み合いをしている所にジェントが現れた。

「よう、お勤めご苦労さん」

「一応、俺：安静にしないといけないんだけどね」

ロックが手を振ると、ジェントは苦笑する。

そして、再びシスカとルカに目を見遣る。

「俺の乗つてたルバートとの相性ばっちり。下手したら俺よりもね。

現に俺つて右足と左目潰れちゃつたから戦えないし。だから、ル力の言つことは本当だよ」

「まあ、まだ修理中だし出撃は出来ないけどな」

「そ、そんな……」

シスカは膝を落とし、頭を抱えた。

心強い味方ではある。

しかし、それ以上に……。

シスカは、ル力を睨む。

「んだよ、やんのか？」

「馬鹿ル力」

シスカはぼそりと呟き、走つていく。

「あ、テメ……！ 待てコラア！ やんのか？ おい、やんのか！」

ル力がシスカを追いかける。

その慌しい姿にロックは、深い溜息を吐く。

「やれやれ……元氣があるんだか無いんだか」

「彼、あんな表情もするんだね。これは、ル力を配置して正解かな？」

「どうだらうな」

「え……？」

安心するジエントだつたが、ロックは一人が去つた入り口を見た。「あいつの性格だ。友達を危険な目に遭わせたくない。大方、そんな所だろ」

「だからこそバイオレンス？ 成る程。でも、あいつらだつたら上手くやつていけそうな気がするよ」

「珍しいな。お前がそこまで目を置くなんて」「んー……というか、面白いタイプの一人だからかな。期待はしているけど、楽しみだよ」

「期待してねえのかよ。やっぱ、お前らしい」

ロックとジエントは笑つた。

今後、どんなアクションを若い一人が起こすのか楽しみと言つ意

味では共感出来た。

そんな中、艦内に警報が響いた。

シスカが初めて戦闘に出た以来の警報だ。

ロックとジェントは、ブリッジへ。

ルカと戯れていたシスカは、格納庫へと走った。

スフォルツアンドの中で、シスカは目を伏せ小さく深呼吸をした。
精神のを集中させ、操縦桿を握る。

「スフォルツアンドとの同調が…。これ、ビニまで上がるんだ」
ジェントがシステムモニターを見ると、シスカとスフォルツアンドのシンクロ率を表すメーターが上がっている。

最初に乗った時とは比べ物にならないくらいの安定したシンクロ率。

「まだ、テストもしていらないのに…。相性が良いと言つよりも、これじやあまるで…」

その後の言葉をジェントは、飲み込んだ。

スフォルがシスカの肩を降りてエオリアキーに変化し鍵穴に入り込むと、シスカはゆっくりと目を開きエオリアキーを捻った。

スフォルツアンドの目がカツと開き、動き出す。

シスカの手は小さく震えていた。

いくら、前向きに考えても怖いものは怖い。

周囲もサポートしてくれるのは、分かってるけど…それでも理屈とは違う。

「…ツ、落ち着け。落ち着けば…きっと…」

そう自分に言い聞かせるが、手の震えは止まらない。

『シスカ！』

通信でルカの声が聞こえた。

また勝手に通信に割り込んできたのは、安易に想像出来る。

『此処でお前を縛るもんなんて何もねえ！　いいか、お前はお前の思ひように進め』

「ルカ……」

『お前はもう弱虫でも何でもねえ。お前の傍には俺達がいる！　だから思いつきり暴れて来い』

いつもの無茶無謀とは違う頬もしく心に勇気を貰えてくれる言葉だった。

その言葉に、不安な表情から勇ましい表情になり頷いた。

「スフォルツアンド、シスカ＝ブルー・ネル。出撃します！」

そう言つて、スフォルツアンドは艦を飛び出した。

着地すると、そこに見えたのは巨大で足が沢山生えた蜘蛛のようなルーディメンツだった。

「こないだと形が違う……」

『ルーディメンツには、色んな種類がいる。そいつに捕まると厄介だ。遠距離からの攻撃をメインにしていけ』

「は、はい！」

ロツクの言葉にシスカは頷いて、スフォルツアンドがビームライフルを構えて敵に向かつて撃つ。

ビーム状の粒子が敵を貫いて、轟音が響いた。

「や、やった！」

一発で倒せた。

自分でも出来るんだけど、シスカの中に僅かだけ自信が沸いたその時だった。

『シスカ、逃げろ！』

「え…？」

気付くのが遅かつたか、背後にいたルーディメンツが糸を吐いてスフォルツアンドを拘束した。

「うわっ…！」、「こんなものっ」

ビームサーべルで糸を切ろうと操縦桿を動かした。糸に絡まれて身動きが取れなかつた。

「な、何で…？」

それどころか、凄まじい速さでエネルギーが消費していく。「な、何なんだよこれ！ エネルギーが…！」お、俺…どうしたら

…

無闇やたらに操縦桿を動かすが、びくともしない。そういえば、先ほどから通信の声が聞こえない。

完璧に遮断されている。

影が落ちる気配を感じて、ハツと시스カは顔を上げた。

ルーディメンツが大きな口を開けていて、そこからは禍々しい霧が吐き出された。

「う、う…うわあああああああっ！」

恐怖で시스カは叫んだ。

機体が軋む。吐き気がするほどの気持ち悪さに시스カは涙目になる。

「な、んだ…これ…。身体の中に…変なの、が…！」「うあ…あ…」息が苦しくなる。

口や耳だけじゃない身体の穴と「う六に黒い霧が入り込み、コックピット内の시스カは身体！」と捕らえられた。

吐き出すことも出来なくて、窒息しそうになる苦しみに意識が薄れていった。

一方、ブリッジは混乱していた。

通信が遮断され、モニターには糸に絡まれて黒い霧に覆われたス
フォルツァンドがビクとも動かない。

「パイロットの様子も見れないのか！　コックピットの生体反応は
つ？」

「ただいま、リンクしています。…照合！…あつ…」

アニー・ミが言葉を詰ませ、顔を青褪めた。

「パイロットの生体反応、レッドから沈黙…しています

「何だとつ？」

その言葉にロックが瞳を戦慄かせる。

アニー・ミは涙を浮かべていた。

「おい、ビ…どういうことだよ。分かるよつて言えよー。」

ルカが、ロックの肩を掴んだ。

それを振り払い、ロックは悔しそうな表情で口を開いた。

「死んでるつてことだよ」

第7話 おかげり

黒い霧に包まれたシスカの意識は、淀んだ海に浮いていた。
周囲一面、禍々しい濃厚な紫と黒が支配する。

一体、何が起きたのか。

まるで、此処は地獄のようなイメージを持つ。

（死んだ…のか？ 身体の感覚が全然ない）

自分の筈が、感じる感覚は何もない。

身体の温かさも感覚も、そして… 感情も。

「……」

きっと、このままこの混沌の海を彷徨うのだから。

終わつた。

全て、終わつた。

結局、自分は何の役にも立てずに無駄死にだつたのだと、そう思つても何も生まれてこない。

その目には光が無く、虚ろに濁つていた。

ルーディメンツに飲み込まれ、全て支配されてしまった。

混沌の海の中で彷徨つていると、僅かに光るものを見つけた。
それを感情のない瞳で見ていると、何かが映し出された。

男性と女性… それと、小さな子供。

シスカの両親と、彼らが生きていた頃の幼いシスカだった。

みんな、笑いあつて楽しそうにしている。

温かい家族。

仕事の忙しい両親は家をあけることが多かつた。

しかし、家の中に一人でいても父親が書いてくれた簡単な設計図で玩具を作っている楽しそうな自分。

一人が帰つたら、見せてやるんだ。

そうはしゃぐ幼いシスカは、成長した自分とは切り離された別人のようを感じた。

『おお、凄いな。素質あるぞ、シスカ。将来の夢はメカニックか?』

『ううん、父さんや母さんより凄い優秀な技術者になる!』

『大きく出たわねー。楽しみじゃない?』

『流石は俺達の息子だなー』

そうやつて、両親は頭を撫でてくれる。

作った玩具は、友達にも人気があつたし、作る楽しみもあつた。そして何より、両親が褒めてくれる。笑ってくれる。

認めてくれる。

これしか能のない自分を…周りは認めてくれる。

一人が死ぬまでは。

一人が死んで、身寄りがなくなつた自分を認めてくれる人なんていない。

優しい近所の人も友達も、一人が優秀だから、その子供の俺に媚を売つていただけだ。

可哀相で哀れな子。身寄りも無く、引き取つてくれる人なんかいない。

ただ、同情されて見て見ぬ振りをされた。
自分には何も出来なかつた。

同じじやないか。

二人が死んで、スラムに逃げていた頃と全く同じ。

心なんてない。それでも身体に僅かでも栄養を入れれば生きてくれた。

でも、今は…奴らの栄養となつてるのが、自分なんだ。

(もう…駄目だ。早く…楽になりたい。こんなのは、嫌だ)
黒い霧が纏わりついて、シスカの体を蝕む。

どこまでも深くなる混沌の海に沈んでいくシスカに、先程までの光が遠ざかっていく。

（いつそ…殺して。死んで樂になりたい…）

恐怖も何も無い。

呼吸が出来ない。

それなのに感覚は何も無い。

早く樂になりたい。

『シスカ、駄目よ』

声が聞こえた。

（母…さん？）

間違いなくその声は、シスカの母であるジョシカの声だった。

『駄目。そつち側に行つちや駄目よ』

『戻るんだ、シスカ。負の心が奴らの餌となる。お前は、餌じやない。何も出来ない奴じやない。奴らに身を委ねちや駄目だ』

今度は、父親のゼウスの声まで聞こえた。

いや、俺は何も出来ない。

誰かの為に何かをするなんて…出来ない。

『シスカ、あなたを待つている人たちがいる。あなたを必要としてくれているわ。諦めては駄目よ』

『手を伸ばすんだ。そして、掴み取れ。大丈夫だ、俺達もずっと傍にいる。見えなくとも、お前の近くにいるから』

二人の懸命な言葉に、シスカは漸く本来の思考を巡らせることが出来た。

（待つている…人。そうだ、戻らなきや。諦めたら…諦めたら、終わり…。終わつてしまつ）

シスカの指先がピクリと動く。

『シスカ』

『シスカ、行こう』

二人が、シスカの名を呼ぶ。

（俺は…違うつて…あの頃とは違うつて、そう自分に言い聞かせて

いたのに)

シスカの目から一筋の涙が零れ、全ての感覚が戻ってきた。

「あっ、『じふつ！』

「…ツ、かつ…！」

禍々しい黒い霧が体を蝕み続ける。

苦しくて、痛くて…でも、その痛みに生きていふこと、これを実感させてくれる。

また精神が蝕まれかけている。これに身を委ねてしまつたら、一度と戻れない。

（行かなきや…。戻らなきや…。待つてゐる。皆が…俺を待つてゐる。待つてゐるんだ）

シスカは、苦しさと痛みを堪えて、硬直した手を無理矢理伸ばした。

その目には、光が戻つていた。

禍々しいそれは急速に絡み続けるが、それを抗つた。

「ツ、がほつ！ あ…ツ！」

黒いものが喉の奥に入り、水もそれに続いて意識が飛びそうなほど苦しい。

それでも、シスカは氣を強く持つた。

（俺は…俺は…！）

身体が冷たい。

痛くて苦しくて、頭がおかしくなりそうだ。

だけど、そんな身体の痛みより何より…皆の所へ…帰りたい！

その意志だけでシスカは、抵抗してひたすらに手を伸ばした。

ブリッジ内で、ルカは瞳を戦慄かせた。

「し、死んでるって…シスカが死んでるってどうこうことだよ！」

んなわけねえ……あいつが、そんな簡単に死ぬわけがねえ！」

「……事実だ」

ロックの言葉に、ルカはカツと顔を熱くさせる。

「ふざけんじやねえ！ んなもん誰が認めるか！」

ダンシ、ヒルカは壁を殴りつけた。

突如、モニターの色が変わり始めた。

反応が切れた生体反応が動き出し、それは徐々に赤から緑に変わつていく。

「スフォルツァンドに生体反応あり！ パイロットの安否を確認！ オールグリーン」

アニーミが、それを伝える。

「蘇生しただとつ？」

信じられないが、モニターの生体反応は裏切ることなく緑色の上限まで行つた。

そして、通信がスフォルツァンドから送られた。

『隊長……』

掠れた声のシスカだつた。

「シスカ！ どういうことだ！ ？」

何故、生きている？

あんなに蝕まれていたのに……。現に今も黒い霧は健在だ。

『……ツ、かはつ……！ 俺、分かりました』

今もきっと黒いそれが、シスカの身体を蝕んでいるに違いない。

その中で意識を保つて喋る。

よつぽどの強い意志と根性がないと無理だ。

『……あいつを……うぐつ……倒す方法が』

その声に驚いたが、ブリッジにいた人間の表情が徐々に柔らかくなる。

「……分かつた。お前に任せる。必ず生きて帰つて来い」

『……はい』

そう言つて、通信は切られた。

ルカは、外のモニターから目を離さなかつた。

「お前の全力出して…絶対に帰つて来い。絶対だ！」

眞面目な顔つきで、ルカは戦う親友にそれだけを伝えた。

黒い霧に覆われながらも、スフォルツィアンドは立ち上がつた。機体に絡む糸を熱源を上げて焼き尽くす。

いつの間にか、エネルギーーターが上限まで達していた。

「…ツ、ぐ…」

黒い霧は止むことを知らず、シスカの身体の中に入る。

痛みと苦しみを振り払い、シスカは顔を上げて操縦桿を握り締めた。

身体には大量の汗が流れていだが、シスカは目の前の敵しか見えていない。

ビームナイフを取り出し、敵へと突進する。

その様子にブリッジにいる誰もが、驚愕の表情を浮かべた。

「一体何をする気だ？ 近づいたら益々餌食になるだけだぞ！」

「大丈夫だよ」

ロックが驚愕する中で、ルカが軽く言い放つ。

「シスカは、馬鹿じやねえ。大丈夫だ」

その言葉は信頼している証だった。

口こそこそはロックに言つているものの、ルカの目はスフォルツィアンドを見据えたままだつた。

そんなルカの表情を見て、ジェントは小さく笑つた。

根拠もなくこの圧倒的に不利な状況で自信満々に言い切るルカと、その信頼を勝ち取るシスカに興味が湧いた。

外ではスフォルツアンドが蜘蛛の形をしたルーディメンツに飛び乗り、背中を何度もナイフで突き刺し、銃弾を撃ち込む。

先程のライフルで生きているということは、跡形もなく消すしかない。

苦しさで息が詰まりそれでも、シスカはルーディメンツへの攻撃は止めない。

「ぐつ、げほつ… ッ」

吐き出したいのに吐き出せない。

だけど、此処で… 気持ちで負けたら、それこそ終わりだ。

「うおおおおおおおつ…」

シスカが叫ぶと、ナイフに更に大きな粒子が密集し、刃先が伸びて敵を貫く。

そして、同時に爆発が起こる。

爆風の中で立っていたのは、スフォルツアンドだった。

黒い霧は消えていた。

スフォルツアンドからも、シスカからも。

そのまま、スフォルツアンドは艦に戻り、膝をついた。

「ふつ… はあはあはあ… げほげほつ、げほつ…」

一度に呼吸が戻った所為か、シスカは咽た。

「きゅー？」

鍵を抜き取ると、スフォルが心配そうにシスカを見ていた。

その様子に汗だくの状態で無理して笑い、シスカはスフォルを抱きしめた。

「大丈夫、平気だよ。… ちゃんと、生きてる」

ふう、と息を吐いてシスカは、シートに寄りかかる。

（あの時、父さんと母さんの声が聞こえてなかつたら俺は…）

今更ながらに寒気がした。

死の恐怖。

どうして死んでもいいなんて…樂になりたいって思つたのだろう。死んでしまつたら全部終わつてしまつというのに。

戦闘中、殆ど息が出来なくて痛くて辛かつたけど、諦めなかつたから勝てた。

諦めなかつたから、此処にいる。生きていられる。そして、守れた。

自分でも、それが出来たんだという達成感があつた。

ハッチが開かれ、覚束ない足取りでシスカは、コックピットを出た。

「うわっ…」

まだ頭に酸素が行つていない。

頭がくらくらして、平衡感覚がよく分からない。

それでも、この生きてる足で歩きたかった。

「シスカ」

ロックやジョンント、ユリアにアーネミ達、艦のクルー、そしてルカが迎えてくれた。

「あ…えっと…うわっ」

ロックは、足が縛れて転びそうなシスカを支えて頭の上に手を置いてぐしゃぐしゃと撫でた。

「よく頑張つたな！」

笑顔だった。

誰もが笑顔をシスカに向けてくれた。

「よく生きて帰つて来てくれたな」

「顔に似合わずやるじゃん、アンタ。見直したわ」

「シスカさん、無事で何よりです」

ジョンント、ユリア、アーネミが優しい言葉をかけてくれた。

あの厳しい人達が、認めてくれた。

「ま、これがシスカの実力よ！ こいつを甘くみるんじゃないぞ！」

「うわっ！」

ルカがロックから奪うように、無理矢理シスカの肩に腕を回して引き寄せ歯を見せて笑った。

「何でアンタが偉そうなのよ！」

すかさずコリアが突っ込みを入れて周囲は、ざわと沸いた。みんな、笑っている。

その笑顔を見て、シスカは呆然と見ていた。そして、自然と顔が綻ぶ。

見たかったのは、これだった。この笑顔だった。

「みんな…」

シスカが笑みを浮かべる。

その言葉に全員が口を閉ざし、シスカを見た。そしてシスカは、一呼吸を置いて続けた。

「ただいま」

その柔らかい口調と言葉に、誰もが嬉しさと喜びを露にするのだった。

「どうだ、様子は？」

ロックがスフォルツィアンドのシミュレーションテストを行つてゐるスフォルツィアンドを見ながら、ジエントに尋ねる。

「安定も安定。可もなく不可もなく。精神状態も戦闘テストも耐吸力も平均的だね」

「そつか。まあ、安定してゐるなら良いが……。この間のあれは、一体何だつたんだ？」

先日の戦闘……。

確かに敵に取り込まれて、シスカの心臓は止まつた。

しかし、絶望的な状況で彼は立ち上がることが出来た。根性とかの問題じゃない。

有り得ない。

しかし、それを目の前で実現した。

分からなかつた。

「さあね。火事場の馬鹿力か、才能が開花しきれてないのか……様子見かな」

「ふむ……。よし、シスカ上がつていいぞ」

ロックが通信を送ると、シスカは伏せていた目を開き脱力感に煽られたように深い溜息を吐いてシートに凭れ掛かつた。

最初に比べれば、張り詰めていた緊張感や変に入る力は無くなつたものの少しほは緊張はする。

適度な緊張が丁度いいというのは分かつてゐるが、どうも慣れな
い。

スフォルツィアンドから降りると、視界にルカとユリアが入った。

「だから、こし餡あんだつつってんだろうが！」

「アンタ馬鹿あかねじゃないの？ 粒餡に決まつてんでしょう！」

何か言い合いをしている。

この二人は顔を合わせると、いつも何か言い合っている。

犬猿の仲なのか、それとも仲が良すぎるのか。

気にする必要は無い上に、絡まる可能性があるから此処は逃げよう。

そう思つてゐるうちに一人がシスカを見つけた。

「おうつ！ シスカ、ご苦労さん」

「テストもかなり慣れたみたいね。お疲れ」

二人の労いの言葉に、シスカは苦笑した。

「う、うん。ありがとう。じゃ、俺はこれで…」

「ちょっと待て！」

逃げようとした矢先、ルカがシスカの首根っこを引っ張った。

「ユリア、この際だ。シスカに判定貰おうじゃねえか！」

「面白い。受けて立つわよ！」

「え…？ え、あの…」

一人で話を進行していく、シスカには何のことだか分からぬ。

しかし、二人の言い争いの中心に立たされてるのは確かだ。

「おい、シスカ！ 餡子あんこつつたらこし餡だよなつ」

「粒餡よね？ 何を分かりきつたことを！」

成る程。

この二人は、餡子の好みについて喧嘩していたのか。

ちょっと馬鹿馬鹿しいけどそれが妙におかしくて、シスカもその話題に乗つた。

「…ものによる、かな」

「あ？」

「何よ、はつきりしないわね」

ルカとユリアが怪訝な表情を浮かべる。

「えーと…例えばの話なんだけど、鯛焼きは基本は粒餡が主流だろ。逆にこし餡は柏餅や団子とかによく使われるし。だから、一概にどつちとは言えないよ」

「つーことは…お前」

「うん。俺、どつちも好き」

シスカの回答に、ルカもユリアも盛大な溜息を吐いた。

「お前らしいつちゃお前らしいけどよ…」

「正論すぎ…。なんか馬鹿馬鹿しくなつてきちゃつたわ」

興醒めしたとばかりに、ルカとユリアの熱も下がった。

「あれ、そういえばアーニーミは？　なんか今日見かけなかつたけど同じ年頃の四人は、割と一緒にいることが多い。しかし、今日は朝からアーニーミの姿が無いのだ。

「ああ、あの子はサークルで遅くなるつて」

「サークル？」

シスカとルカは顔を見合させて首を傾げた。

初めて聞いた言葉だ。

「いや、あのさ。前から疑問だつたんだけど…」

眉間に指を添えて、ユリアが溜息を吐く。

「あんたら、学校は？」

ユリアの言葉から出た単語に、二人は目を逸らした。

「いや、俺…下町育ちの貧乏だから」

「俺は、なんとなく。面倒くせえ」

シスカの困った表情とルカの当たり前のようになじみ口調に、ユリアは呆けた。

つまり、この二人は何の教養も無い。

シスカはバイトをしていたというのは聞いていたが、学校と一足の草鞋かと思っていた。

ルカに至つては、ただの馬鹿である。

「あー、いたいた。お前ら今いいか？」

タイミングを見計らつたように、ロックが三人に声をかける。

「ロックさん」

「おー、ロックじゃねえか。どうした?」

「クラッ! アンタら、仮にも上司なんだから隊長つて呼びなさいよ」

あまり堅苦しい事は苦手なシスカとルカは、どうもその呼び方が苦手だった。

シスカは呼ぼうと思つて努力しているものの、じどうもどうにかなり不自然だからとロックが了承した。

ルカに至つてはこの性格。もう諦めた。

「仮にもつて…俺、階級少佐なんだけど。まあ、いいか。シスカ、ルカ。お前ら、学校行け」

ナイスタイミングな話題。

しかし、ただの雑談の中の一部と違つたロックの言葉にシスカとルカは驚愕する。

「お前ら、ガキだろ。騎士隊にいるつてことは、政府関係者。それが、教養がねえつつーのは建前的に悪いんだよ」

面倒臭そうにロックが煙草を吹かす。

「金ならこつちが出す。節度守つてある程度の成績出せば遊んでいいから、とにかく行け」

「で、でも…」

「命令」

シスカが言い逃れの言葉を搜すも、ロックのその言葉に従わざるを得なかつた。

「既に準備は出来てる。部屋に制服やら必要なモンは置いてあるから、明日から行けよ」

「…はい」

「ちつ、しゃーねえな」

あまり乗り気でない一人だったが、命令なら仕方が無い。

それに暇を持て余して艦にいるよりは、退屈しなくて済みそうだ。

「それから、シスカ」

「え？ あ、はい」

「お前の場合は、じつちのテストとかあるからサークル活動禁止な。あくまで本業はこっちだからな」

「はい、分かりました」

シスカが返事すると、ロックは満足そうに笑い踵を返してその場を去った。

「あんたもう怖くないの？ 妙にあつさりしてゐるナビ」

ユリアが、シスカに尋ねる。

「いや……うーん、別にそんなことはないけど」

「ま、良い傾向だからいつか。そういうや、学校の授業に鍊機術もあつたつけ。あんた、好きでしょ？」

「鍊機術つ？」

ユリアの言葉に、シスカは目を見開き輝かせた。

「鍊機術の授業なんてあるの？ え、どういうのかな。あ、もしかして将来的に一般開発されるシンフォニエッタとか。それとも鍊機動エンジンの実習かな。どんなの？ どんな授業？」

輝かせた目とやら饒舌に興奮するシスカを見て、ユリアの口が引き攣る。

「あんた……それ、学校でやらない方いいわよ」

「え？」

「あなたのマニアックぶりつて、半端じゃないのよ。自覚しなさいよ」

「よ

「え、でも普通……」

「あんたみたいな鍊機オタクは普通つて言わないの。変人もいいとこだからやめなさいよ……」

「あー、無駄だぜ」

頭をぽりぽりと搔いてルカが話に入る。

「こいつにとつて身体の一部みてえなもんだし。多分、教えてる奴より詳しいぜ」

「信じらんない…。あたし、自分で結構マニアだと思つてたけど
シスカに比べたら全然底辺だわ。ルカ、行くわよ」

「あ?」

「一応ブレスパイロットなんだからシミュレーションテストしないよ。シスカが終わつたんだから、次はアンタ。ルバートは修理中だからテスト専用のブレスでやるわよ」

「あ、おい! 引つ張るなつて!」

ズるズると引き摺られルカは、ユリアと共にシミュレーションルームへと向かつた。

ぱつんと取り残されたシスカは、特にやるこども無いし部屋に戻るつとエレベーターへ向かう。

「きやつ」

頭上から声がした。

携帯端末を持ちながら階段を降りていたアニー・ミが、足を引っ掛けてしまい宙に浮いた。

その行方は空中から床へ向かつている。

「アニー・ミ!」

落ちたら大怪我をしてしまう。

シスカは、宙に浮いたアニー・ミへと走る。

アニー・ミが持つていた携帯端末が転がる無機質な音がした。

そして静かになつた。

床に激突したのではないかとアニー・ミは、目を瞑つていた。

しかし、その衝撃は無い。

その代わり、温かく柔らかい感触。それは、人の温もりだった。

恐る恐る目を開くと、足が浮いていた。

浮いてはいたのだが…。

「…シスカさん?」

シスカに抱きかかえられていた。

お姫様抱っこで。

「よそ見しながら降りるの危ないと思つんだけど…。えつと…大丈夫?」

少しほつとした様子でシスカは、息を吐く。

「は、はい。ごめんなさい」

アニー・ミは、呆けてシスカを見た。

情けなくて戦闘以外は頼りなくて不安定な男の子。それなのに、抱えられてる手が男性特有のものせいが何故か今は頼りがいのある男に見えた。

アニー・ミの頬が若干紅潮する。

多分、抱きかかえられて恥ずかしいせいだと自分に言い聞かせる。「あ、あの…重くないですか?」

「え? 全然。寧ろ軽いけど…。よつと」

階段を降りて、シスカはアニー・ミを降ろした。

ふと、落ちた携帯端末が視界に入る。

それを拾つてアニー・ミに渡した。

「はい」

「ありがとうござります。…あつ」

携帯端末を受け取り、アニー・ミはショックを隠しきれない様子でそれを見ていた。

「嘘、電源入らない…! 壊れちゃつたのかなあ」

大きな溜息を吐いて今にも泣き出しそうなアニー・ミを…いや、壊れてしまつた携帯端末をシスカは見た。

「…ちょっと見せてもらつて良い?」

「え? あ、はい」

アニー・ミが携帯端末を渡すと、穴が開くほどにシスカはそれを見る。

「あのや…その…」

「…はい?」

「悪いけど、俺の部屋まで来てもらつていい?」

「はつ?」

部屋に来て欲しい？

女を簡単に自分の縄張りに誘つような男には見えないのだが、アーニーはそう思つてしまつた。

「あ、いえつ……でも」

「俺の部屋に工具があるからソレで見てみるから……って、どうしたの？」

きょとんとしてシスカはアーニーを不思議そうに見た。

慌てふためくアーニーは首を横に振つた。

「あつ！ いえ、何でもないです」

「…？ うん、じゃあこっち」

そう言つて先に進むシスカにアーニーは顔を赤くした。
(うう…何かドキドキする。シスカさん相手に何でこんなにドキドキするかなあ)

アーニーは落ち着かせる為、深呼吸をした。

そして、二人はエレベーターに乗つた。

しかし、エレベーターの中で会話が弾むことはなかつた。
(そう言えれば、シスカさんと二人でいるのってこの人が最初に倒れた時以来だけ。：何話せばいいんだろう)

思考を巡らせるが、思いつかない。

ルカやコリアみたいにシスカは前に出て話すことはしない。
アーニーもどちらかと言えば聞き役だ。

沈黙がその場を支配する。

気にしているのは、アーニーだけだ。

「あ、そういうえば…」

「は、はいっ？」

「…アーニー？」

「あ、いえいえ。何でもないです！ 続きをどうぞ」

拳動不審なアーニーに首を傾げ、シスカは続けた。

「サークルって…何？」

「え？ サークル…ですか？」

意外な質問だつた。

「うん。さつきコリアに聞いたんだけど、いまいち分かんなくて。まあ、ロックさんには入っちゃ駄目って言われたけど気になつてさ……」

「あ、なるほどですね。えつと、サークルっていうのは同じ趣味を持つた友達と活動することですよ。私は料理サークルに入つてるんです」

「へえ、そなんだ。何か楽しそうだね」

「ええ、そうですね。料理も楽しいですし、友達と一緒にやるつてのが一番楽しいです。あの……シスカさんは何か趣味とかあるんですか」

アニーが尋ねると、シスカは少しだけ無言になつた。
そして口を開いた。

「……俺には、鍊機術しかないから」

何でもない言葉の筈が、何処か寂しそうに感じて違和感を持つ。エレベーターが音を立てて開く。

その後、部屋に着くまで二人は会話をしなかつた。
話題を振つても良かつたが、何故か空気が重い気がした。
(何か……まずいこと聞いちゃつたのかな)

しょんぼりとアニーは頃垂れる。

「あ、此処だよ」

暗証番号を入力すると、扉が横にスライドした。

「お、お邪魔しま～す」

少し緊張気味にアニーは部屋に入る。

「えーと、確か……。あ、適当に何かつまんでいいよ。お茶とかコーヒーとかもあるし」

「あ、はい」

部屋の中に入り、小さなキッチンにあるインスタントコーヒーを手に取つてお湯を沸かす。
顔を上げると、工具箱に向き合つシスカが視界に入った。

「さて、と…」

ドライバーでネジを外して部品を抜いていき、バラバラになつた携帯端末がただのパーツになつてしまつた。

「な、何やつてんですかあ！」

「え？ … だつて、バラさないと修理できないし」

「へつ？」

「この端末、衝撃にあんまり耐えられないみたいだから… 故障した部分の修理ついでにパーツ交換して耐久度高くしようかなつて…。あと防水にもなつてないし。デザインは新しくても中は旧型。ソフトウェアやアプリとかで誤魔化してるけどね」

口数の少ないシスカが機械になると饒舌になると「…」。アーニーの顔がいたが、活き活きとした表情が小さな子供みたいでアーニーの顔が綻んだ。

「そ、うなんですか？ あたし、可愛いからつてつい機種変しちゃつて」

「あ…か、勝手にやつちや駄目かな？ よ、余計なことだつた…？」

「いえ、全然！ 寧ろそこまで考えててくれて光榮です！」

「…良かつた。俺、こういうのすぐ気になつちやつて…。割と暴走しちやうから…迷惑かなつて…」

シスカが苦笑をする。

しかし、アーニーはそこで疑問に思ったことがあつた。

「あの…さつき開けなかつたですよね。何で分かつたんですか？」

「いや、開ければ分かること思つて。本当に故障してるつて分かんなかつたし、欠陥部分も今分かつたんだ」

端末を開けて一瞬で全部理解したということだろ？。

本当にこの人は、凄いメカニックなのではないかと疑つてしまつ。そしてシスカは、作業に入つた。

基盤を眺めて、自分の工具箱から新しい基盤を取り出して器用に部品を接着していく。

次々と出す部品は見たことも無いものばかりだつた。

器用さだけではない。

とにかく速い。

次のものへ次のものへと伸ばす手は止まることを知らない。

そんな姿にアニー・ミは、呆けながら彼の真剣な横顔を見ていた。

(何か：かつこいいなあ)

シスカに釘付けのアニー・ミは、目が覚めた。

沸いたお湯をカップに注いでいたが、それが零れて自分の手にかかってしまう。

「あつつう！」

その言葉にハツとシスカは顔を上げる。

「大丈夫つ？」

「す、すみません」

「いや、とにかく水で冷まして」

そう言つてシスカは、アニー・ミの手をとつた。

そんな場合じゃないのは分かつてているものの、掴まれた手に胸が高鳴つた。

火傷部分に蛇口の冷水が流れる。

「…アニー・ミつて、こんな…ドジなの？」

「お恥ずかしながら…。オペレーター機器に慣れるのも一番遅かつたし」

「ん、でもさ…余計なことかもしれないけど、気をつけた方がいいよ。女の子なんだし」

「あ…ありがとう」やつこます

俯き加減にアニー・ミは、心配をかけた申し訳なさと恥ずかしさに顔を赤くした。

「あ、もう大丈夫です」

水を止めてアニー・ミは手を拭いた。

まだ少し腫れていでじんじんと痛むが、これ以上心配はかけたくなかつた。

「…手出して」

「え…？」

きょとんと目を丸くするアーニーに構うことなく、シスカは先程アーニーが冷水で覚ましている時にあらかじめ切り目を入れていた湿布をアーニーの手の患部に貼った。

「きやうつ

突然の冷たさに悲鳴が出た。

その悲鳴にも構わずにシスカはアーニーの手に包帯を巻いた。

これもまた手際がいい。

「多分、すぐ引くと思つけど…もし酷かつたら医務室で見てもらつた方がいいと思つ」

「…ありがとうございます」

「ちょっと座つて」

「…？ はい」

言われたままに椅子に座るとキッチンに消えたシスカを見ていた。そして深い溜息を吐いた。

（…呆れられちゃつたかな。いくら何でも迷惑かけすぎ…。最悪か）

徐々にアーニーのテンションが下がつていく。

「はい」

アーニーの目の前のテーブルに置かれたのは、アイスコーヒーとクッキーだった。

カラーンと氷が涼しい音を立てる。

「それでちょっと待つて。もうすぐ終わるから

特に怒つても呆れても無い様子でシスカは、作業に戻つた。

全く気にしていないようだ。

寧ろ作業に集中したくてアーニーのドジなど氣にも留めていない。

アイスコーヒーにストローを差してくれたのは、火傷した手で飲みにくいだろうというシスカの気遣いなのかもしれない。

これ以上のドジを踏まると困るという意味もありそつだが。

（優しいな…）

嬉しそうに笑いながら、シスカを見る。

蓋を閉じてドライバーで螺子を締めている。

もう終わるのだろう。

しかし、その後にシスカが出したのは裁縫道具だった。
(え、何だろ?)

裁縫道具で何か縫つているようだ。

後姿ゆえにそれが何を作つているのか見えない。
だが、それはすぐに分かつた。

「はい、完成したよ」

シスカがアーミーに携帯端末と、パンダのような形を模した可愛らしく柔らかなケースを渡した。

「え、これ……」

「ほら、液晶とか本体に傷つくと嫌だろ? 一応、液晶も交換してカバーも塗装したから。元の色が無地でラッキーだつたよ……」
完璧リフォームおまけ付き。

この人は何処まで器用なのかと尊敬してしまつ。

「ありがとうございます! このケースも可愛いです! お店で売つてるやつみたい」

「いや、それ褒めすぎだと思つよ。ちょっと待つて、工具片付けて送つていくから」

「え、そんな…。大丈夫です、一人で帰れます」

「駄目」

きつぱりと言われた。

普段の頼りなくて遠慮がちな声色と違う。

「とてもじゃないけど、この状態で帰せないよ。危なっかしくて見ていられないから…」

「うつ…」

確かに今回の失態を考えれば当然なのかもしねりない。

「…お願いします」

「うん。じゃ、ちょっとだけ待つてて」

明らかに重そうな工具箱一つを軽々とシスカは持ち上げた。

「お、重くないんですか？」

「ん、別に。配達業やつてたから力はあるし」

そう言つて、シスカは定位置に工具箱を戻した。

器用で優しくて力もある。

全面的に情けなさが滲み出でていたせいで気がつかなかつた。

（お、王子様…！）

アーニが恋に落ちた瞬間だつた。

シスカは、口を開いてそれを見ていた。

大きくて広い庭園。

まるでプロが大会で使用するような大きな校庭やテニスコート。町に普通にあるようなお洒落なカフェテリア。

そして、巨大な塔の如く大きな建物。所謂、校舎。

完璧に貴族クラスのお嬢様お坊ちゃんが通うような学園だった。

「こ、これが… フィルイン学園…。ど、どうしよう…！」

いくら政府関係者と言えど、場違いすぎるこの学園にシスカは举动不審になる。

その後頭部をユリアが殴つた。

「いてつ！」

「きょろきょろしないの。ほら、行くわよ」

そう言ってユリアは、シスカを引き摺る。

ルカは、シスカみたいに驚く様子も無く眠気で欠伸をしている。興味が無いようだ。

アニーは、どうやらシスカしか見えてないようでその後姿を追いかけた。

校舎に入ると、益々高級な一流の学園だと思い知らされる。

あまりにも広すぎる校舎に迷子になりそうで目が回る。

「此処があたし達の教室。あんた等もあたし達と同じクラスにしてもらつたの」

「へえ、なんだ。ルカ、俺達今日から…って、ルカ！」

シスカが振り向くと、ルカは鼻提灯を垂らして寝ていた。

「…立ちながら寝るなんて、器用な奴ね」

「あ、そういうえ…」

ふと思い出したようにアニーが言葉を発する。

「今日の昼から艦はソルフュージュに移動するそうです。これから
の拠点はソルフュージュになるので、帰宅次第荷物を整えて配置さ
れた部屋に移動するようにと隊長から言付けを頂きました」

「…結局、艦の修理する金が無いってことね。シスカみたいなのい
ても部品がなかつたら意味ないし」

「ははは…」

顰めつ面のユリアにシスカは苦笑を漏らす。

ユリアがルカを叩き起こして漸く四人が教室に入る。

「席は決まってないから適当に座つて」

「うん、分かつ…」

最後の言葉を言えず、シスカは固まつた。

その瞳は戦慄き、青褪めていく。

視線の先は、何人か固まつた男子生徒のグループだつた。

男子生徒達は顔を上げて、教室の扉…シスカを見た。

「あつれえ？ シスカじやねー？」

「おー、マジで？ 何であいつが此処にいんの？」

「つーか、まだ生きてたんだ？ 神経図太いドブネズミはやっぱ違
うねえ」

げらげらと笑いながら男子生徒達は、シスカに暴言を吐いて笑う。
シスカは、拳を握り俯いていた。

「ちよつと！ あんた達、やめなさいよ！」

「お前ら、そいつといふと臭くなるぜ？ 何たつて、スラム育ちの
きつたねードブネズミなんだからよ…」

ユリアが怒つた様子で止めるも男子生徒達は下卑た笑いをやめな
い。

そんな言葉に周囲もシスカを軽蔑したような目で見た。

貴族からしたら、スラムに住んでいたような者を人間とは認めて

いない。

故にシスカは、彼らことじつての格好のストレス発散だ。いくら暴言を吐いても傷つけても構わない。だつて、人間じやないから。

汚い汚いネズミだから。

「ふざけんじやないわよ！ あんた達、誰のお陰で生きてるか：

「やめよう、ユリア」

ユリアがクラスの人間に腹を立てて抗議しようとするが、シスカの言葉で止まった。

「言いたい奴には言わせておけばいいよ。俺… こういうの慣れてるから」

その言葉は何処か冷たくて、シスカは席に着いた。

「シスカさん…」

「何よ、あれ…。 いろんなの慣れてるつて… おかしいでしょ。 ルカ！ あんた何で何も言わないのよ」

「あ？ 此処で俺らがキレてどうすんだよ。 益々シスカの肩身狭くなんだろうが」

正論だった。

普段のルカだったらこうこうことがあれば真っ先にキレる所だが、シスカの事を思うとルカが正しい。

漸く分かつた。

シスカが金銭的なことを理由に学校へ行きたくないと言い訳をする理由も。

ルカがこういう面倒な事を想定してだらけたように見せて渋つていた理由も。

ユリアは何も出来ない自分が悔しかった。

「しかも、ネズミの飼い主までいんじやん？ 何お前ら、来るどこ間違つてんじやねー？」

「身分わきまえろつづーの！」

男子生徒達は、ルカも馬鹿にして笑った。

しかし、ルカは氣にする素振りも無かつた。

「へいへい。俺らはこれから人間様の勉強するんですよ。でも、言つとくけどよ…」

ルカは軽くあしらうが、男子生徒達を睨んで声にドスをきかせた。
「シスカに手エ出したら、ただじやおかねえ」

その言葉に教室が静まる。

そして普段の表情に戻り、ルカはシスカの隣に座つた。
ユリアやアニーもそれに続いた。

「んだよ…つまんねー奴ら」

「おい、俺いーこと思いついちゃつた」

男子生徒の一人が固まつていていた仲間に耳打ちした。

「え、それヤバくね？」

「いーんじやねえの？ 面白そудし」

「へつ、荒くれルカが何だつてんだよ」

ニヤリと男子生徒達は笑つて、授業の準備をした。

授業が開始される。

大好きな鍊機術の授業だつたが、シスカは憂鬱だつた。

クラスのシスカを見る目が痛い。

あちこちで、こそそと話して笑つてゐるのが聞こえる。

そんな姿にユリアは怒りを抑えるので精一杯だつた。

(ユリア、私たちが怒つたら…シスカさんやルカさんの立場悪くなつちやうから)

(んなもん分かつてゐるわよ…)

アニーがユリアを落ち着かせようとするが、ユリアの怒りは納まりそうも無い。

「それじゃ、入つたばかりで悪いが…ブルーネル」

「はい」

教諭がシスカを指名する。

返事をしてシスカは立ち上がった。

「この部品がどのような用途に使用するか、答えよ
モニターで、教諭はある部品を映した。

「ハンマリングフィルタですね。主に液晶関係に使用します。厚さや大きさにもありますが、現在主流と言えるのはこのようなモニターや携帯端末にカメラのレンズにテレビ等… 数えたらキリが無いと思います。何に使うかという質問にするには、あまりにもざつくばらんだと思いますけど。あ、それから現在のハンマリングフィルタは軽量化設計の他に傷や曇り防止などの…」

「ブルーネル。すまん、私が悪かった。うん、凄く分かりやすかつたからもういいぞ」

教諭が冷や汗を流してシスカを止める、黙つてシスカは席に着いた。

その様子にクラスの誰もが驚愕に目を丸くする。

エリートコースの鍊機術教諭よりも、ずっと詳しいのだろう。
だから、慌てて教諭も止めた。

自分の分からぬ知識を口に出されそうだったからだ。

「うつわー、容赦ないわね」

ユリアがぽつりと呟く。

その顔は若干引き攣っているものの、クラスのお高く留まつてゐる連中を黙らせるには充分な知識を見せたシスカに感心した。

「えー…何アレ。言つてること意味分かんない」

「何でスラムに住んでいた奴が鍊機術なんて分かるのよ…。おかしくない?」

近くに座つていた女子生徒が怪訝な表情を浮かべる。

ユリアは、こつそりとガツツポーズをした。

アニーも嬉しそうだ。

ルカは寝ていたが、このくらいのことは想定済みだつたようだ。

しかし、シスカの表情が晴れることは無かった。

シスカにとつて、折角の鍊機術の授業も当たり前すぎて退屈だった。

一日の授業が終わり、帰宅してやつと用事を済ませてしまおつとユリアとアーニーが話しているとルカが戻ってきた。

用を足してきたりしい。

「あー、すつきりしたぜ」

「ちょっと…やめなさいよ」

清々しい表情のルカに対してもユリアは怪訝に眉を寄せた。

「あの…ルカさん。シスカさんは？」

「あ？」

見るとシスカの姿が無い。

「おい、何処行つたんだアイツ」

「え、一緒にやないの？ あんた出てから教室出て行つたわよ
ユリアの言葉にルカは硬直したがすぐに口を開いた。

「…おい、お前ら先帰つてろ」

ルカの肩が震えていた。

その表情は怒りに満ちていた。

嫌な予感がする。

「な、何する気よ」

「心配すんな。ちょっと『HIMI』処理に行つて来るだけだ」
ゆらりとルカがゆっくり歩いて口元に笑みを浮かべる。

「ちょ…ちょっとルカ！」

「うるせえ！」

「ほんとに待ちなさいよ…」

「ルカさん、落ち着いてください…」

鼻息を荒くして怒るルカをユリアとアーニーが止める。

「あんたがシスカにこだわる理由って何なのよ。過保護って言つよ
り、異常よ」

「…あいつに…あの時みてえな顔されるのが一番嫌なんだよ！俺
はつ！」

ルカが大声を上げると、教室中が静まり返った。

「…あの時つて…どういうこと？」

ルカは、呼吸を落ち着かせて溜息を吐いた。

「お前ら、これ知つてもあいつと今まで通りの付き合い出来るか？」

「え、何言つて…」

「出来るかつて聞いてんだ！」

真面目な表情だった。

シスカの過去に何があつたのか…。

でも、それがどんなものだとしても変わらない。

大事な仲間…友達だから。

「シスカさんは、シスカさんです。過去は過去のこと。過去がある
から今があると思います。私は、今のシスカさんが好きです」

言葉を一つ一つはつきりと言つてアニー・ミは、ルカに向き合つた。
「変わるわけ無いじやん。あんな鍊機術オタクの過去の一つや二つ
…。どんな過去だらうと、ルーディメンツが攻めてくるのに比べた
らちょろいもんよ」

ユリアは笑つた。

その言葉を聞いて安心したか、ルカは口を開いた。

* * *

その頃、シスカは男子生徒達に押さえられて理不尽な暴力を受け
ていた。

殴打する音や蹴る音が誰もいない裏庭の茂みに響いた。
「げつほ… げほげほ… ツ」

圧迫感にシスカは咳き込むと、男子生徒はシスカの胸倉を掴んで

壁に叩き付けた。

「ぐつ……！」

壁に押し付けられたシスカの腹を別の男子生徒が靴底で踏み躡る。
「調子に乗つてんじやねえぞ、弱虫のドブネズミ！」

「テメエみてえな奴が視界に入ると、田が腐るだろ？ が！ あア？」
そこらのチンピラよりも性質が悪い。

相手は貴族だ。

手を出せば、ただの喧嘩じゃ済まなくなる。

シスカは堪えた。

どうせすぐに飽きる。それまでの我慢だ。

こんなもの、ルーディメンツの攻撃に比べたら痛くも痒くも無い。
カラソ、とエオリアキーがシスカのポケットから落ちた。

「お？ 何だ、こりや？」

男子生徒の一人がエオリアキーを拾う。

「だ、駄目だ！ それはっ！」

それだけは渡せない。

血相を変えたシスカに対して男子生徒達は面白そうに笑う。

「マジその顔最高じゃね？ よっぽど大事らしいな」

「つか、エオリアキーじゃん。何でお前が持つてんの？ いやー、
こんだけのお宝盗むなんて中々やるねえ」

男子生徒が、エオリアキーで軽くシスカの頬を叩く。

「違う！ それは、俺の……」

「テメエみたいな肩が、ブレスバイロットなわけあるかよ！」

「がはつ……！ いつ……！」

男子生徒の靴がシスカの腹に減り込み、壁に頭を勢い良く叩きつけられる。

腹をギリギリと踏まれ、痛い。

叩きつけられた頭が痛い。皮膚の一部が切れたかもしれない。

「じゃあ、本物か確かめてやるよ。あんだけ立派なブレスの鍵なんだ、そう簡単には割れねえだろ」

「お、おい…それやばくね？ 本物だつたら、重罪だぜ」「はつ、コイツがあんなのに乗つて戦えるわけねえじゃん？ どつせ偽物だよ。例え本物だとしても、上手く揉み消せるぞ」根拠も無く男子生徒は、エオリニアキーを振り被つた。

「や、やめろおおおつ！」

シスカの叫びと共鳴したようにエオリニアキーが光つた。

「うおつ、何だよ！」

眩い光に、男子生徒達は目を瞑る。

押さえ込まれた手と足を振り払つて、実体化したスフォルを涙ながらに抱いた。

「スフォル！」

「きゅつ」

スフォルもシスカに頬を摺り寄せた。

「良かつた。本当に良かつた…」

スフォルは、傷ついたシスカの頬と涙を舐めた。

「何なんだよ、一体…！」

男子生徒達は起き上がる。

彼らの目の前にいたシスカは背中を見せていた。

「…俺が我慢すれば、被害が俺だけで済む。俺を殴りたかつたら殴り分かるよね。ちょっとやりすぎ」徐々にその声は怒りに満ちてくる。

そして、シスカは振り向いた。

封印していたかのような危険なオーラを醸し出している…怒りの瞳だつた。

「一線を越えたらどうなるか、教えてやるよ」木々がざわめいた。

落ち着いた声だつた。いつもと変わらない…落ち着いた声。

「…だけど、一線は越えちゃいけないの…いくら馬鹿なお坊ちゃんでも分かるよね。ちょっとやりすぎ」

徐々にその声は怒りに満ちてくる。

そして、シスカは振り向いた。

封印していたかのような危険なオーラを醸し出している…怒りの瞳だつた。

「一線を越えたらどうなるか、教えてやるよ」木々がざわめいた。

一年前。

いつもその少年を見ていた。

スラム街で縮こまり、ボロ雑巾のよつた姿の少年。冷たくて此方が凍えさせられそうな目。

同じ境遇の少年達に腹いせに殴られていて、孤立していた。暴力を受けない間、ずっと壁越しに背中をついて座っているその少年に声をかけたが、凍て付いたその目が怖くてかけられなかつた。

そんなことを気にしながら、毎日少年を遠くから見る。いつも殴られてばかりの少年が、ある日…別の少年達を半殺しにしていたことを覚えている。

少し手を加えたら、確実に死ぬ。

そんな状態になるまで彼らに暴力を振るつていた。

「わ、悪かった！俺達が、悪っ…がはっ！」

被害者の少年が謝罪をするも、彼は特に気にした様子も無く相手の胸倉を掴んで殴り飛ばした。

「…お前らが悪いのは、知ってるよ」

冷たい声に悪寒が走る。

足元には、家族の写真が入ったフォトフレーム…錬機手帳。液晶が割れていた。

失った家族の思い出を踏み躡られて、切れてはいけないものが切れてしまった。

このままではいけない。

このままでは、本当に彼は戻れなくなってしまう。

この場所から連れ出して何とかしてあげないと。

彼を救つてあげたい。

無表情でもたまに見せる泣きそうで辛そうな顔が忘れられない。

ある日、いつも通りに壁に凭れ掛かり俯いて座る少年に近づいた。影が落ちたことで、少年は顔を上げた。

生氣の無い・冷たい目だった。

「なーに死んだ振りなんかしてんだよ、てめえ」

精一杯に声をかけるのには、これが限界だった。

正直、怖かつた。

いつ粉々になつて碎けてしまつか分からぬ纖細な少年を傷つけてしまふのではないかと恐怖した。

しかし、少年は無視をして俯いた。

「おい、シカトすんなよ」

「…あっち行けよ」

当然の返答だった。

これだけ荒んだ人間がすぐに目を合わせてくれる筈も無い。

「お前、名前は？ 僕、ルスティカ＝ピツツィカード。ルカって呼んでくれ

「…うるさい」

全く取り合ってくれない。

名前すら教えてくれない。

特に今は機嫌が悪そうだ。

でも譲れない。

この子は、こんな場所にいてはいけない。

太陽の下に戻してあげないと、本当に死んでしまう。

ぼろぼろの姿の彼の腕や足を見ると、擦り傷と痣だらけで痩せ細つていた。

「腹減んねーか？」

「……」

「お前、そんなんじやいつか死ぬぞ。周りの奴らは死に物狂いで食べ物探してんのに、お前は動かないよな」

「……人のものを盗んで吃べるのは嫌だ。俺の餌は人が捨てたゴミで充分だ。パン屋の前に行けば、売れ残ったパンが捨てられる。俺は、犬のようにそれを漁つて吃べるだけだ」

淡々とした喋り方だ。

「いいのか？ お前はそれで」

「……」

「俺、分かるんだよ。お前はこんなところで燻つくすぶてるような奴じやねえ。立てよ、お前がいるべき場所は此処じやないんだ。俺と一緒に行こつぜ」

手を伸ばして笑顔を向けるも、少年はそれを鼻で笑つて振り落つた。

「……憐れみか。いい身分だね。俺を飼つて優越感に浸りたいって？」「違う！ そんなんじや……」

「帰れ」

「嫌だ。俺は、お前を連れて行くまで諦めない！」

「……ツ、うつぜえんだよ！ 相手を見下して心の中で笑いながら善人ぶつてる表の人間は！ てめえの優越感の為の道具なんて絶対に嫌だ！」

「話を聞け！ 俺は……」

「そんなんもんになるくらいなら、死んだ方がマシだ！」

少年のその言葉にルカの顔がカツと熱くなる。

気がついたら、少年を殴つていた。

少年は激しく吹つ飛び、「ゴミ置き場に倒れた。

少年の喉元でクツと笑う声が聞こえ、そして彼は起き上がった。「ほり、俺には此処がお似合いだ。散乱したゴミの中に屑みたいな俺。どうだ、絵になるだろ？ 哀れで可哀相な汚いドブネズミの出

来上がりだ

皮肉めいたような笑みを少年は浮かべた。

荒んでしまった心は、どうすれば修復できるのだろうか。
まだ、こんな子供なのにな。

此処に来る前のこの少年は、どんな表情をしていたのだろうか。
どんな顔で笑っていたのだろうか。

見てくれじや同じように見えるが、この場所にいる誰よりも酷く
歪んでいる。

心が壊れていた。

同情なんかじゃない。

隣で歩きたいんだ、この子と。

「…行くぞ」

「は？ ちょ、てめ…離せよつ…」

ルカは、無理矢理少年を抱いだ。

軽くて細い身体だ。

「やめろっ！ 僕に触るな！」のぐそ野郎つ

騒ぎ立てる少年をよそに、ルカは彼を文字通り持ち帰った。

ピツツイカードの家は何の変哲も無い下町の一軒家だ。

これでもかと言つほど散らかってるが、それ故に生活していく匂
いがする。

「えー…と、俺の服で良いか？ 多分、ちよつとでかいけど」

「…帰る

「じらじらじら…取り敢えず、風呂入れ。俺ん家の風呂狭いけど

無理矢理、ルカは少年の身包みを剥がす。

「てつめ…触るんじやねえ！ ぶつ飛ばすぞ…」

「お前、無理してそんな言葉使つてんなよ。実際、そういう性格じ

や
ねえんだろ」「

「はあ？ 意味分かんねえし」

「ま、何でも良いけどな。ほれ、風呂行こいつ。洗つてやるよ」

「…」

腹は立つが、このまま騒いでもこの男は離さないだらつ。
仕方なく、風呂場へ向かつた。

風呂場で楽しそうにルカは少年の髪と身体を洗つていた。

「ほーら、気持ちいいだろ？」「

「…」

そっぽを向いたまま少年は無言だ。

「なあ、いい加減名前くらい教えろよ」

「…」

反応なし。

「じゃ、年は？」「

「…」

同じく反応なし。

「シャンプー気持ちよくて、悦に入つてんのか？

「入つてねえよ！」

少年は突然立ち上がり、叫んだ。

「…ッ」

目が染みる。

シャンプーが目に入つてしまつたよつだ。

「おり、流すから大人しくしろ」

シャワーを浴びせると汚れが取れて、綺麗になる。
しかし、その翡翠色の瞳はルカを睨んだままだつた。

「…すっかり飼い主気分かよ」

「だから違うつづつてんだろうが。ほら、次は飯だ。飯！」

「だから違うつづつてんだろうが。ほら、次は飯だ。飯！」

脱衣所に連れて行つて、タオルと洋服を少年に渡してキッチンへと向かう。

少年は、舌打ちをして身体を拭いて用意された服を着た。ワイシャツが大きくて袖を捲くる。

ズボンは丈が長いが、ウエストはゴムが入っているので何とか履くことが出来た。

次第に良い匂いがした。

優しくて温かい匂い。

「…何してんだよ、俺」

深い溜息を吐いて少年は頭を搔いた。

食卓にパンとシチュー、サラダが並べられる。

「ま、かなりやつつけだけど食えよ。腹減つてんだろ」

「いらない…。帰る」

少年がそう言つた途端、腹の虫が鳴つた。

悔しそうに少年は、顔を赤くする。

タイミングが良すぎたその音に、ルカは噴出して笑つた。

「おら、意地張つてねえで食え！ 冷めるぞ」

「…」

空腹には勝てないらしく、少年は椅子に座つて食事を眺めた。こんな食事を見るのは何年ぶりなのだろうか。

思わず涎よだれが出しあつた

しかし、そこで少年は我に返つた。

「ち、違う！ 僕みたいな奴は、生きていく為に仕方なく食べるんだ！ 勘違いするな」

「へいへい。いいからさつさと食え」

言い訳をする少年をあしらつて、ルカは食べ始める。怪訝そうに顔を顰めるも、少年も食事に手をつけた。

* * *

食事が済むと、ルカは少年に帽子を被せた。
少しふかぶかで顔が隠れてしまう。

「よつしゃ、行くぞ」

「は…？」

何処に？

何て慌しい奴なんだと少年は、ルカを見上げて睨む。

「お前の服とか日用品買いにだよ」

「…俺、金無いの知ってるよな？」

「だからツケとくんだよ」

「は…？ ツケ？」

「おう。明日から働け」

「なつ…！」

さも当然の如く笑つて言つてのけるルカに、少年は固まつた。

開いた口が塞がらなかつた。

「ふつざけんじや ねえ！」

我に返つた少年の怒鳴り声と共にルカを思い切り殴る音が家に響いた。

その後、町へ出た少年とルカはあちこちの店を回つた。

ルカは楽しそうに少年に似合いそうな服を選んだり、使用用途が高い日用品を真剣に見定めたり、笑顔が絶えなかつた。

それと比べて、少年は顰めつ面のままだ。

だけど、ルカは他の奴らとは違う…。そんな感じがした。

しかし、その気持ちを振り払つべく、少年は首を横に振つた。

（何、気許してんだよ。あんなの、偽善だ。別に俺を見てるわけじゃない。可哀相なら誰でもいいんだ）

胸でぎゅと拳を握り、店員と話しているルカの目を盗んで走り出した。

「あつ！ ローラー！」

気付いたルカは少年を追いかけた。

しかし、足は少年の方が速かった。

「無駄にぬくぬくと育った奴に俺が負けるわけな……ッ！」

走りながら振り返ると、必死の形相で周囲に砂煙を浴びせるかの如くルカが走ってくる。

先程と違い、そのスピードは少年の足の速さの二倍ほどあった。

「え、嘘だろ？」

「ホントだよ！」

息を切らせたルカが少年の前に現れた。

「絶対に逃がさねえ……！」

「い、意味わかんねえ。飼い慣らしたいなら、俺じゃなくてもいいだろっ！」

「ばっか野郎！ お前じやなきや駄目なんだよ……！」

ルカが少年の肩を掴んで叫んだ。

「俺が何の為にお前に付き纏つてると思ってんだ、あア？ 俺は、お前がいいんだよ！ お前と友達に……いや、家族になりたいんだよ！」

「！」

家族？

馬鹿かコイツは。

何で俺なんかを選ぶ。

俺なんか、生きるのもどうでもよくて、コモリ漁りをしてるどうしようもない屑なのに。

そもそも、他人が家族になれるわけがない。

「馬鹿馬鹿しい……」

「あア？」

「簡単に……家族になりてえなんて心にもないことを言つくな！ 迷惑なんだよ！」

家族を失った少年にとって、簡単に家族になりたいと言つるカが許せなかつた。

「違うっ！」

ルカは、少年の肩を掴んだまま叫んだ。

「お前は、本当は助けを求めてた。だけど、我慢して堪えて本当は爆発しそうで泣きたいのに抑えてる。素直になれ！」

「んなもん、てめえの勝手な妄想だ！　俺は誰も頼らない！　誰も信じないっ！」

「うるせえ！　無理矢理、自分に言い聞かせてんじゃねえ！　誰よりも人の温もりに触れたかつたんじゃねえのかよ、お前は！」

「だ、誰が……」

「俺を見ろっ！」

少年は目を逸らすが、ルカがそれを許さなかつた。

「お前は頑張りすぎた。長い間、よく頑張った。でもな…助けを求めるのは弱さじやねえ！　逃げるな」

助けを求めるのは弱さじやない。

じゃあ、何か？　強いつて言うのかよ。

本当にそうなのか？

そんなわけない。一人で自立して誰も頼らない。誰も信じない。

…違う。

俺は、怖いから逃げていたんだ。

存在を否定されるのが怖くて臆病になつてひたすら逃げて…気付いたらこうなつっていた。

こんな奴の言つことなんか偽善だ。反吐が出来る。

あの地獄を経験してないから、そう言えるんだ。

「ゴミのよう」に存在を否定されて罵倒されて殴られて、表の奴らやスラムに住む荒んだ奴らに抵抗するのだって相手が飽きれば終わるから耐えた。

だから、それなりの肩になれた。

誰も信じない。

誰も信じられない。

誰も助けちゃくれない。

人間扱いなんかしてくれない。
それなのに……。

「くつ……」

それなのに、どうして……。

どうして涙が出るのだろう。

「泣きたい時は泣け。怒る時は怒れ。楽しかつたり嬉しかつたら笑え。それって、当たり前だけどよ……気持ちいいもんなんだぜ？」

何を綺麗事を。

ふざけんな。うざつたい。消えてしまえ。

そう言いたかった。

「……」

言えなかつた。

喉につつかえてそれが言えない。

「もう、楽になつていいいんだ。本当のお前らしく生きればいい。そうすりや、こいつから変わつていけんだよ。俺がいつでも近くにいてやる。だから心配すんな」

俺を見てくれてる。

この男は、どうして……。

どうして、俺が欲しい言葉をくれるのだろうか。

ルカが少年の頭の上に手を置く。

そして優しく笑つてくれた。

視界が歪む。

きっと今の自分の顔は酷い。

情けなくて弱々しくて小さな子供がぐずつているような、そんな

顔に違いない。

「うつ……うう……ひっく……」

嗚咽が零れた。

涙が出たのなんていつ以来だろうか。
とつぐに枯れていったと思つていた。

表でみんなと同じように生きていのいか?

こんな臭くて薄汚れた肩の俺が、みんなと一緒にいられるのか？
一緒にいて…いいのか？

言葉が出ない。

この感情は何だ。

嬉しい…。

嬉しいのか、俺は。

辛くて悲しい涙じやなくて、安心出来て嬉しいのか？
そんなことを考える少年をルカが優しく抱きしめた。

「ほれ、これで誰にも見えねえ。我慢すんな」

ルカの優しい言葉。

ルカの腕の中に顔を埋めて、彼のシャツを思い切り握った。
「うつ…う…う…ひつ…うああああああ！」

大声で今までの全てを爆発させるように泣いた。

誰もが振り返ったが、ルカは気にすることもなく何も言わずに少年を抱きしめていた。

少年が全てを吐き出し終わるまで、ずっとずっと…。

泣くだけ泣いて、少年は公園のベンチに座っていた。
少年の目は、泣きすぎて目が真っ赤になっている。

「…………」

何だろう。

今まで心の中に圧し掛かっていた大きな大きな腫れ物が、すっと消えていくようだつた。

ぼうつと呆けてると、額に冷たいものが当たる。
顔を上げるとルカが、笑つてジュースを差し出していた。
太陽みたいな男だと思った。

暗闇の泥沼の中にいた自分を照らし続けてやつと外に出してくれた。

自然と顔が綻んだ。

「お、いいねー。その顔」

「…は？」

指をパチンと鳴らしやたらテンションが高いルカに、少年は怪訝な顔をした。

でも、今はそこまで嫌じゃない。

「ま、すつきりしただろ？」

「……うん」

素直に返事が出来た。

ジュースを受け取ると、ルカが隣に座る。

暫くの沈黙。

下を向いていた少年が小さく口を開いた。

「……シスカ」

「あ？」

少年は顔を上げた。

「シスカ＝ブルーネル。…俺の名前」

漸く名前を教えてくれたシスカにルカは目を輝かせて嬉しそうな顔をした。

「シスカ！ シスカか！ おう、わかつた。俺は…」

「ルカだろ。聞いたよ」

呆れたような表情でシスカは溜息を吐く。しかし、すぐに小さい笑みを浮かべた。

あたたかい。

こんな気持ちがまだ残っていたんだ。

「そんじゃ、これ飲んだらバイト先に行くぞ」

「…本当に働くのかよ」

「あつたりまえだろ。働くもの食つべからず。特に下町の俺達はな」

社会に出来る。

大丈夫だろうか。

ル力以外の人間は、きっと自分を「ヨミ」扱いする。
気を許しちゃいけない。

そんなことを考えて顔を強張らせるシスカに、ルカはテ「ポンをした。

「いてつ」

「余計なこと考えんな。俺達や、お前を^{さげす}襲む余裕なんてねえんだよ。行くぞ」

「う、うん…」

ルカがシスカの腕を引っ張る。

何故かルカの言葉だけは信じられた。

味方が一人いるだけで、こんなに気持ちが和らぐ。
不思議だった。

「んで、そいつが例のガキか？」

咥え煙草の派手なシャツにスキンヘッドの男。

それが雇い主のロイドだ。

ロイドは麦茶をシスカに差し出して座らせた。

「おう、シスカだ！」

歯を見せて嬉しそうに笑うルカに対し、ロイドは溜息を吐いてルカの肩に手を回した。

シスカに聞こえないように距離を置いて、小声で話す。

「馬鹿野郎、お前マジでガキじやねえか。うちは託児所じやねえんだぞ」

「大丈夫だつて。俺の日には間違ひねえ。頼むぜ、日那」
期待していた分、気落ちしたロイドは頭を搔いてシスカに向き合つた。

「おい、小僧。お前、力は？」

「は？」

「うちには配達業だ。力がねえ奴は使えねえ。だから聞いてんだ」「…あるつて言つて信じんのかよ」

「いや、どんくらい力があるか見せてもらひつ。来い」「ちょつ…触んな！」

有無を言わさず軽々とシスカを引っ張り、ロイドは倉庫へと連れて行つた。

中に入ると、やたら重そうな荷物が並べられていた。

「このリストに従つて箱に商品入れて整頓してラベル貼れ。因みに、かなり重いものもあるからな。それで見る」

「…上等だ。なめんなよ、ハゲジジイ」

シスカのその言葉にロイドは顔が引き攣り、倉庫に拳骨の音が響いた。

「いつてえ…！」

頭を抑えてシスカは蹲つた。

しかし、すぐに立ち上がりリストを見て溜息を吐いた。

すんすんと大股開きで歩いてロイドは扉を閉めて、店内に入った。

「ルカ！ 何だ、あのクソ生意氣なガキは！」

「落ち着けつて。しゃあねえだろ、それなりに大変なんだから」

「…つたぐ、言葉遣いから教えねえと配達のたびにクレームの嵐だな。でも、ほんとに良いのか？ 犬や猫じゃねえんだぞ。こんなことして、お前だつてどんな目で見られるか」

「あア？ 僕を誰だと思ってんだよ。下町一の荒くれ者ルカ様だぜ？ 怖いもんなんてねえよ」

「嘘だろ」

「ああ、嘘。アンタの拳骨は怖え。…それと」

ルカは視線を裏口の扉に向けた。

「あいつの死にそつだつた顔がな」

「… そうか」

フツと笑い、ロイドは新しい煙草に手をつける。

「で？ 何で、あのガキなんだ？」

「あ？ 一目惚れ」

「…お前、そつちの趣味か。確かに顔だけ見れば、可愛い顔してつ
けどよ。やるなら合意の上でやれよ？」

「ちつてよ！ 何かな、放つておけなかつたんだよ。それが何な
のかわからねえ。だから多分、一目惚れ。あいつの笑顔が見てみた
いつて思つてよ」

「お前、よくそんなキモい台詞乱立出来るな」

「うつせーよ！ 本心なんだからしじうがねえだらうが！ 気の利
いた言葉なんか言えるか」

頭をがしがしと搔くる力にロイドは、おかしそうに笑つた。
裏口の扉が開かれた。

「終わつた」

短くシスカが言つと、ロイドもルカも驚いた顔をする。
あれから三十分も経つていないのであれほどの荷物を？
いくら何でも早すぎる。

早いというより…速い。

中には五キロ以上もある荷物だつてあつた筈なのに。
ロイドはシスカを連れて倉庫へ向かう。

ルカもそれに続いてついていった。

倉庫の中は、綺麗にダンボールが整頓されていた。
いらない「ゴミは一つの袋にまとめられ、倉庫の端に置かれる。
ダンボールに貼つてあるメモとラベルは完璧に一致してい
た。ロイドの理想通りの完璧な仕事だつた。
呆気にとられてロイドの口から煙草が落ちる。

「… どうなんだよ」

怪訝な表情でシスカが尋ねると、ハツと目が覚める。
完璧だ。

丁寧で速くて正確。

一番欲しかった人材だ。

「よくやつた、坊主！」

「うわっ」

ロイドは笑いながら、シスカの頭を撫でた。

武骨な手でぐしゃぐしゃと撫でられているのに、腹は立たなかつた。

前だつたら間違いなく、怒りに触れているはずだつたのに。

「明日から此処に下宿しろ。一部屋余つてゐるからそれをやる。バイクもくれてやらあ！」

「…は？」

きょとんとシスカは目を丸くした。

「認めてくれたつてことだよ」

ルカが耳打ちして無邪気に笑つた。

認めてくれた？

存在を肯定してくれた？

必要としてくれる？

何だらうか、この湧き上がる気持ちは。

…嬉しい。

そう、嬉しいんだ。

欠けていつた心がパズルのピースみたいに一つずつ嵌まる。

自然と笑顔になれた。

やり直せる。

そう、最初からやり直せるんだ。

希望が湧いた。

第11話 生まれる絆

その日は、ルカの家に泊まることになった。
家族だとは言つてくれたものの、ルカの家には他にも同居人がいるらしく部屋数が足りない。

だから、明日からシスカはロイドの店で下宿することになった。
でも、そんなことはどうでもいい。

家が違くてもルカとの絆は変わらないから。
ふかふかの布団で寝られるなんて贅沢だと思つた。
何もかも嬉しくて、心の中がくすぐつた。

「じゃ、寝るぞ。おやすみ

「…うん。おやすみ」

目を伏せるとすぐに深い眠りに入れた。

朝が来るのは一瞬のことだと思えた。

昨日までは、夜が長く感じていた筈なのに…。

朝日の眩しさで目が覚める。

起き上がり重い瞼を擦ると、良い匂いがした。

コンソメスープの匂い…。

いそいそと着替えて、キツチンへ向かつた。

「おう、おはよー。待つてな、今出来るからよ」

鼻歌交じりで手際よくルカは料理する。

まな板の上で野菜を切るトントンという規則正しい音に何処か懐かしさを感じた。

「…何、すればいい?」

「あ？」

料理をしながら色々な音を聞いても、シスカの小さい声を聞き漏らすことは無い。

「…働かないと食えないんだろ。その、えと…手伝つ少し遠慮がちな声に田を丸くしていたルカだが、嬉しくて満面の笑顔を浮かべた。

「おうっ！ ジャあ食器出してくれ。三人分な！」

「…三人？」

「ルカー！ 腹減つたー」

シスカが不思議に感じてると後ろから眠たそうな男の声が聞こえた。

振り返ると、半分眠気眼の男がいる。年はルカと同じくらいだろう。

「ビート、てめえも働け！ シスカですら手伝つてんのに今更起きてくんじゃねえよ」

「やーん、ルカ君のいけずうー 朝起きたらだらだらしたいの一。だから」飯早くうー

「ぶつ飛ばすぞ！ 女と遊んで朝方に帰つて来やがつて！ あ、牛乳切れてる。買つて来い」

「えー、朝寒いから…やだつ」

「…殺すぞ、マジで」

ルカに引っ付くビートと呼ばれた男を見て、シスカは呆然とした。同居人がいるつて言つてたつけ。

こいつが、そうなのか。

何故か表情が曇る。

それに気付いたビートは、シスカに視線を合わせて笑う。

「君がシスカ？ 僕、ビート。ビート＝コンダクト。ルカと部屋シエアしてんの。邪魔かもしけないけど、よろしくね」

ヘラヘラとビートが笑う。

しかし、シスカは視線を逸らした。

この男は何となく……そう、不愉快だ。生理的に受け付けない。

「ルカ……」

少し震える声でルカの名を呼んだ。聞き取れるか取れないかの小さな声だった。

「俺が、買い物行つて……来る」

「え、シスカ。でも、お前」

「だ、大丈夫だから……っ」

あまりこの場所にいたくない。

ルカが自分の知らない顔をしているのを見ると……心の中がちくちくと地味に痛む。

「ああ、んじやこれ金な。パン屋の隣に店あつから、そこで買つてきてくれ」

「……うん」

金を受け取つて、シスカは家を出た。

バタンと扉が閉められ、ぱたぱたと走り去る音がする。

「あー……まずつた?」

「いや、しようがねえよ。でも、外の人間と触れるのはまだきつそうだな。おい、ビート」

「はーい、頼まれましたあー。結局外に出る運命なのね、俺は」
ぽりぽりと頭を搔いてビートは家を出た。

心配そうにルカは、小さく溜息を吐いた。

「少しずつ……少しずつ頑張れよ。シスカ」

優しい声色で言つた。

* * *

「うう、さつぶ……！」

外に出たビートは身震いをする。

「あれ……?」

左右どちらを見てもシスカの姿は見当たらぬ。

「足、はつや…」

しおっぱながら見失つてしまつた。

息を切らせてシスカは走つた。
別にいいじゃないか。ルカくらいの奴なら友達がいたつて当たり前だ。

何で、俺だけ見てくれてるなんて勘違いをするんだ。
とてつもなく自分が恥ずかしい。

だから走つてその気持ちを振り払いたかった。

「はあ…はあ…はあ…」

立ち止まつて呼吸を整える。

そして深呼吸をした。

「…牛乳、買つて帰らなきや」

とつぐに店を通り過ぎてしまつた。

引き返そうと振り向いて足を前に出そつとした時だつた。

「…ッ！」

目の前には、昨日の晩までのシスカと同じ瞳をした少年達。
スラムに住んでいる少年達だった。

シスカの瞳が戦慄いた。

「よつ、シスカ」

リーダー格の少年、バジルにシスカは震えた。

こいつは中々表に出ないはずなのに…仲間を率いて表に出るのは、
本気で仕掛ける時だけだ。

力のある奴を厳選して連れ歩く…一番関わつてはいけない存在だ。
「ちよつと、シラフ貸してもりづせ

「ああ、ルカと一緒にいたあの子？　いや、見てないよ」「行く筈の店や近隣の店に聞いても誰も見ていないという情報しか聞けなかつた。

一体何処へ行つたのか。

一度帰つてもいいと思ったが、シスカがいなくなつたと分かつたらルカは暴れて何処に行くかも分からぬ。

それを止めるのは、結局ビートだ。

「もちつと探すかー。　お？」

道端に光る何かが見える。

距離があつて何なのか分からなかつたから、近付いてそれを拾つた。

「硬貨？　もしかして、ルカから貰つたやつか」

そして周囲を見渡す。

「だから……何処にいんのよ、あの子」

薄暗いスラム通り。

胸倉を掴まれ、シスカは壁に叩きつけられた。

「ツ、痛……！」

肩を強打してしまい、痛みに顔を歪める。

バジルは、シスカの髪を乱暴に引っ張つた。

「光の世界のデビュ－おめでとう。……でもよ、こりや完璧な裏切りだぜ？」

「……別に、お前らの仲間になつたつもりは……ツ、ぐつ……！」

バジルの靴がシスカの腹に減り込む。

ぎりぎりと圧迫されて痛い。

「そういうことじゃねえんだよ。俺達は、薄汚れた屑。一人であつち側行つてもどうせ屑扱いだ。そしたらいつかまたこっちに戻つくる。今なら許してやる。戻れ」

「ツ、嫌だ！」

折角、認めてくれたのに。

友達、家族になれたのに。

離れたくない。

ル力と一緒にいたい。

「あー… そう？ おい、お前ら容赦しなくていいぞ。何だったら、ぶつ殺しても構わねえ。コイツはもう俺達の敵だ」

バジルがニヤけて指示を出すと、少年達は歓声を上げてシスカを取り囲んだ。

今回ばかりは、まずい。

相手が飽きるまで殴られ続けるのは違う。

そんなことをしたら、殺されてしまう。

しかも普通の奴らより桁違いに力もあって体も大きくて強い奴らを全員倒すなんて無理だ。

逃げないと…。

逃げなきや。

「は、離せっ！」

必死に抗うシスカだが、一人の力で敵うはずが無い。

重い拳で顔を殴られる。

「ぐつ…！」

「おつと。ほら、パース！」

反対側にいた少年が、シスカの腕を掴み、腹にストレートパンチを食らわせる。

「ツ、かはっ…！」

ローテーションで少年達に殴られ蹴られ、身体の感覚がおかしくなってきた。

本気だ。

全員、本気で楽しみながらシスカを殺そうとしている。

これ以上の地獄なんて無いから怖くない。

その思考が少年達を支配する。

立つ気力も無いシスカが傾くと、髪を掴んで何回も腹に蹴りを入れた後に落ちかけたシスカの背中をバジルの足が思い切り踏んだ。

「あぐつ！」

「結局、お前は一人じゃ何も出来ない可哀相な奴だよ。抵抗しても何も出来やしない。救われない。あっち側に行かなかつたらこんな目に遭わなくて済んだのにな。俺達は人間になれない。俺もお前もな！」

「はつ……あ、ぐう……あ、うう……！」

呼吸が上手く出来ない。

どうやつてするんだつけ？

ああ、そうか。

やつぱり、駄目なんだ。

俺なんか……俺なんかが、あの場所で笑つて生活なんて出来ない。ひと時の……夢だつたんだ。

ルカ……。

やつぱり、俺達は住む世界が違うんだよ。

その酷い暴行現場をビートは影から見ていた。

助けに入りたいけど、自分では助けにならない。

助けないと……止めないと、シスカが殺される。

息を切らしてビートは走つた。

この場を何とか出来るのは……シスカを助けられるのは、一人しかいない。

「ルカ！」

家の扉を強く開けてビートは叫んだ。

「おう、どうだつた？ シスカ、ちゃんと上手く出来たか？」

「んなこと言つてる場合じゃねえ！ あいつ、殺されるぞ！」

血相を変えるビートの言葉にルカは硬直した。

殺される？

誰が？

「あいつ……スラムの奴らにボコられて……いや、あれはそんなもんじゃない。早くしろよ！ 手遅れになつてもいいのかよつ！」

その言葉に、ルカは厳しい表情を浮かべた。

怒りを押し殺すが抑え切れていない。そんな表情だ。

「何処だ……。アイツは……シスカは何処だつ！」

「裏通りの……廃屋の前だ」

それを聞くと、慌しくルカは家を飛び出した。

ビートは何も出来ない自分が悔しくて、ただ友人の背中を見送ることしか出来なかつた。

バジルは、殆ど動けなくなつたシスカの頭に足を乗せて靴底でぐりぐりと踏み躡る。

「はつ……う……」

言葉が殆ど出ない。

このまま放置していたら、シスカは死んでしまうだひつ。ズタボロにされて動けなくなつて氣力もなくなつて……昨日の出来事が夢のように霞んでいく。

それでも、夢にしたくなつた。

あの男の優しさをぬくもりを……夢にしたくなつた。

ただ、もう全て手遅れだ。

せめて……忘れて欲しい。

この醜い……自分を忘れて欲しい。

自分を心配するルカに重荷を積ませたくない。

それを願う。

「なあ、シスカ。お前、自分の居場所何処にあると思つ？」

「ふ、は……あ……い、ばしょ……？」

頭を鷺掴みにされて宙に浮かされる。言葉を発する気力が無い。

息をするのも苦しい。

「何処にも無いよな？ 裏切つたこの場所も一瞬出れたあっちの世界も…お前は、何処にもいられない！」

「ツあ…！」

ガンツと掴まれた頭が無遠慮に壁に叩きつけられ、押しつけられる。

バジルの言葉を否定したかった。

きっと、ある。

自分がいられる場所を…希望を持ちたい。

「…お前、死んだ方が樂じやね？」

「……」

そうかもしけない。

死んでしまえば、こんな痛い思いも苦しい思いもしないで済む。だけど…死んでしまえば、あのあたたかさも嬉しさも喜びも感じなくなってしまう。

ルカに出会わなければ、忘れられたのに。

それでも、俺は…まだ信じたい。

あの男を。

例え住む場所が違くとも、優しく手を差し伸べてくれたあの男と一緒にいたい。

「シスカツ！」

ハツと田を開く。

幻聴？

ルカの声が聞こえる。

ルカがこんな所に来るわけ…。

昨日は、俺に会いに来ただけで…今、此処に俺がいるなんて分か

りっこないのに……。

「ル…力…？」

本当にいた。

ル力が…助けに来てくれた。
これが幻覚だとしても嬉しかった。
最後にルカを見れて嬉しかった。
意識が霞んでいく。

「あ？ 何だお前…」

バジルがル力を見た。

息を切らしたルカは、バジルが掴んだシスカを見て顔を熱くする。
「てめえらあ！ シスカに何しやがる！ 今すぐそいつを離しやがれ！」

今にもバジル達に掴みかかりそうな…怒りのあまり興奮したルカを見て、バジルは鼻で笑つた。

「ああ、これか。いいぜ、返してやるよ。…そりつ！」

バジルは、まるで人形でも捨てるようにシスカを地面に叩き付けて蹴り飛ばした。

「シスカ！ てつめえ…！」

動けないシスカに駆け寄りルカは抱きしめ、バジルを見た。
「そんな死にかけの肩で良かつたらいつでもくれてやるよ。精々、
飼い慣らすんだな。つか、そのままだと死ぬんじゃね？」

楽しそうにバジルが言うと、他の少年達は声を上げて笑う。

下卑た笑い声を上げたまま、バジル達は何をするわけでもなく去つていった。

今にも殴り飛ばしたい気持ちはあつたが、今はシスカが優先だ。

「シスカ！ 目を開ける、シスカ！」

ぐつたりとして目を開かないシスカをルカは呼び続ける。
いくら叫んでも起きないシスカの冷たい手を、ルカは握り締めていた。

「シスカアアアアア！」

裏通りにルカの叫び声が響き渡つた。

目が覚めると、古臭い天井が見えた。

助かったのか…？

生きている。

今、生きている。

ほつとしだが、あの時を思うと怖くてたまらない。
死にたくないという気持ちが生まれて、恐怖というものを感じた。
身体が震えそうだった。

「ぐあっ！」

身体を起こすと全身に痛みが走る。

痛くて痛くて涙が出る。

痛みや苦しみを感じることを想定すると寒気がした。
こんなに自分は弱くて臆病なのかと考えさせられる。
ふと寝息が聞こえる。

「…ルカ？」

傍らでルカが寝ていた。

疲れきついて、目が腫れてクマが出来ている。

「ずっと、お前の看病をしてたんだよ。ルカは」

顔を上げると、水を持ったビートがいた。

そのコップいっぱいの水をシスカに渡す。

「酷かつたぜ。泣きながら、お前が死んだらどうじょうつて…三日間、寝ないでお前を看病してた。こいつとは、長い付き合いだけど、あんなルカを見たのは初めてだつたな」

「ルカが…俺を？ こんなになるまで…？」

信じられないわけじゃない。

ルカは、心からシスカを大事にしてきた。

だけど、こんなになるまで…此処まで自分を大切に思っていたとは思わなかつた。

シスカは、コップの水面に映る自分とルカを交互に見た。

「それだけ、お前はこいつに必要されてるつてことさ。じゃ、俺は行くよ」

手をひらりと振つてビートは背中を向ける。

「何処に…？」

「六番目の彼女のトコ。帰るのは明日の朝にんまり笑つて、ビートは家を出た。

「……」

「コップを置いて、シスカはルカの燃えるような赤い髪を触つた。絶対、お前馬鹿だろ。あんなとこに飛び込んで…後先考えないで

ぱつりぱつりと咳く。

薄つすらとルカは目を開いた。

そしてぼんやりと視界に入つたのは、シスカの姿。

大きく目を見開き、シスカの肩を掴む。

「シスカ！ お前、大丈夫かつ？」

「いつた…！ ルカ、痛いっ！」

全身怪我をしているシスカは、意識はあつてもまだ重傷だ。嬉しさのあまりルカはそれを忘れてしまう。

「あ、わり。…でも、良かつた。ほんと良かつた。お前、全然動かないし…身体冷たいし…死んだんじゃねえかと思って、氣イ狂いそうだった」

「…心配かけてごめん」

シスカが俯く。

すっかり毒の抜けたような情けない表情だ。

「んなしょんぼりすんな！ やつぱ、お前無理してたんだな」

「…うん、かなり」

素直だつた。

あの場所にいて、自分も自然にそんな風になつてしまつていた。
だから、そんな自分は封印してしまおう。

本当の自分、此処で生きていける自分になる為に。

地獄を見る前の、太陽の下で過ごしてきたあの頃のように…。

「あ、ルカ。ロイドさんは…」

「あ？ ああ、仕事か。怪我治つてからでいいって…」

「そんなの駄目だよ。俺、やつと認めてもらえたのに…迷惑かけて」
表情が暗くなるシスカに、ルカはデコピンをした。

「いつて！」

赤くなる額を押さえた。

これ以上、怪我が増えたら困る。

「無駄に頑張りすぎなんだよ、お前は！ ちつたあ肩の力抜け」

「でも…」

「そんな身体、じゃ仕事なんねえだろ。あの親父には事情説明してあるし、向こうも納得してるから大丈夫だ」

「…いや、治す。今日中に治す。誰がなんと言おうと。それがルカでもね。止めても無駄」

「おー…すげえ根性」

呆気にとられて驚いた顔をするルカにシスカは笑つた。

「…俺、此処からまた始めてみるよ。もう大丈夫。なんか、周り怖いけど…今考えると凄い怖いんだけど…何とかやつてみるよ」

シスカの笑顔にルカもつられて笑顔になつた。

毒が抜けたせいで何処となく頼りない。

だけど、それが本当の彼だ。

それだったら、自分は彼の居場所を守り続けよう。

迷惑だつて嫌な顔されても。

だつて、それが家族つてもんだろ？

第12話 ともだち

ルカの口から聞いた衝撃の過去に、ユリアもアーニーも…クラス全体が沈黙した。

「…臆病で情けない馬鹿だと思ってたけど、まさかそんな過去があつたなんてね」

「でも、やっぱり…立ち直ってくれたんですね。シスカさんとルカさんは、ただの友達と思つていましたけど…立派な家族なんですね」

ユリアとアーニーの言葉にルカは頷いた。

「ルーディメンツよりも何よりアイツの敵は…本当の敵は人間なんだよ。だから、アイツをイカれさせてしまつ要素があつたら俺は全力で潰す」

その言葉に、クラスの一部の人間がルカ達に近付いた。

「その話、本当なのよね?」

中流家庭の女子生徒だった。

「つたりめーだろ! こんな話が俺の脳味噌で作れるとでも思つてんのか!」「

敵視したようにルカが叫ぶ。

「ごめん。スラム育ちつてだけで偏見持つて軽蔑してた。でも、同情するわけじゃないよ。ただ、頑張つていたあの子に対した自分の態度が恥ずかしいだけ」

「貴族の奴らに煽られ過ぎつてことだよな。今思つと腹立つぜ」

「そうね。皆でシスカ君を探しましょ。謝らなきや」

口々に他の生徒達が言うとルカ達は呆然とした。

勿論、それを快く思わない一部の生徒もいた。

だけど、皆のシスカに対する見方が変わってきた。

それが嬉しい。

しかし、そんな安心感を持つのも束の間だった。

バタバタと廊下を走り、一人の男子生徒が教室の扉を開いた。

「おいっ！ 誰か先生呼んでくれ！」

「きゅーー！」

血相を変えた男子生徒の後ろには、スフォルがいてルカ達に飛び掛った。

スフォルが必死に飛んできたということは、シスカ絡みだということが分かる。

「何かあつたのか？」

恐る恐るルカが尋ねる。

「裏庭で…やべえことになつてんだよ！ あのままじや、死人が出るぞ！」

その言葉に、ルカは青褪めて慌ただしく教室を出た。

「ちょっとルカ！ アーーミ、あたし達も行きましょー！」

「うんっ」

「きゅーー！」

「ユリアとアーネミもスフォルもそれに続いた。

* * *

裏庭では、シスカの周囲に男子生徒達が倒れ一人の男子生徒がシスカに胸倉を掴まれていた。

「ひつ…！ た、助け…」

「そうやつて俺が助けを求めても…お前らは笑つて踏み躡るんだろ？」

？」

哀願する男子生徒にシスカは冷たい目で静かに話す。

普段の情けなくて頼りないシスカの面影は、そこには無かつた。

「こ…こんなことして…お前どうなるか…わ、分かつてんのか？」

男子生徒は恐怖で声が裏返りながら、脅しにならない脅しを吹かけた。

「…どうなるか？」

シスカは鼻で笑う。

「やつてみろよ」

「がつ…！」

シスカは男子生徒の首を絞めた。

その力は、徐々に強くなつていく。

このまま力を入れ続けていたら首の骨が折れてしまいそうだ。

「シスカ！」

ルカの怒鳴り声が聞こえる。

振り向いたシスカの瞳は怒りに満ちていた。

その瞳にルカは一瞬背筋が凍つたが、ずかずかと歩いてシスカの顔を思い切り殴つた。

シスカの男子生徒を拘束していた手が離れ、そして倒れこんだ。そして、ルカはシスカの胸倉を掴んで起き上がらせた。

「落ち着け！ 何も壊れてねえし傷ついてねえから大丈夫だ！ 目覚めさせ！」

ルカがシスカの胸倉を掴んで叫ぶと、シスカの瞳が徐々に光を取り戻した。

「……ルカ？」

顔が痛い。

あいつらに殴られたものよりもずっと重い。ハツと周囲を見てシスカは青褪めた。

「ま、まさか…また、俺…」

「おう。久々にぶち切れやがったな」

ルカの言葉にシスカが口をパクパクとさせた。涙目になる。

「ど、どどどどどどしきょう！ 僕、やばいつて。しかも貴族に手出しちゃったよ…」「これ…」

「いいから落ち着け。…」この馬鹿野郎。見事に暴れやがつて…」

安心したようにルカは溜息を吐いた。

いつものシスカに戻ってくれた。

いつタガが外れて暴れるか… 最近は無かつたからもう出ないと思つていた。

自分の何か大切なものを脅かされるとキレてしまつ。

あの時の…家族との思い出を踏み躡られた時のよつて。

人格が変わるほどに暴走してしまう。

「やっぱ、ドブネズミは最終的にこうだもんな…。てめえ、ただで

済むと思うなよ」

呼吸を取り戻した男子生徒がシスカを襲むような目で見て逃げようとした時だつた。

バリケードの如くユリアやアーニー達が行く手を阻んだ。

「あんた達こそ…ただで済むと思つてんの？ これ、集団リンチの上に自分の家に泥塗つてんじゃないの？」

「いくら圧力をかけても、無駄ですから」

ユリアやアーニー達クラスメイトの眼光に男子生徒は、息を飲んだ。

「な、何でお前らまで…」

ユリアやアーニー達はともかく、何故クラスメイトまで。

状況が分からなかつた。

「別に俺ら、お前らの仲間でもねえし」

「シスカ君に酷いことしたら許さないから」

クラスメイトの態度が一変したのは、男子生徒だけではなかつた。

シスカもまた驚いていた。

明らかに昼間の時と態度が違つ。

「…ルカ、何か余計なこと言つた？」

「お、お…。ちょっと昔話を…」

その言葉にシスカはルカを殴り飛ばした。

「馬鹿ルカ！ 何でそう口軽いんだよつ。めちゃくちゃ恥ずかしい

じゃないか！」

「しうがねえだろ！ そのお陰で良い方向行つたんだから良いだろ！」

「結果的にだろ。もー：ホント勘弁してよ」

深い溜息を吐いてシスカは頃垂れた。

その様子にユリア達は笑つた。

「ちつ…何なんだよ」

男子生徒は悔しそうに顔を歪め、逃げて行つた。

「さつてとー…帰ろうぜ」

「いや、待つてよ。この惨状…どうすれば…だって、俺しじろもびじろに言葉を紡ぎ怯えるシスカの頭をユリアが平手打ちで叩いた。

「いつた！」

「つたく、さつさと帰つてやんなきゃいけないことがあるでしょ。引越ししないといけないんだから、こんなのに構つてらんないからね。行くわよ」

「ちょ…ユリア！ く、首が…！」

シスカの首根っこを掴んで引き摺るユリアを見て、アーニーは小さく膨れた。

（私がシスカさん連れて行きたかったのに）
少し恨めしそうにアーニーは、ユリアを見ながらルカと共に歩いていった。

学園から連絡が入りシスカは三日間の停学処分を受けた。

「転入初日に暴力事件起こしたつづーから、ルカだと思いまや…シスカ、お前何してんだ？」

「え、えつと…ちょっとハイになっちゃつて…」

ロックに正座させられ、シスカは口籠る。

「大人しい奴がキレると怖いって言つけど……お前は特にそのタイプ
っぽいな」

「い、いや……えっと……『めんなさい』」

床に頭を擦り付けて涙目になりながらシスカは謝罪する。
「ま、やつちまつたもんはしじつがねえ。でも三田で済んで良かつ
たな」

「即退学になるかと思つてましたけど。このままじや終わらないと
思つてましたから……」

「あんた、感謝しなさいよ！」

ロックとシスカが首を傾げると背後からコリアの声が聞こえた。
何故か仁王立ちである。

「コリア……一体、どういつ……」

「モティーフの配達店に行きなさい……」

「へつ？」

そこは、前にシスカがアルバイトをしていた場所だ。
「そこであんたを待つてるわ。行つて挨拶してきなさい……」

待つている？

どういうことだろうか。

「行つて来い、シスカ」

「え……？」

ロックが、シスカの背中を押した。
誰かが自分を待つていてくれてる。
コリアが呼んできたということは、悪い影響を及ぼせる奴じゃない。
シスカは頷いて、バイクを走らせた。

モティーフに辿り着いて、配達店の前で止まる。
エンジンを止めて鍵を引き抜き、店の扉を開いた。

「あ……」

視界に入った人物は、シスカも見知った顔だった。

「よう、シスカ。久しぶり」

手を振ったのはビートだつた。

すぐに怪訝な表情になり、シスカは店の扉を閉めた。

「待て待て待て！ いくらなんでも冷たすぎるわ！」

「だつて、俺お前嫌い。視界に入つてくるなよつ」

ビートが扉を開き、それをシスカが懸命に閉めよつとする。

「ひ、酷い！ 一緒に寝床を共にした仲じゃなにつ」

「…気持ち悪いからやめろよ」

あまりにも刺々しい言い方にビートは溜息を吐いた。

「一年経つても、俺には懷いてくれないのね」

「ていうか…何でビートがいるの？ 正直、邪魔なんだけど」

あまりのシスカの毒舌ぶりにビートはカウンターに伏して涙を浮かべた。

そんなビートを無視して、店の中に入るとロイドとモウ一人、そこにはいた。

「よう、シスカ。元気そうだな」

「おー、シスカ。おつひさー」

煙草を咥えるロイドと手を振る少女…制服からすると同じ学校だ。その姿にシスカの顔が明るくなる。

「二ムさん！」

「あつははは。相変わらず元気そうだね。ビートに浴びせる毒舌っぷりも超サイゴー」

その少女は、二の配達店を一週間で辞めた二ムだつた。

「そんでもごめんね。あたしが辞めたばかりに変な事態なつちやつて」

「…え、そんなこと…」

「二の馬鹿女。今更また雇えつてんじゃねえだらうな？」

「まつさかー。楽しそうだと思ってやつてみたら、疲れるし小遣いにもならない給料だしマジ勘弁」

あつははははと笑う二ムにロイドの機嫌が悪くなる。

「ふ、ロイドさん。落ち着いて…。でも、二ムさん…何で？」

「んー？ どつかの誰かさんが学校で超樂しい」としたから、色々揉み消したお礼を貰おうと思って」

「へつ？」

揉み消した？

あ、そういうえば二ムさんって一流貴族のお嬢様だつたつけ。見てくれば完璧に下町のノリに似てゐるから忘れがちだけど。学園の制服着てるつて事は…つまり、そういうことであつて。

「ま、まさか」

「うん。貴族の風上にも置けない恥知らずな馬鹿共にお仕置きしちやつた。てか、あたしシスカの超味方だしこんくらい朝飯前よ」

「は、はは…」

停学が三日で済んだのは、つまりこう」とうじい。

親の力だけじゃなく、いくつもの企業の代表取締役を務める彼女には貴族の殆どが逆らえない。

「でも水臭いなあ、シスカ。学園来るなら教えてよー。分かつてたら、昨日サボんなかったのにさー」

「」「ごめん。いきなり決まつたことだから…」

シスカの肩に腕を回しながら、二ムは笑つた。

「ま、どんまい。あー、これから学校楽しくなりそー」というわけでお礼して

「お、お礼つて…何すれば」

少し嫌な予感がした。

「可愛くて高性能の錬機手帳三十種類作つて。そのための三日間だから。あ、安心して。素材はこっちで用意するから」

シスカの思考が停止した。

基本万能用途のある錬機手帳…。

アルバムに音楽プレイヤーに位置情報システム…挙げたらキリがないその機械を三十種類。

「この二日間、睡眠を取ることは許されないだろ？…。
いくらなんでも酷い依頼だった。

「友達だもん。断れないよね？」

ニムの笑顔が凶悪な悪魔の笑みに見えた。

三日後。

今日も変わることなく、学園内は生徒達の漬刺はつしとした声がざわめいてる。

「あ、そういうえば今日だけ。シスカ君来るのって」

「うんうん。鍊機術の宿題教えてもらおーっと」

「アンタねえ…シスカ君に教えて貰うために宿題やつてないわけ？」

呆れるわ」

そんな一部の女子生徒が話をしていると教室の扉が開かれる。

「あっ、おは…よ？」

最初は明るい表情で振り向くが、次にはぎょっとした顔をしてその人物を見た。

彼女達が待ち望んでいた人物…シスカだった。

しかし、彼の周囲には禍々しい黒いオーラが渦まいており顔が青褪めていた。

「あーっ！ 来た！」

二ムが軽いステップを踏んでシスカに駆け寄る。

「で、例のものは？」

「……これ」

ラッピングされた女子が好むような袋を二ムに渡す。

「基本の情報ツールに三十種類違うデザイン…モニターは最新のハンマリングフィルタを使った十トンまでだったら傷一つつかない仕様…位置情報ナビは二ムさんの大好きなキャラクターがご案内。それと」

「うんうん、いいわー。いいわね！ しかもラッピングとかケースとか頼んでないのに作ってくれるなんて流石だわ」

「いや…あの…此処までやらないと、言われたことしか出来ないのかと二ムさんに殺されるから…。お陰でこの二日、仮眠すら取れなかつたよ…」

口に出していいが、その他にプレスのシミュレーションテストや調整もプラスされてシスカは今すぐにでも倒れそうだった。

「いやー、ホント助かるわ。お礼のおつりが出でやつわね」

機嫌良さそうに二ムは、にっこりと笑つた。
そのやり取りの中、ルカとユリアとアーニーが雑談を交えながら教室に入ろうとした時だった。

「ありがと、シスカ。愛してる」

二ムがシスカの首に手を回してキスをした。

マウストウマウスのキス。

柔らかい唇の感触にシスカの顔が紅潮した。

目が覚めるには、充分な衝撃だった。

それに呆然としたクラスメイトとルカとユリアだったが、アーニーは凶悪な珍獣でも見たかのような驚愕の表情を浮かべ身の毛が弥立つた。

「それじゃ、また今度何かあつたらよろしくね。良い出来の分だけ、良いことしてあげるから」

特に気にした様子もなく二ムは笑いながら上機嫌で席に戻り、鍊機手帳を弄り始めた。

放心したシスカは、胸の高鳴りが止まらなくて顔を真っ赤にさせたまま卒倒した。

「シスカさんっ」

誰よりも早くアーニーがシスカを支えた。

この三日間、シスカが殆ど部屋に閉じ籠つていたのも無茶難題を吹っかけた二ムだということが今分かった。

アーニーは、眉間に皺を寄せた。

(いくらあの事件を救つてくれたからって…キスすることないじゃない)

アニー＝ミは膨れた。

（はつ！ も、もしかして…この一人つて既にそういう関係？ そ、
そんなまさかつ！）

身分違ひの恋愛？

超一流貴族の二ムと下町に住んでいたシスカ。

二人が知り合いだとは聞いていたが、そんなまさか。

（い、い…いやあああああ）

アニー＝ミの表情が絶望したようなものに変わる。

「あ、アニー＝ミ？」

恐る恐るコリアがアニー＝ミに声をかける。

「ち、違うから！ そんなの絶対嘘だからっ…」

普段大人しいアニー＝ミが叫ぶとその場の全員がビクッとき身體を震わせた。

鍊機手帳に夢中の二ムと放心しているシスカを除いて。

「…アニー＝ミ？」

双子の片割れに何があつたのかと、コリアは心配でならなかつた。

「一体、何なんだ？」

流石のルカもアニー＝ミの様子にただ驚くだけであつた。

その日の授業は、シスカにとつての睡眠時間だつた。

その様子を隣で見ていたアニー＝ミは、ぼうつとしていた。

（…何か無防備でいるシスカさんつて、可愛いなあ）

授業は殆ど耳に入つていなかつた。

「では、次…。アニー＝ミ＝アナリーゼ」

教諭がアニー＝ミを指名する。

（シスカさんは、二ムさんのことどいつも思つてゐるんだろ。これ…積極的にアプローチしないと駄目かなあ）

「アニー＝ミー アニー＝ミ＝アナリーゼ…」

教諭がアニー＝ミの名を呼ぶ。

今度は怒鳴るような大きい声だ。

「は、はい！」

アニー＝ミは現実に引き戻され、大声を上げて立ち上がった。教諭は咳払いを一つした。

「これは、将来的に一般汎用として使用されるシンフォエニッタです。しかし、今は政府関連のみのトライアルとして使用されています。さて、このシンフォエニッタは、何に使用される鍊機動システムでしょうか？」

「え、えっと……それは……その……」

難題だった。

鍊機術に詳しくない上に授業を聞いていなかつたアニー＝ミの頭は混乱していた。

加えて今日は、予習ノートを持つてきていない。最悪だ。

「……いかにシステムを有効に使つたための高性能CPU」「システムの声が聞こえた。

寝言なのか、授業を聞いているのか分からない。「基本メモリは三十テラから三ペタまで。しかし、巨大システム専用のものなので現在研究中。一般汎用されるのは、一番小さいシステムのみと想定されている」

きつとそれが答えなのだろう。

「も」も「」と小さく解を唱えるシスカの寝言をアニー＝ミは復唱した。「よく予習してきているようですね。素晴らしい。着席しても良いですよ」

「は、はい」

ほつと息をついてアニー＝ミは着席した。

そして寝息を立てているシスカを見て、嬉しそうに笑った。

「うつわー……寝ながら授業受けてるとか器用ね」

ユリアが呆れたような溜息を吐いた。

「ヨリアの隣に座るルカは机に伏して爆睡していた。

「シスカさん！」

放課後、帰ろうとしたシスカにアーニミが声をかけた。

「ん？ どうしたの？」

「あの、ちょっと付き合って欲しいところあるんですけど」

「え、いいよ。じゃあ、ルカ達も誘つて…」

「い、いえ！ ちょっと時計が欲しくて。私、朝苦手なので時計を買おうと思って…でも、どういうのがいいか分からなくて。システムに詳しいシスカさんにアドバイス貰えたらって」

ただの口実である。

鍊機術関連の誘いならシスカは断らない。

それを確信しての誘いだつた。

「そつか。それだつたらルカ達は退屈かも…。でもいいの？ 僕、結構そつち方面だと…その」

「詳しい人に聞くのが一番ですかうつ」

逃すものかとアーニミは必死に誘う。

「あー…うん、わかった」

了承するシスカを見てアーニミの表情が明るくなる。

「それじゃ、行きましょう」

「…？」

何故此処までアーニミが嬉しそうなのか、シスカには意味不明だつた。

街に出ると、アーニミがリードしてシスカを連れ回した。

ファンシーショップにデパート。

そして鍊機動ショップ。

機械製品が置いてあって何がなんだか分からなかつた。

「あ、これ可愛い」

小さなオルゴールつきの時計が目に入った。
それを手にとつて、シスカは首を傾げた。

「あの…すみません」

少し遠慮がちにシスカは店員を呼んだ。

「はい？」

「あの、これオプションつけられますか？」

「ええ、つけられますよ。どのようなオプションを？」

につ、こりと笑う店員に、シスカは一つ咳払いをした。

「表面のガラス部分のフィルタをハンマリングフィルタのS型でお願いします。それから内部のオルゴールですが、チターの値を三つほど上げて下さい。それから消耗を防ぐためにアーコーギグをランク上のL型で。それと…」

「あ、あのー…お客様？」

少し引き攣つた笑顔で店員が制止する。

「あ、はい。何ですか？」

「申し訳ございません。当店では、オプションをメニューから選んで貰う仕様になつております…」

「あ…そ、そうなんですか。えつと、見せてもらつても…」

「はい、此方でござります」

そう言って店員は、メニューを渡す。

それを見ても機能性に特化するものではなく、アクセサリー等のオプションしかなかつた。

「…なんか、いいのある?」

アニメーにメニューを見せてシスカは溜息を吐く。

どうやら、自分がオタクだということをしらしめたことと気に入つたオプションがないことに落ち込んでいるらしい。

アニメー的には自分の好きな可愛いアクセサリーはあつたが、シ

スカの様子を見て購入をやめた。

「えっと、これ…また今度にします。シスカさん、行きましょ」

「うん…」

丸くなつたシスカの背中を押してアニー＝ミは外に出た。その後、何軒か回つてみるも「ザイン」と機能が一致するものは見つからなかつた。

二人は公園のベンチで休憩していた。

（うーん…。折角の「デート」なのに失敗しかやつたかなあ）

アニー＝ミは深い溜息を吐いた。

「何かごめん。俺、こういうのになると結局…」こうこうとになつちやつて

シスカが少し頃垂れて深い溜息を吐いた。

「あ、いえっ！付き合つてもらつただけでも嬉しいですしね…！」

「うーん…あ、ちょっと待つて」

何かに気付いたらしのシスカは、ベンチを離れて走つていつた。

（…？ 何だろう）

首を傾げてシスカの姿を見送るとアニー＝ミは小さく溜息を吐いた。（シスカさんは、デートだと思つてないんだろうなあ。友達との買い物程度にしか、多分…）

「はい」

シスカは、アニー＝ミにクレープを差し出した。

生クリームと色とりどりのフルーツの入つたクレープだ。

「あ、ありがとうございます」

アニー＝ミがクレープを受け取るとシスカは少しだけ微笑んだ。アニー＝ミの隣に座つてアイスコーヒーを飲む。

「あれ、シスカさんは食べないんですか？」

「いや、俺…その量食べれないしさ。それに、俺…男だから…その男が外で甘いものを食べるなんて恥ずかしい。

そんな時代錯誤なことを言わんとしているのがわかる。その顔にアニー＝ミは小さく笑つた。

「あ、良かつた」

「え？」

何が良いのか、アニー・ミはきょとんと目を丸くした。

「何か…ちょっと落ち込んでたみたいだから。食べ物で釣るのは良くないって思つたけど…やっぱ、アニー・ミは明るい方が似合つし…」

シスカのその言葉にアニー・ミの顔が紅潮した。

意外と自分を見てくれているという事実が嬉しかった。

クレープを口に含むと酸味の利いたフルーツと甘い生クリームがマッチして美味しかった。

「あ、美味しい」

「それなら良かつた」

美味しそうにクレープを食べるアニー・ミにシスカは笑いかけた。

優しい笑顔。

しかし、その笑顔はずつと向けられている。

何か…おかしい。

「あの…どうかしたんですか？ 憎く二口二口してますけど」

「あ、ごめん。何か、アニー・ミつて犬っぽいなって思つて」

「へ？ い、犬ですか？」

「何ていうか…人懐っこい仔犬みたいな。気に障つたなら…あの、ごめん」

アニー・ミは落ち込んだ。

恋愛対象どころか…犬扱い。

人間扱いすらしてもらえなかつた。

でも…それでも、シスカの笑顔を見るのは好きだ。

だけど、今日はもう一つ目的があつた。

シスカとニムの関係。

「あの…シスカさん」

「え、何？」

恐る恐る顔色を伺つてアニー・ミがシスカに尋ねる。

「シスカさんとニムさんつて…恋人同士なんですか？」

「……は？」

意味が分からぬといふ様子でシスカは固まつた。

「あ、あの……今朝のこととか……なんか、シスカさん……ニムさんのために凄く頑張つてゐるつていつか」

そこでアニーは、我に返つた。

（何これ！ 嫉妬丸出しじやない、あたしつ）

後悔に苛まれてゐると、突然肩を掴まれた。

「アニー！ あんまりおぞましいこと言わないで。本当に！」

「へ？」

おぞましいこと？

シスカの顔が段々と青褪める。

「あの人は、人に恩を売つて無茶難題なお礼をさせて相手が疲れているのを楽しんでいるドジなんだ。言われた通りにやつていけば、思つていたのと違うとか言われたことしか出来ないなんてこのお馬鹿とか……。今回だつて完璧にしてオプションつけなかつたら、俺殺されるところだつたんだから」

恐怖にまみれた表情でシスカは語る。

「で、でも……今朝のキスは」

「多分、あれもあの人道楽。俺の反応見て楽しんでる。でも、キスは初めてだつたかも」

「き、キスは……つて？」

他にも何かあるのかと恐る恐る聞く。

「俺の手使つて胸揉ませたり、耳噛んだり、首舐めたり……。セクハラだよ。何考えてんだか、あの人は……」

勘弁してよ、とシスカは頭を抱える。

つまり、シスカはセクハラの被害者だつたらしい。

「あつれー？ シスカ、そんなこと言つていいと思つてんの？」
「ひいっ！」

背後からニムの声が聞こえてシスカの背中に悪寒が走つた。

「今朝のキスもセクハラだなんて随分な言いようじやない？」

ニムがいた。

草葉の陰から歩いてくる。

「だ、だだだだって…ニムさん、いつも変なことばっかりして。といふか、いつからそじにいつ？」

「何よう、変なことつて。じゃあ、セクハラじやないつてこと教えてやるわよ。おいでなさい」

ニムがシスカの腕を、無理矢理引っ張る。

「う、ごめん。アーニーミー、また後で…。いや、今度時計作つてあげるか…つててて！ニムさん痛いつ」

無理矢理連れて行かれてしまつた。

アーニーミーは呆然とするしかなかつた。

「な、何なのよ！あの人ー！」

わなわなとアーニーミーの手が震えた。

誰もいない高台に連れて行かれたシスカは、ニムに怯えていた。一体何をされるのかと思うと震えが止まらない。

「じゃ、やるわよつ」

「な、何を…？」

楽しそうな表情のニムにシスカの顔が引き攣る。

「今朝の仕切りなおし」

「はあつ？」

「ね、シスカ。キスしよ」

満面の笑顔でニムが言つが、シスカは目を逸らした。

「そんな簡単に言わないで…下さい。だつて、俺…そういうんじや」

「じゃあ、あの子だつたら出来るの？」

「は？あの子つて」

「さつき一緒にいた彼女。アーニーミーひやんだつけ？アンタと一緒に奥手そよねえ」

「何でそこアーニーが田代へるんですか。今日はたまたま買い物に一緒に行つただけで…」

「ほんと、お馬鹿ね。シスカは」

「…はい?」

話が噛み合わないとでも言つよつて呆れた表情をシスカは浮かべた。

「いいから、いくわよつ」

「え、ちょっと…二ムセ…ツ」

有無を言わせず、二ムはシスカの唇に口付けた。

今朝みたいな軽い触れ合いでない。

二ムの舌が、シスカの歯を抉じ開ける。

「ツ！」

舌が絡み合い、吸われる。

身体のどこかがむず痒くなり、震える。

自然と二ムの身体を抱きしめていた。

(…じうせ、悪ふざけだ。でも…)

二つのセクハラと違つ。

こんな濃厚なキスは知らない。

悪ふざけも此処まで来ると酷い。

シスカは、二ムを離した。

「シス…えつ！」

そのままシスカは、二ムの身体を押し倒した。

「…悪ふざけもいい加減にしてください。じゃないと、怒りますよ

…」

真面目な顔つきだつた。

こんなことを別の男にしたら、間違いなく誤解されて[冗談じや済まない]ことになる。

「それとも…痛い目に遭いたいんですか？ 傷つくな、二ムさんなんですよ」

本気で心配して本気で怒つていいよつだつた。

その姿に二ムは小さく笑つた。

「시스カじやないとやらな『よ、』んなの…。だつて、本当にあたしシスカの『じ…』」

「…確かに二ムさんには感謝しています。それでも、取引代わりに『じ…』のは…俺、おかしいと思つんですね」

「おかしくてもいい。いいよ、別に好きになつてなんて言わない。でも…今は、今このムードで、何もしないなんて男じやないでしょ？」

「え…？」

「シスカ。本氣なの、あたし。今だつたら何をされてもいい」

「…二ムさん」

きつと二ムは本氣だ。

今だつたら…シスカになら何をされてもいいこと本氣で思つてゐる。普段は、こんなこと出来ない。

二ムとは友達だ。

恋愛感情なんて持つたこと無い。

「本当に…いいんですか？」

「うん。今ならシスカの『じ…』と何だつて聞いてやつ」

「それじやあ…」

ゴクリとシスカは息を飲んだ。

「家までうさぎ飛びで帰つて下さー」

シスカの言葉に二ムの目が点になる。

二ムから手を離して立ち上ると、シスカは溜息を吐いた。

「…別に報告とかいらないですか？」

「ちよつ！ あんた…この空氣で何もしない『まつ』？」

「出来ませんよ…。俺、そんな勇氣も無いし…もうこいつもつもつないし。第一…」

シスカは周囲を見て一呼吸置いた。

「此処、学園の近くなので誰が来てもおかしくありませんよ…」

その言葉に暫しの間。

「あー、そつか。人に見られるの恥ずかしいんだ？」

「あ、当たり前じゃないですか！ し、しかも…一応、俺…男だからそういうの…えと…」

「ほほう？ じゃあ、室内ならいいんだ？」

「何でそういう流れに持つて行くんですか。はい、うわざ飛び！」

「え…。はーい、分かりましたあ～」

少し膨れて、ニムはうさぎ飛びでその場を後にした。

その姿を影でアニーは見ていた。

最初から…最後まで。

（な、何なの…。あの一人っ！ ま、ますますわかんないつ）

アニーはただただ混乱するだけであつた。

第14話 摺れる自制心

ソルフェージュに戻ると玄関口にユリアが仁王立ちしていた。怒りのオーラを発している。

「え… ゆ、 ユリア？」

「ちょっとツラ貸してもらおうか。」のくそ野郎
「へつ？ エ、 ちょ… いだだつ！」

ユリアに耳を引っ張られシスカは連れて行かれた。庭園に辿り着くと、ユリアはシスカを突き飛ばした。

「いてつ…！ ど、 どうしたの？」

何故こんなにもユリアは怒っているのだろうか。皆目見当もつかない。

「どうしたのじゃないわよ！ よくも先にデートした女の子放つておいて、別の女とデート出来るわねっ」

「え…？」

きょとんとシスカは目を丸くした。

「えーと、誰と誰がデート…したの？」

「はあつ？ アンタがアニー放つて二ムとデートしたのは分かつてんのよ！ ホント最低な男よね、あんた！」

怒りのユリアが発した言葉に思考を巡らせ、シスカは苦笑を浮かべた。

「いや、アニーは買い物行つただけだし… ニムさんには拉致されただけだし…」

ユリアのドスのきいた眼力に、シスカは肩を震わせて口を噤んだ。シスカの胸倉をユリアは掴んだ。

「あの子がどんな気持ちでアンタを誘つたのか分かつてんの？」

—

ムとどうこうの関係が始めるつもつはないけど、他の子の気持ひがもんと教えてやりなさいよ！」

「！」誤解だよ！俺と二ムさんは、やうこつのじや……

「……ほんと、馬鹿」

「え……？」

「今度あの子のこと傷つけたら、絶対許さないから！」

乱暴にシスカの胸倉から手を離し、コリアは歩き去っていく。呆然とユリアを見送ったシスカは、体育座りで俯いて溜息を吐いた。

（アニー・ミが傷ついた？　途中で帰っちゃったから……だよね）

傷つけた。

そういう意味だったら、後で謝らないといけない。

アニー・ミを放つて、二ムに着いて行つた自分が明らかに悪い。それに、二ムのことにしてたって……。

あの高台のキスを思い出して、シスカは顔を紅潮させた。（何で二ムさんが、俺なんかのこと……。俺は、友達でいたいのに。それだけ）

シスカは自分の手を見た。

あのキスの時に抱きしめた自分の両手。

どうして、抱きしめたのだろう。

そして、あの雰囲気では無理矢理乗り切つたけど……流されていたら、もしかして。

「いくらなんでも、それは無いよね……」

はは、と小さく苦笑した。

それでも、あの出来事は暫く忘れられそうも無い。

アニー・ミには、本当に悪いことをした。

このお詫びは、しないといけない。

「よーうー モテ将軍！」

頭上から声がした。

顔を上げると満面の笑みを浮かべたルカだ。

「…何だ、ルカか」

「何だとは随分じやねえか！　ま、お前がそれ所じやねえのは分かつてるけどよ」「…人事だと思つて楽しんでる？」

「まあまあ、話聞けよ」

シスカの隣にルカが座つた。

「二ムのことなんだけどよ…。あいつ何で戻つてきたか、分かるか？」

「え？　二ムさんが戻つた理由？」

「…知らねえのかよ」

確かに二ムは、事業の開拓に街を出て他の街へと移つた。社員に任せてモテイーフに戻つただけだと思つてゐるが、違うのだろうか。

「親父さんが事業に失敗したんだと」

「え？」

二ムの父親？

完璧主義者でいくつもの大企業を仕切つていている男だ。そんな彼の手駒の一つの会社が駄目になつたくらいで、それが何だというのだ。

「そんでも失踪したらしくてな。今も捜索はしてるけど一向に見つかねえ。だから、家を守る為に戻つて來たんじやないかつて話だ。クラスの奴が言つてた」

「失踪つて…。家を守るつて、だつてあの人のお母さんは…。ほら、あの綺麗な…」

「は…？　おい、まさか知らねえのかよ」

「何が？」

二ムの母親を何度か見たことがある。

上品でおしとやかそうで…とてもあの人から二ムが生まれたのかと疑うくらいの清楚な人だ。

「あれ、母親じやねえぞ」

「え…？ それ、どうこう…」

母親じゃない？

だつて、確かにニムの父親と一緒にいたし家に出入りだつてして
いた。

自分の家のよう」。

「…まずつたなあ、くそ」

「ルカ、どうこう」とだよ。あの人ガニムさんの母親じゃないなら、
何なんだよ！」

「おい、落ち着けつて。何かおかしいぞ、お前」
立ち上がり興奮して叫ぶシスカをルカが制止した。

「別に…おかしくなんて、無いよ…」

落ち着いたシスカは、再び座り込んだ。

「それで…何。どうこう」と?」

動搖して。

どうでもいいじゃないか。

ニムさんの家庭事情がどうだうが、関係ない。

でも…。

でも…。

「…愛人なんだと。父親の。母親は、もう死んでるらしい」
シスカの表情が硬直した。

ああ、そうか。

だから、父親と寄り添つて歩いていて家にも出入りしている。
その父親がいなくなつたら、当然愛人は…。そういうことだ。
つまり、家を守れるのはニムしかいなくなる。

「…だから?」

自分でも冷たい声だと思った。

「だからつて、お前…」

「ニムさんの家庭がどうであれ関係ないよ。知つたことじゃない…」
そうだ。
知つたことじゃない。

俺には、関係ない。

母親がいなのに愛人を受け入れなければならない？
嫌なら受け入れなければいいじゃないか。

でも、あの人は違うんだ。

父親の重荷にならないようになりたくて、父親の幸せを願つていて。

だから、好きでもない愛人を母親のように慕う振りをした。
我慢してたんだ。

自由奔放な”振り”をして。

でも、だから何だつていうんだ。
友達でいることには変わらない。
変わらない、筈なのに。

「戻ろう、ルカ。少し冷えてきたし」

「お、おう」

ソルフェージュの玄関へと歩いていく。
突如、シスカの携帯端末が鳴った。

発信元は、ニムだ。

「……」

出るか迷つた。

反省すべきだ。

きっとまた軽々しくくだらないことをやるに違いない。
無機質で規則的な着信音が鳴り続く。

仕方ない。

そう思つて、シスカは通話ボタンを押した。

「ニムさん。本当に、いい加減に……して……」

先手を打とうと思つた。

しかし、様子がおかしい。

妙に静かだ。

しかし、すぐに大きな物音がした。

「シスカ……」

妙に弱々しい声だつた。

「助け…助け」

そこで、通話は切られた。

シスカの身体全体が硬直して、瞳が戦慄いた。
嫌な予感がする。

「あ、おい！ シスカ！」

自然と走り出していた。

ルカは追いかけようとしたが、それが出来なかつた。
あんなシスカは見たことが無い。

前はそんなことなかつたのに、ニムの話になると様子がおかしく
なるのは確かだつた。

その後姿を見て、ルカは呆然とするのだった。

高台。

公園。

学園。

配達店。

自宅。

彼女が行きそうな場所には、何処にもいない。

「何処だ…。ニムさん…！」

周囲を見渡す。

一体、何処にいるんだ。

息を切らす。

嫌な予感しかしない不安で怖くなつた。

「テメエが最初に誘つたんだろうが！ あアつ？」

男の怒鳴り声が聞こえた。

まさか。
まさか……。
まさか……。

* * *

「だ、だから謝つてるじゃない。冗談だつて……」

怯えた様子で二ムが男一人に言つ。

「良いことしないかつて言つて来るつてことは、そういうことなん
だろ？ 今更、冗談で済むかよ。いいから、こつち来いよ……」

「い、痛い！ や…やめてよ！ 男の癖に女の子にこんなことして

…」
「女だからするんだろうが！ 誰に電話したのか知らねえけど、な
めてんじやねえぞ」

男の一人が二ムを押し倒す。

「やつ……！ 嫌あああつ！」

二ムの悲鳴と同時に彼女を乱暴に扱つていていた男が吹つ飛んだ。

冷たく鋭い眼光。

シスカだつた。

「何だテメエ……」

「何だ？」

冷たい声で静かに言つと、男の胸倉を掴んで壁に叩き付けた。

「いつで！」

「お前らこそ、何やつてんだ？」

男は抗うが、シスカの強い力に押さえ込まれびくともしない。
その目と力に恐怖で男は口をぱくぱくと開閉させた。

「調子乗つてんじやねえぞ！ ガキが！」

もう一人の男が折れ曲がつた鉄パイプを持ってシスカに襲い掛か
る。

しかし、掴んでいた男を背負い投げして向かつてくる男を巻き込

んだ。

そして、男の一人の首を絞めた。

「調子に乗つてるのは、お前らだる。女の子一人相手に男一人が何やつてんだよ。この人に手出してみろよ。…殺すぞ」

「あが…！」

ギリギリと男の首を両手で絞める。

首の骨が軋み、本当に相手を殺してしまった。

「シスカ！ やめてつ」

ニムの声で、ハツとシスカは普段の表情に戻る。

男から手を離すと、二人は情け無い声を上げて逃げて行った。

シスカの顔が青褪めて、へなへなと座つた。

「あー…また、俺…。何でこう…」

落ち込んだ様子でシスカは頑垂れた。

最近、キレる確率が高い。

つい頭に血が上つてしまつ。

「…ニムさん、平氣？」

シスカは、優しくニムの肩を掴む。

情けなくて心配そうな表情だ。

「う、うん。あはは…ありがとつ」

頭を搔いて苦笑するニムにシスカは顔を上げた。

パン、と乾いた音が裏通りに響く。

ニムは呆然とした。

シスカの平手打ち。

初めてだつた。

「…本当に、心配しました。言つた筈です…。傷つくのは、ニムさんなんだつて。俺が来なかつたら、大変なことになつていたかもしない…」

シスカはニムを抱きしめた。

その強くて優しい抱擁にニムの頬が赤くなり、シスカを抱き返した。

「…」「めんね、シスカ」

「謝るくらいなら… 最初からしないで下さい。俺以外、だつたら…みんな、誤解して当たり前です…」

「…シスカは、誤解してくれないの?」

少し寂しげにニムが言つと、シスカは言葉を噤つくんだ。

少しの間を置いて、再びシスカは口を開いた。

「誤解して欲しいんです、か…?」

少し消え入るような声。

ニムは小さく笑つて、頷いた。

シスカは、顔を紅潮させた。

「でも、俺… その…。ニムさんとは…」

「お願い、シスカ。じゃないと…私、また」

「うつ…。それは、困ります…」

「じゃ、お願い」

ニムは笑顔を向ける。

慌てたように顔を真っ赤にするシスカは、息を吐いて少し抱きしめていた身体を離した。

「…本当に、もうやらないって… 約束、出来ますか?」

「勿論。あたし、約束は守るもん」

そして、目を伏せたニムにシスカは息を飲んだ。

この一回… 一回だけでいいんだ。

軽く、軽い所までで済ませる。

それが、彼女にとつて物足りなくとも… 一回は一回だ。目を伏せたニムにシスカは口付けた。

積極的に舌を絡ませる。

「んつ…」

拙いけれど、高台でキスした時よりも濃厚なキスだつた。

キスをしたままニムを優しく押し倒し、唇から首へと徐々にキスをした。

顔を上げるとシスカは自分のしたことに顔を赤くして、今にも心

臓が爆発しそうだった。

「キス、上手いじゃん。他の子にもしてたとか？」

「ち、違…！俺、こういうの初めてで…その…。本当に…いいの？」俺だから安心して呟いて言つなら…その…」

「此処までして何言つてんの、馬鹿。知つてるわよ。シスカだつて男の子だもん。狼になる時だつてあるよ、そりや」「うつ…。で、でも…」

「それとも、外だから嫌？」

「…もうそういうの、吹つ飛んでるかも」

はは、と苦笑してシスカは頬を搔く。

「…二ムさん。俺…やつぱり」

好きでも無い相手とこんなのおかしい。そうは思う。

流されていく。確実に。

「…お願い、シスカ」

彼女は求めている。

シスカが二ムを友達以上に好きじゃないことは知つていて。だからこそ、最初で最後のわがままだ。

そうだ、彼女の為に軽くだけ。

…最後までやらなければいいだけだ。抑えないと…。

そうじやないと、きつと今までの関係が崩れてしまう。

「…分かつた」

* * *

ジエントは、一人それを見ていた。

スフォルツィアンドのシミュレーション結果。

真面目な顔で、それを見ている。

「…やつぱり、そうか。彼は…」

意味深に咳いて、ジョントは溜息を吐いた。

「これ、報告するの勿体無いなあ……」

小さくぼやきて、子供のよつよつとした笑みを浮かべた。

憂鬱だった。

昨日の出来事を思い出して、シスカは机に突っ伏した。
幸いなのは知らないが、ニムは欠席していた。

シスカが憂鬱な理由。

あの後、自制心がきかず最後までしてしまったのである。

（しようがないじゃないか。俺だって、男なんだから）

はあ、とシスカは溜息を吐いた。

（でも、これでニムさんがあんなことしなければ…充分だ）

きつと彼女は、甘えたかったのかもしれない。

父親がいなくなつて寂しくて、あの広い屋敷に一人…だから心許せる自分を頼つてきた。

でも、その甘え方は歪んでいた。

「あ、あの…シスカさん？」

アニー・ミの声がした。

顔を上げる。

「あの…次、移動教室ですけど…」

「あー…」

ぼうつとして周囲を見渡すと、アニー・ミとシスカ以外誰もいない。
とてもじゃないが、授業を受ける気になんてなれない。
そうだ。

アニー・ミに謝らなきや。

「アニー・ミ…」

「は、はい？」

「んと…ごめん。昨日、置いていつたりして」

「…」

二人の間に沈黙が訪れる。

「あの、シスカさん…」

アニー・ミが何か言いかけた時、警報が鳴った。

避難勧告が発令された。

「…行こう、アニー・ミ」

「え、あ…はい」

一般市民は、シェルターへ。

騎士隊やそれに関係する者は、ソルフュージュへ急いだ。

今日のルーディメンツは、無数の足が生えていて身体の至る所にゼリー状の皮膚がテラテラと見える。

「何アレ。きっと…」

ユリアが怪訝な顔をする。

「そいつの装甲は硬い。通常の武器では傷がつかないから強度の高いビーム粒子の武器を装備させた。頼むぞ、シスカ」
通信でロックの声を聞いて、シスカは顔を上げた。

「…はい」

もう前ほどの恐怖はない。

何故か落ち着けた。

冷静になれば、きっと見える。

シミュレーションテストでもそりやつてきた。

でも、何処か精神が安定しない。

（駄目だ。集中しないと）

シスカは操縦桿を強く握った。

「さて、お手並み拝見だな」

カペラもブリッジで両腕を組んでモニターを見た。
(シスカさん…)

どうしてもアニー・ミは、シスカと二ムのあの高台のやり取りが脳

裏から離れなかつた。

その後の情事を知らないのが幸いなのだが、アーニーは深い溜息を吐いた。

ソルフェージュから飛び立つとそのままルーディメンツに息を飲んだ。

マシンガンを装備しルーディメンツに牽制すると、叫び声が轟き激しいスピードで向かってくる。

それを想定してビームサーベルを装備して斬り付ける。一刀両断したかと思えば、ルーディメンツが分離した。

「分離したつ？」

向かってくる敵が一体になつたことでシスカは焦り始める。「ど、どうしよう…。斬る度に分離するんじゃ…」、これ…

『シスカ！ 落ち着けつ』

ロックの喝に、ハッとシスカは抱えていた頭を離す。

『ダメージを与えることで増殖するなら、粉碎するんだ。爆弾があるからそれで叩け』

「は、はいっ」

パネルを弄り、爆弾を装備しようとした時だつた。

「え……？」

遠くに何か小さい影が見える。

岩陰に隠れていたのは、貴族の男子生徒達…アルベルトとジェリードだつた。

「へえ、あれがブレスか。あの弱虫シスカが乗つてなんてまだ信じられねえぜ」

「どうせ無様に倒されるんだろ。まぐれがそう何度も続くものか。見届けてやろうぜ」

笑いながら、一人は双眼鏡でその戦いを見ていた。

その二人を見つけたシスカは、目を戦慄かせた。

「な、何で人が…。避難勧告は出た筈なのに…」

『シスカ、どうした』

「民間人が二人ほどいます！ 敵を引き付けながら遠ざけます」

『待て、シスカ！』

ロックが呼び止める前にはフオルツアンドが敵を引き付け、アルベルトとジェリドから離そうとする。

そのためには、近接戦に持ち込むしかなかつた。

（どうしよう。ああは言つたけど…守りながらの戦闘なんて）

いつも以上に神経質にならなければならない。

敵を引き付けようとすると、どうしても一匹しか引き付けられない。

目の前にことに集中していたせいが、ハツと氣付くともう一匹が二人へと向かつていた。

「え、あれ…やばくね？」

「う、うわああああ！ に、逃げろっ！」

二人が走つて逃げようとするが、敵の方が速い。

「くつ…」

スフォルツアンドは走つた。

間に合え…間に合え…間に合えつ！

ルーディメンツが黒い霧を吐いて二人を攻撃しようとした時、ギリギリのラインでエネルギー・シールドで守つた。

初戦で使つた搭載されていないはずの装備だ。

「早く…早く逃げて！」

シスカが叫ぶ。

「は？ …助けてくれた？」

「お、おい！ 早く行くぞつ」

呆然とするジェリドをアルベルトが急かした。

黒い霧がシールドを溶かしていく。

「一人が遠くに逃げるまで耐えないと…。

「や、やばい…！」

「一人が充分な距離に到達しそうという時、シールドが割れた。

「うわあああああああ…」

黒い霧がスフォルツィアンドを貫き、コックピット内のシスカを捕らえた。

「シスカ！」

ロツクが叫ぶ。

まさか、また…。

今度こそ、あんな奇跡は起きない。

「くっそ！ いつになつたら、俺は出れるんだよ！」

「落ち着けルカ。今騒いでもどうにもならん。シスカ、聞こえるか

? シスカ！」

通信を送り、ロツクは叫んだ。

「コックピット内のシスカは、黒い霧に首を絞められていた。

「ツ、かは…ツ。だ、大丈夫で…すっ」

精一杯の返事だった。

意識を強く保っているからか、飲み込まれることはなさそうだが
息苦しいのは変わらない。

（苦しい…。早く、やらないと…！）

操縦桿に手を伸ばし体勢を立て直そうとした。

しかし、ルーディメンツが先にスフォルツィアンドの頭に噛み付いた。

「ひぎつ、ああああああ…！」

脳味噌を無理矢理こじ開けられるような感覚。

何だこれは…。

スフォルツィアンドが傷ついて、どうして中の人間に此処まで影響

が出る？

人間と機械は切り離された存在のはずなのに、神経が通っているようだつた。

ルーディメンツの歯がスフォルツァンドを捕食する度、シスカの脳が汚染され、激痛が走る。

「うあ…ツ！ ぐつ…ああう！」

ガリツ…ガリツ…ガリガリツ

脳内を貪られる。

それがルーディメンツの栄養となつていた。

「やめろおおおおつ！ うわああああああつ！」

シスカは叫んだ。

食べられる。

このままじや… 内部から汚染されて食べられてしまつ。

ガリツ…ガリリツ…バリツ…バリツ…バリツ。

「ひつ！ ふう…あつ！ ああああう！」

バキッ。

亀裂が入つた。

「…ツ、あ…！」

シスカの目が大きく戦慄いた。

何かが壊れる音がした。

スフォルツァンドが停止し、シスカの脳内にルーディメンツが干渉してきた。

「ツ、ああああああああああつ！」

「シスカツ！ 返事をしろ、シスカツ！」

ロツクが呼びかけるも聞こえるのは、シスカの悲鳴だけだつた。

「どういうことだつ！ ブレスが傷ついてもパイロットにそこまで影響は…！」

「同化しているんだよ」

焦るロツクに静かにジョントが言つ。

「おかしいと思つたんだ。多少パイロットとブレスの相性にズレがある筈なのに、シスカの場合はそれがなかつた。データを見て確信したよ」

「…どうしたことだ」

「一ミリのズレがないんだよ。だから常に安定していたし、自分の手足のように操縦できる。相性が良すぎるどこの話じゃない。同化しているとしか思えない」

その言葉にロツク達は驚愕した。

「…へえ、興味深い」

ニヤリとカペラが笑つた。

「テメエ…！ シスカがあんな目に遭つてゐるのに何笑つてやがる…」

ルカがカペラの胸倉を掴んだ。

「やめる！ ルカっ」

ロツクが制すると震えてルカが手を離した。

最高責任者に手を出したらどうなるかくらいルカにも分かっている。

身なりを整えてカペラは、息を吐いた。

「今までにない症例だ。ブレスとの同化。それが吉となるか凶となるか、楽しみだな」

「てめつ…！ あいつを何だと…！」

「兵器だ。ルーディメンツを倒すための道具だよ」

「ふ…ふざけんなあああつ！」

ルカの怒りが頂点に達した。

「ま、待つてください」

今すぐにでもカペラに殴りかかりそうなルカだったが、アーニーの焦りの声が上がつたことで止まつた。

「パイロット…スフォルツアンドから分離。る、ルーディメンツとのシンクロを始めました！」

「な、何だと…」

ルーディメンツとのシンクロを開始?
もしじェントの推測が本当なら…。

スフォルツアンドの代わりにルーディメンツと同化するところに
とか。

しかも、今のシスカは脳が汚染されている。
嫌な予感しかしなかつた。

シルターに到着したアルベルト達は、恐怖に息を荒げていた。

「あ、あいつ… あんなのと戦つてんのかよ！ や、やっぱくね？」

「つか、俺達守つたせいでやべえことなつてやがる。し、死んだら
どうしよう…」

アルベルトとジーリードは、頭を抱えて涙目になつていた。

「どうこうこと…？」

二ムの声が聞こえた。

「ど、どうこうことよ… シスカが死にそつて… あんた達を守つ
た所為でって、どうこうことよ…」

怒りの形相で二ムは叫んだ。

アルベルト達は、黙つて田を逸らした。

拳を握つて歯を食い縛り、二ムは座り込んだ。

「シスカ…。お願ひ、死なないで…。戻ってきてよ…」

涙声で二ムは切実に呟いた。

第16話 知りたいもの知らないもの

ルーディメンツに脳を食まれ、シスカは操縦桿を握り堪えていた。自分でも分かる。

飲み込まれていくことが、分かる。

でも、絶対に負けたくなかった。

何処までもこいつらは、干渉してくる。身体を取り込もうとしているのが分かる。

きっと、自分が戦う前は同じように戦っていた人達がいた筈だ。今も…みんな、戦っている。

きっと今まで沢山犠牲が出たのだろう。

プレスが一機しかないのはそのせいかもしれない。だとしたら…これ以上、犠牲を出したくない。その中には勿論自分も…。

「ツ、…ぐうっ！」

脳を搔き混ぜられる感覚がして、何度も吐きそうになる。

通信のパネルを押すが動かない。

スフォルツァンドも機能を停止している。

絶望的…。

いや、絶望なんて…簡単に思っちゃいけない。

生きている限り…絶望なんかない。

絶望を感じていた二年前だって、自分の足で歩けた。ルカがいたから、一緒に歩けた。

今は、仲間がいる。

騎士隊のみんなが…してくれる。

だから、俺は負けない。

「負けて…たまるかああああああ…！」

汚染された脳内を振り払うように顔を上げて、操縦桿を力いっぱい

い握り締めた。

この気持ちは自分だけのものだ。

この気持ちまで侵されるわけにはいかない。

だから、頼む。

動いてくれつ！

シスカの叫びに呼応するように、スフォルツィアンドの目が光り再起動する。

それだけではない。

スフォルツィアンドのスマルト色の装甲が眩いほど更に青く輝いている。

「これは…」

自分でも不思議な感覚がした。

力が漲つてくる。

手に残る光の粒子を握り締める。

何がなんだかよく分からない。

でも、これは自分を優勢に立たせてくれる力だ。

あの時…初めて戦った時の力の比じやない。

あんなビームやシールドの比じやない力が漲つてくる。

シスカは、スフォルツィアンドを走らせた。

大きく口を開ける敵が迫つてくる。

その口に拳を入れて手を開くと爆発的なエネルギー粒子が弾け、ルーディメンツは木つ端微塵に吹き飛んだ。

「あと、一匹！」

ビームサーべルを構え、突進する。

普通に斬れば分裂するのは分かつている。

だつたら…。

「粉々に吹き飛ばすだけだつ！」

敵の口から発せられる泥のような液体。

地面に跳ね返り、スフォルツィアンドの足の装甲の一部を溶かした。

「うぐうつ……！」

溶けた瞬間、足に激痛が走った。

「ああっ！……ぐつ……くつ……！」

この痛みが、生きていることを実感させてくれる。

「うおおおおおおつ！」

痛みを振り切るように叫んで、敵をビームソードで串刺しにしてスフォルツィアンドから伝わるエネルギーがビームサーべルを伝わり敵の身体へと集中する。

ビームサーべルを抜き取り、敵から離れた瞬間、爆発が起きた。戦闘が終わつた後、シスカは動かずに自分の手を見ていた。

スフォルツィアンドと繋がる神経、謎の爆発的な力……。

スフォルツィアンドとは何なのか、ブレスとは何なのか……ルーディメンツとは何か。

その答えを知りたかった。

大事な人達を守るために戦う。

でも、答えを知りたい。

政府が何故、こんな力を持っているのかと。

ソルフェージュに戻つたシスカは、厳しい顔をしていた。

皆、勝利に喜んでいたが、何處か雰囲気がおかしいシスカに気付いて周囲も大人しくなつた。

「よつ！ シスカ、やつぱお前はやる奴だと思つ」

「ごめん、ルカ。後で聞くから」

ルカを横切つて、シスカは先程の戦闘で痛めた足を引き摺つて力ペラとシロフォンへと近付く。

少し緊張した様子で目を泳がせ、漸くその顔を上げた。

「あの……教えて欲しいことが……あるんです。その、スフォルツィアンドは」

「今日はよくやつた。疲れただろう、休め」

シスカの言葉を遮り、カペラがはつきりと物言いをする。

「聞いてください。俺…！」

「悪いな。こう見えても忙しい身だ。今、君に語ることは何も無い」

「そんなつ！ だつて、俺とスフォルツァンドは！」

「ぐどい。今日はもう休め。…命令だ、分かったな？」

「ちょっと待つ…待つてください！」

「シロフォン、行くぞ」

「はつ」

背中を見せてカペラとシロフォンは、去つて行った。

語ることは無い。

どうして…？

だつて、知らない」とばかりじやないか。

それなのに、どうして教えてくれないんだ。

モヤモヤする。

物凄く、心の中が…不快だつた。

「シスカさん…」

シスカが俯いて拳を握る姿を見て、アーネミは小さく彼の名を呼んだが返答は無い。

俯いているシスカの頭に大きな手が乗る。

顔を上げた。

ルカだ。

「腹減らねえか？ 何か食いに行こうぜ。少し落ち着いてからでもいいだろ」

シスカの心中を察し、満面の笑顔をルカは浮かべた。

こういう時、ルカのこの笑顔に救われる。

単純だと思うが、少しだけ心が軽くなつた気がする。

「んー！ あたしもおなかへつた。アーネミも行こうよー」

「う、うん！」

背伸びをするユリアとシスカを見ていた視線をユリアに向けてア

「一ミも便乗する。

「おう！ ロック達はどうすんだ？」

ルカがロックとジエントに声をかけるが、一人は苦笑した。

「大人は、ガキ共と違つて仕事あんだよ。お前らだけで行って来い」

「まあ、あんまり遅くならないようにな。特にシスカは疲れているんだから」

「あ…は、はい」

氣を使つてくれたのかどうなのが分からない。

それでも、今は大人達がいると余計なことを聞いてしまいそうだった。

また今度、頭の中を整理しよう。

今は…少しくらい、氣が緩むのを許して欲しい。

「で、何が食べたいのよ。シスカに合わせるわよ。なんたつて今日のMVPなんだからね」

「え…と、じゃあ…あの店かな」

「おつ！ もしかして、あそこか。お前も好きだな！」

ルカは足を引き摺るシスカの肩に腕を回し、無理矢理自分の歩幅に合わせ歩いていく。

「…何処？」

コリアとアーミは顔を見合わせ、首を傾げた。

向かつた先は、一軒のラーメン屋だった。

店内はお世辞にも綺麗とは言えなくて、壁には油の染みがあり何処か一昔前の雰囲気を彷彿とさせる。

「よーつす！ 親父、久しぶりだな」

「久しぶりも何も、おめーは昨日来ただろ？が

頭にタオルを巻いて無精髭を生やす男が豪快に笑う。

「おつ！ シスカが来たってことは…恒例のアレか！」

「その為に此処選んだんだもんな？ 賞金高えし」

「うん。 おじさん、俺いつもの」

明らかに常連のシスカとルカを見てコリアとアーニーは呆然とした。

「しょ… 賞金？」

「お前ら適当に頼んでいいぜ。どうせシスカの奢り…つか、タダだしな」

「は…？」

コリアとアーニーは意味が分からぬといつた様子でルカとシスカを見た。

未だに状況が分からぬ。

「まだ決まつたわけじゃねえ！ シスカ、今度こそ負けねえぞ！ 今回はこれだつ！」

バン！ と店主は、壁に張つてあるチラシを叩いた。

「激辛味噌特盛ラーメン、特盛チャーハン、餃子三十皿！ スープ一滴、米一粒残すことなく三十分以内に食えれば、賞金一万ネカだ！ 食えなかつたら、料理分の代金だ。やめるなら今のうちだぜ、シスカ！」

自信満々に腕を組む店主が笑つも、シスカは何事も無いように力 ウンターに座つた。

「じゃ、それでお願いします」

シスカは、特に怯える様子もなく店主の挑戦を受けて立つた。

シスカにとつては、良い小遣い稼ぎだつた。

他の同じような場所へ行つても賞金は精々三千ネカ。 そうなると、この店は七千ネカも稼げる。

たくさん食べてお金も貰える。

貧乏なシスカには、持つて来いの挑戦だつた。

ぐぬぬ… と呻き、店主は厨房の奥に消えた。

「だ、大丈夫なんですか？」

「シスカはこの店のチャレンジ常連だからな。 今まで、全勝してゐる

し大丈夫だろ」

「…どんな胃袋してんのよ」

呆れた表情でユリアはシスカを見る。

アニーミは心配そうにおろおろしていて、ルカは勝利を確信する
ように笑いながら各々が食べるメニューの注文をした。

そして並べられたチャレンジメニュー。

店の客全員が、ギャラリーとしてシスカを見ていた。

「…よし、始め！」

店主の掛け声を合図に割り箸を割り、シスカの挑戦が始まった。
ただ食べるだけではなく、無駄の無い動きはまるで研究を重ねた
上で身につけた技術のようだった。

しかも時間を気にしながら苦しそうに食べるのではなく、美味し
そうに食べている。

しかし、そのスピードは常人を卓越していた。

客全員が魅入っている中、最後のスープ一滴を飲み干しどんぶり
を置いたことで勝負は決した。

「よつし、終わつたな。さて、タイムだが…。……は？」

店主がストップウォッチを見て大量の汗を流しながら震えていた。
ゴクリと生唾を飲んでシスカ達が店主を見ると彼は、ストップウ
オッチを前に出して涙を飲んだ。

「一十三分四十秒…。うおおおおおつ！ 新記録じゃねえか、シス
カ！」

「今回も勝つたよ、ルカ！」

ルカとシスカがハイタッチすると、客からも歓声が上がり拍手が
送られる。

「あ、おじさんご馳走様でした。激辛味噌おいしかったです
特に嫌味でも何でもなく、シスカが笑つて見せると肩の力が抜け
たように店主は溜息を吐いた。

「つたく…おめえには敵わねえよ。このチャレンジコースで稼げる
と思いまや、おめえみたいなのがいるしよ。…まあ、おめえの姿見て

安易に挑戦した奴の屍は見てきたけど

「し、屍って…。あ、おじさん。あとアイス食べたい」

「まだ食べるの?」

流石のコリアーも突つ込まれるを得ない。

あれだけ食べておきながら、まだ食べるといつシスカの胃袋が信じられなかつた。

しかもラーメン屋にアイスが置いてあるのかという疑問もあつたが、店主はすぐに市販のカップアイスをシスカへと渡した。

「この店でアイス食べる奴なんて、おめえしかいねえよ。…つーか、うちじゃ扱つてねえんだけどな。良い食いつぶり見せてもらつたら、おまけだ」

「ありがとう、おじさん」

美味しそうにシスカはアイスを食べていって、店主は機嫌よそそうに笑つた。

しかし、ふと「――」は疑問に思つたことがある。

「あれ? そう言えれば…シスカさん。以前、私にクレープ奢つた時に全部食べれないって言つてましたけど…あれって」

「あー、あれ?」

前に時計を探しに「――」と掛けた口を思い出した。

「食事とデザートは別だから」

確かに別腹という言葉はある。

しかし、シスカの言つてこむ「」とはそういうではなく食べられる量の問題を言つてゐるのだろう。

だが、シスカがこれだけ大食いであればクレープの一つくらいものともしないと思つたが…。

「あと、ちょっと…生クリームが苦手でや」

確かに、デザート系のクレープに生クリームは付き物だ。

それじゃあ、それと量の問題を取り除いたら…。

想像するだけで恐ろしい。

「ぎやあああああ」

客の一人が悲鳴を上げた。

「かつら！ 辛いっていうより、痛い！」

シスカが挑戦したメニューの激辛味噌ラーメンの並を食べていたらしい。

飛び跳ねるほど辛さらしく、店主は誇らしげに笑つた。

「あつたばうよ！ なんたつてブート・ジョロキア十七本をスープに染み込ませたんだからな！」

その場の全員の顔が青褪めた。

ブート・ジョロキアといえば世界一辛い唐辛子と有名だが、それが十七本。

明らかに人間が食べる辛さでは無い。

それを涼しい顔で食べるシスカは、化け物かと思つてしまつ。

「ほんとにシスカの辛党には参るぜ。おめえ、いつか早死にすんぞ」

「大丈夫だよ。普段はちゃんと栄養取つてるし」

「だったら良いけどよ。おめえが来ると心が躍つちまうぜ、別の意味で」

「うん。チャレンジメニューとは別に、此処おいしいから。次に来るのが楽しみになるよ」

「かー！ 言つてくれるじゃねえか！ その言葉あつてこそこの商売やつていけるつてもんだ！」

「うん、いつもありがとう」

そんな風に和やかな会話を聞くが、先程の戦場が忘れられないユリア達にはその光景が次なる戦いの宣戦布告にしか聞こえなかつた。

「流石は、俺の見込んだ男だけあるぜ」
ルカは、満足そうに笑つた。

店を出る頃には、陽が沈みかけていてオレンジ色の空が眩しかつた。

「セーツてど、そろそろ帰ろつが。あたし、夜に見たいテレビある
し」

「俺も、ちつと筋トレしねえとな。最近サボリ気味だし」

ユリアとルカは帰宅モード万全だった。

「それじゃあ、帰りま…」

「あ、ごめん。俺とアニーちゃん用事あるから先に帰つてて
一人と同じく帰宅モードに入らうとしたアニーの言葉をシスカ
が遮る。

「えつ？」

驚いてアニーは、シスカを見た。

その様子を何となく把握したユリアは、笑みを浮かべた。
「分かつた。でも、あんまり遅くならないよつにねー…シスカ」

「え？ うわつ！」

ユリアはシスカの肩に手を回し、耳元で囁いた。

「次、アニーを傷つけたら全力で殺すから覚悟しなさい」
「は…はい…」

先日、アニーを置き去りにしたことを見ついているのだろう。
あの時のことを肝に銘じておけということだ。

次、同じことがあれば自分の命は無い。
確信できた。

「おう、シスカ。あんま遅くなんなよ？ 疲れてんだからな」

「うん、わかつた」

ルカが念の為と注意をすると、シスカは頷いた。

「んじや、行くぞ」

「はいはい。アニー、シスカに襲われたら全力で助けを求めるの
よー」

そう言つてユリアは、ルカと共にソルフュージュへ向かって歩き
出した。

「もう、ユリアったら…」

「はは、信用されてないなあ」

シスカは苦笑を零すも、次にはアーニーを見て微笑んだ。

その笑みにアーニーの胸が高鳴った。

「行こうか」

「……はいっ！ あ、あの……シスカさん……。その……」

「ん？」

「その……あの……手を……繋いでも……」

精一杯の勇気だった。

きっと自分がアプローチをしないと誰かに取られてしまいそうで不安だった。

二ムのことがあった以上、負けていられない。

二ムに負けないくらい、彼に気にかけてもらいたい。

（だ、駄目かな……。どうしよう）

駄目だつたらどうしたらいいのかと考えて、うろたえるアーニーの前に手が差し出された。

「うん。ちょっと足痛いから、手……貸してくれると嬉しいかな。あ
りがとう、アーニー！」 その……気を遣ってくれて」

アーニーの想いは届かずには勘違いをしていたが、それだけで充分
だつた。

シスカの手をアーニーが取る。

胸が高鳴つて少しうるさい。

それでも、嬉しくて嬉しくてたまらなかつた。

第17話 少女の面影

シスカとアーニーは、既に使われていない大きなビルの最上階を目指した。

差し詰め、経営困難になつて倒産した企業といふところだらう。人はいなくても、オフィスのような机や椅子が各々の部屋に並べてあつた。

エレベーターが使用できることから、まだこの場所は管理されているということが分かる。

切れかけた白熱灯が、薄暗い光を発し何処か不気味だった。

「あの、シスカさん…。ここは？」

何故こんな場所に連れて行かれているのか、アーニーは不思議だつた。

しかし、シスカはすつと無言でアーニーの手を握つて先導していくた。

エレベーターの最上階は、屋上だつた。
オレンジ色の夕陽をバックにした街全体が見渡せる綺麗な景色だつた。

「綺麗…」

思わず感嘆の息をアーニーは漏らした。

「…俺、気に入つてるんだ」

「…綺麗ですもんね。こんなに街が見渡せて…ふふ、ちょっと街の建物が玩具みたいに見えます」

嬉しそうなアーニーにシスカは微笑んだ。

「こないだのお詫び。ルカにも教えてないんだ、此処は」

「そう…なんですか？」

大親友であり家族同然のルカにも教えていないこの場所をアーニーに教えた。

それは嬉しかったが、何故自分に教えてくれたのだろうか。

「ま、それだけなんだけどね。何となく、見て欲しかつただけ。アーニーだつたら喜んでくれるかなつて…。今は無性に誰かの笑つた顔が見たくてさ…」

「笑つた顔…？ ……さつきのラーメン屋でルカさんやお店の人があ思いつきり爆笑していましたけど」

「ルカの馬鹿笑いじゃなくて…。んー…うまく言えないんだけど。…あつ！」

困つたように頭を悩ませるシスカだつたが、何か閃いたように笑つた。

「そう、笑顔。嬉しそうな感じの…アーニーみたいな優しい笑顔が見たかつたんだ、多分」

へへつと笑うシスカを見て、アーニーの胸が高鳴り顔が紅潮した。夕陽で誤魔化せているか誤魔化せていないかはわからない。

「…戦闘が終わるとか」

シスカは、アーニーから夕陽に目を移してぽつりと呟いた。

「戦闘が終わると生きてる実感があつて、ほつとする。また乗り越えられたんだ、みんなを守れたんだつて。でも、今日は考えることが多くて余裕がなかつた。それで、落ち着いてみるとちよつと寂しくなつちゃつて…。誰かの優しい顔が見たいなつて思つたんだ」

「寂しい…？」

「うん。子供みたい…かもしれないけど、ルカやユリアには癒し効果はあんま期待できないし。ええつと…何て言えばいいのかな…。あの一人はどうちかと言えば、元気をくれる感じ。そうなると、やつぱアーニーミかなつて。えつと…わ、分かるかな？」

「シスカさん…」

嬉しかつた。

上手く喋れなくてそれでも自分の言いたいことを伝えよつとしているシスカを見て、アーニーの顔が自然と綻ぶ。

そんな戸惑つた顔も、優しい声色も心地よかつた。

やつぱり、この人が大好きなんだと実感してしまつ。

しかし、アニー・ミはふと気になつた。

「あの、突然すみません。シスカさんって何歳なんですか？」

「俺？ 十五…だけぢ」

アニー・ミは衝撃を受けた。

ルカと馬鹿話ばかりしているから、彼と同い年かと思つていた。

「と、年下…」

「え？」

「私…十七です。てつきり、ルカさんと同い年かと」

「あー…うん。よく言われる。ルカは、十八。あいつ馬鹿だから、幼く見えるのかな」

恐らくそれは違う。

ルカが馬鹿をやつてシスカが正論を通す事でこの一人はバランスが取れているのだ。

見た目の容姿の問題じゃない。

確かにルカの存在もある。

しかし、それ以上に様々な苦境を乗り越えてきたシスカは、同年代の誰よりも精神的に大人なのだ。

「…ねえ、アニー・ミ。何で、年聞いたの？」

素朴な疑問をシスカは投げかけた。

「いえ、さつきシスカさんが自分は子供みたいだつて言つていたのが気になつて…。充分に子供じゃないですか」

「…言われてみれば。はは、確かにそうかも」「ですよね？」

シスカとアニー・ミは、くすくすと笑いあつた。

その後、シスカも思い当たる節があつたのかアニー・ミをじつと見

た。

「俺も気になつたこと聞いていい？」

「あ、はい！ 何なりと」

何を言われるのかと緊張しながらアニー・ミは構えた。

「何で、アニー＝//で敬語なの？」

「えつ？」

本当にどうでもいい質問だった。

関心というよりは、ただの素朴な疑問だらう。

「上官のロックさんやジョンさんは分かるけど…。俺とルカに対しで凄い敬語だよね。さん付けだし」

「そ、それは…」

「…まだ、仲良くなりきれてないってことなのかなって思っちゃつて。あつ！ その、別に無理する必要はないんだけど。えと、出来たらで良いから呼び捨てがいいかなって…」

「よ、呼び捨て？ なつ、そんな大それた事を！」

「うわつ！ いてつ…！」

突然大声を上げたアニー＝に後ずさりをしたシスカは、痛む足に力を入れてしまい少し表情を歪めた。

「あ、あああつ！ シスカさん、すみません… じゃなくて、ご…ごめん」

「大丈夫大丈夫。…んー、やっぱ呼び捨てがいいなあ。現に俺の方が年下だし違和感感じるかも。あ、無理はしなくてもいいよ。年の関係つて言つたら、俺だつて今更アニー＝さんなんて言えないからさ」

少し寂しそうにシスカは座り込んだ。

「わ、分かりまし…分かつた！ い、言つてみる…。え、えと…シ…シッ…シシシ…ッ…シス…カ…。……………さん」

言えなかつた。

突然、変えると言われても無理な話だ。

そもそも男の子を呼び捨てにすること自体が恥ずかしい。ユリアと違つて積極的になれない分、尚更だつた。

茹で上がりそうなほど顔を真つ赤にして必死そうなアニー＝を見て、シスカは噴き出した。

「あつはははは… あ、アニー＝… ゆ、ゆでだこ… む、おもし

「くくく…」

爆笑していた。

堪えられないというように涙を浮かべて笑い声を上げていた。

こんなシスカは見たことが無い。

「え、え…？」

「あははっ、もつかい言って。アンコール」

完全に引っかかっていた。

アニー・ミがすぐに出来ないことを知つていてやらせたんだと漸く気がついた。

多分、最初はそんなつもりはなかつたのかも知れない。
でも、この様子を見る限り途中からは騙していたのだ。
こんなことをする人だとは思えなくて、益々シスカのことが分からなくなつた。

「もうつ！ 何やらせてんですか？」

「ほら、敬語出でるつて」

「うつ…うう…。シスカ君の馬鹿つ！」

ハツとアニー・ミは気付いた。

今、シスカ君と言つた。

シスカさん…じゃなくて、シスカ君と言えた。
何故か、嬉しい。

「…ありがと、アニー・ミ」

嬉しそうにシスカは笑つた。

「…。馬鹿つて言われるのが嬉しかつたの…？」

「いや、そうじゃなくて…」

シスカは論点がずれていいるアニー・ミに苦笑を浮かべた。
しかし、すぐにまた元の笑顔に戻つた。

「アニー・ミがちゃんと対等に見てくれて嬉しいんだ。アニー・ミとも遠慮なく話せる友達になりたかつたから」

「対等…？」

「うん。えつと…俺達四人でいる時、何となくかな…アニー・ミが一

歩引いてる感じがあつて。違和感みたいなの…うん、感じちゃつて「それ言つたら、シスカ君…もあんまり積極的じゃないような」「俺は、ほら…何かあの一人が変に絡んでくるから引いてるだけで…。割と話すよ?」

意外だつた。

そういえば、シスカは大人に対してはかなり言葉を飲み込む癖はあるものの自分達に大しては普通だ。

最初はびくびくしていたが、あれば人見知りゆえかもしれない。それ以上に、騎士隊に入る時のシスカは心に余裕がなかつた。最近の彼は、普通に無理なく話をしている。しかも、ルカには容赦なく殴るほどの仲良さで羨ましいくらいだ。彼も普通の男の子なんだなと感じられて嬉しかつた。シスカは立ち上がり、アニーに手を差し伸べた。

「…帰るうか?」

胸がドキドキして、少しうるさい。

少しだけシスカと近い距離になれたことが嬉しくて胸が躍る。今は友達でもいい。

此処から少しずつまた頑張れるような気がした。

「うんっ」

アニーはシスカの手を取り、その手の温かさが心地よく感じた。

「ルバートの修理が終わつた?」

書類を纏めているロックにジェントが報告に来た。

「うん。ルカとの同調試験が終われば完璧。もうシスカ一人に頼ることなく出来るつてわけ。ただ、戦力になるか足手纏いになるかつていうのは別の話だけど」

「近距離・遠距離共にバランスの取れているも装甲的には少し心許ないスマッシュアンドに対する、格闘に適した近距離型で装甲の硬

「シスカは最近何とか形になりつつはあるから…あとはルカ次第か
れば大きな戦力になる」

「…。…ルカか。あいつ大丈夫か」

「いや、まだ何とも。まずは、テストしてみないと…」

「そうじゃなくて。…まあ、これちょっと見てくれ」

ロックが端末のキーボードを弄ると、モニターにルカの顔写真とデータベースが表示される。

「ルスティカ」ピッティカード…って、え？ これって…」

データを見てジョントは驚愕に目を戦慄かせた。

「ああ…。もしかしたら、奴を前線に立たせるのは危険かもしれない。いや、そもそもシスカと一緒に戦闘に出ること自体が…」

「…シスカと？ それってどうい…」

ロックの言わんとしている事が理解できず、ジョントはデータを見ていた。

ルカのデータの次ページを開く。

そこには中年の男女と幼い少年と少女の家族写真らしきものがあった。

恐らく、この少年がルカなのだろう。

しかし、着眼点はそこではない。

少女の写真を見て、ジョントは驚きを隠せなかつた。

黒髪にボニー・テールの幼い少女の顔は、あまりにも似すぎていた。彼が大切にしている少年の面影と瓜二つだった。

「これは…」

その先を続けることが出来ず、ジョントは口元を押さえた。

「…ルカのシスカに対する依存が強くなればなるほど感情が左右されてしまう…」

「…ロックは不安に満ちた表情で深い溜息を吐き、もう一度ルカのデータの中にある家族写真を…無邪気に笑っている少年と少女の姿を

見ていた。

「……で、何でおめえが此処にいるんだよ」

腕立て伏せをしながら、ルカは横目でその人物を見た。

その人物、ユリアはまるで自分の部屋のようになに寝転がりながらお菓子を食べ、テレビを見ていた。

「言つたじやん。見たいテレビあるつて」

「てめえの部屋で見ろや！」

「あたしの部屋のテレビ映り悪いのよね。今度シスカに修理頼もうかな」

「シスカは便利屋じやねえんだぞ。あんま、あいつに甘えんなよ」
腕立て伏せから起き上がり少しへ機嫌悪そうにするルカを、ユリアはじつと見た。

「……んだよ」

「ルカつて家族とかに騎士隊に入るつて言わなかつたの？ まあ、シスカは身寄りが無いからしうがいいけど」

「あ？ だつて、シスカの方が先に入つてたんだから許可いらねえだろ」

「そうじやなくて…」

ルカの認識では家族と言えばシスカらしいが、ユリアが言いたいのはそうじやない。

「あなたの本当の家族のこと言つてんの。シスカ抜きでね」

「あー…」

ルカはユリアの言葉の意味を漸く把握したが、暫く考えて首を傾げた。

「どつちのこと言つてんの？」

「は？」

「生みの親と育ての親のどつちだつて聞いてんだよ。どつちにしる、

んなもん取つてねえけどよ」

ユリアは硬直した。

もしかしてルカは、人に話しにくいわけありの事情でもあるのだろうか。

そうすると、自分が安易に聞いたものは…。

「…なんか、ごめん」

「あん?」

「あんたも苦労してたのね」

「…どういうことだよ」

目を細めてルカは頭を搔いた。

「…トーン財閥って知つてつか?」

「へ? ああ、確かに一でつかい金融企業よね。金持ち過ぎて明らかに貴族の中の選ばれし貴族つていうか

「生みの親がそれ」

「え…?」

ルカが何を言つているのか分からなかつた。

名門貴族中の貴族のトーン財閥の子息がルカ?

あまりにも似合わない。

「ま、血だけで言えばな」

「どういうこと?」

「兄弟多すぎて、養子に出されたんだよ。俺の苗字はそつからきてるわけ」

「兄弟多すぎてって…何人いんのよ」

「しらね。七十人はいるんじゃね? 母親もそれぞれ違つし」

「多すぎ…。それ、一夫多妻つてこと?」

「おー、それそれ。そんでも、傑作なんだよこれが。トーン家にいられる将来有望な跡継ぎ候補と認められるのはたつた三人でよ、それ以外はぜーんぶ養子に出される。な、ひでえだろ?」

笑いながら話すルカにユリアは胸が痛んだ。

聞いてはいけないことを聞いてしまつた気がする。

笑つてはいるが、ルカに余計なことを思いださせたのではないか
と思ってそこで会話を終わらせようとした。

「ごめん、ルカ…。あたし…」

「まあ、聞けつて。そこで投げ捨てられた可哀相な俺様はよそ様の
家の養子となり、そりや幸せな幸せな…」

「いいからっ！」

ルカの様子がおかしい。

いつも素直に感情のままに動いているルカじやない。

何處か空元氣のように見えて…無理をしている。

同情されたくないから、無理をしていて気が済むまで話そうとしている。

こんなのは見ていられない。

「あたし、部屋に戻る！」

ユリアは一刻もこの場所から離れなくて、ルカの部屋を出た。
その後ろ姿を呆然と見て、扉が閉まるルカは溜息を吐いた。

「ほんとに幸せだったんだけど…何勘違いしてんだ、あいつ。…ナ
ナ、どう思つよこれ」

ルカは、鍊機手帳を開き画像ファイルを開いた先にある一人の幼い少女の写真に語りかけていた。

「…あー！ くそつ！」

頭をがしがしと搔いてルカは立ち上がった。

「モヤモヤする！ 風呂だ風呂！ 大浴場だーっ！」

ルカは叫び、お風呂セットを持つてソルフェージュ内の大浴場へと向かつた。

部屋の小さな浴室では我慢できないとでもいう表情で、エレベーターを使わず長い階段を駆け上つた。

そのルカの様子に誰もが振り返り、ルカがまたおかしなことをしているというくらいにしか思わなかつた。

思い出したくない思い出を振り払うように走り続けるルカは、少しだけ苦しそうな顔をしていた。

とある飲食店。

少し元気のない二ムは、ビートと一緒にいた。二ムの皿の前には、ついにやつきたばかりのカルボナーラが置かれている。

「ほら、食べなよ。冷めちゃうよ」

ビートが二ムにフォークを手渡すと、彼女はそれを受け取った。しかし、料理には手をつけない。

「……シスカに会いたい」

ぱつりと二ムが呟いた。

これで何度もどう。二ムはこれしか言わない。

いい加減に聞き疲れたビートは苦笑を浮かべた。

「二ムちゃんは、もう決めたんだる。シスカと距離を置くつて」ビートが、頼んでおいたペペロンチーノの麺をフォークで丸めて口に運ぶ。

二ムは俯き、その視線は自然とカルボナーラに向けられている。「うん、幸せだったからもういいの。あのね、シスカの肌つて凄く温かくて…触り方も優しくてね」

「二ムちゃん、その先はストップ。飲食店で下ネタ禁止。しかも、そういうのは人に話すネタじゃないから」

「うつ…うん。分かつてるんだけど…。もしかしたら、戦闘でシスカが苦戦していたのって…あたしとのことで集中出来なかつたのかなって思うと」

「で、それを二ムちゃんは謝りたいわけだ？」

ビートの問いかけに二ムが頷くと、ビートは盛大に溜息を吐いた。

「それで謝つたら、シスカは怒るよ。絶対に」「え…？」

「ニムちゃんはその件について後悔してる？ それは覚悟を決めて君を抱いたシスカの気持ちを踏み躡るうつとしていることだよ。

多分そういうことに気付かないニムちゃんと気付かせられなかつた自分に怒つて、最悪… 一生口きかないかも」

勿論、シスカがこのくらいで口をきかないなんてことはありえないだろ？

しかし、このお嬢様にはこのくらい脅しをかけないと自分を甘やかして自制がきかなくなつて同じ事を繰り返す。

振り向いてもらうことは無いのに、自ら傷つく方へと飛び込むかもしれない。

いい加減、成長すべきだ。

だから、敢えて大袈裟に事を運ぼう。

だが、シスカが怒るという意味では脅しでも何でもない。

間違いなく怒るし、自分自身を責める。

シスカと出会つて一年見てきたのだ。

何となく分かる。

「シスカが怒るつて… 口きいてくれないなんて、絶対やだつ…」

ガタント椅子から勢いよく立ち上がり、ニムは叫んだ。

「取り敢えず、落ち着いて。騒いでも解決しないよ」

ビートが宥めると、ニムは涙目で座つた。

シスカが怒る…。

自暴自棄の自分を本気で怒つてくれて心配で心配でたまらなかつたシスカの表情を思い出した。

もうあんな顔はさせたくない。

シスカに嫌われたくない。

「さて、ニムちゃんに出来ることは何でしょ？」

ビートは優しく問い合わせる。

「…ありがとう、かな。二重の意味で」

あの時のことと、ルーディメンツを撃退して守つてくれたこと。

彼に言つとしたらきつとそれだ。

「分かつてんじやん。ほら、早く食べないと冷えて固まるよ」

「う、うん」

漸く二ムは、カルボナーラに手をつけた。

「そりそり、俺が二ムちゃんに会いたかったのは君の愚痴に付き合つ為じやないんだよね」

「え、何か用事あるの？ あたしに？」

首を傾げる二ムにビートは笑顔を向けた。

「見つかつたよ。…行方不明になつていた、君のお父さん」
優しく笑いかけるビートに二ムは硬直した。

いくら検索をかけても見つからなかつた父親が見つかつた。
嬉しさよりも驚愕で言葉を発することが出来なかつた。

風が少し冷たい。

今日の晩御飯は何だろ？

昨日の余りものの夕飯かもしけれない。

お母さんは、料理を作りすぎてしまつ癖があるから。

そういえば、昨日のカレー…かなり余つてたつけ。

新しく買った大きな圧力鍋で張り切つて作つて、結局半分も消化出来なかつた。

今日の朝も昼もカレーだつたなあ。

今夜もきっとカレーだ。

せめて、何か手を加えてアレンジしてくれたら嬉しいのに。

「お兄ちゃん？」

くいくいつとナナリーの小さな手が俺の服の裾を引っ張る。

「よしつ、帰ろつか」

「うんつ」

俺が笑うと、ナナリーも満面の笑顔を浮かべた。
ふわりと何か白いものが見えて空を見上げた。

白い結晶が落ちてくる。

「わあ、雪だ」

「ほんとだ、初雪だ！」

「お兄ちゃんっ！ 今度雪合戦しよ。私、負けないから！」
「もっちらん受けて立つぜ！ あ、でも石入れるの危ないからやめ
ろよ。硬く握るのも痛いから駄目」

「はい！」

元気よく返事をして満面の笑顔を浮かべるナナリーの手を握った。
軽快な足取りで家に向かう。

何の変哲もない普通の一戸建て。家族は四人。
明るくて楽しい。

お父さんもお母さんも優しくて好きだ。
本当の妹じやないけど…ナナリーも大好きだ。
この大好きな家族とずっと一緒にいられたら…。
いられたら…。

「…力。…ルカ」

遠くで名前を呼ぶ声がする。

誰だ？

「ルカッ！」

薄つすらとルカは目を開いた。

ぼんやりと視界に入つたのは、シスカだつた。

「つたく、こんなところで寝てたら風邪引くよ」

大浴場の脱衣室にあるソファで横になるルカの顔を心配そうにシ
スカが覗き込む。

「…ナナ…？」

「へ？ ルカ…うわあっ！」

シスカを力強く抱きしめた。

「いたつ……痛いって！ ルカッ」

「ナナツ！ ナナ、会いたかつた！」

「……ルカ？」

シスカを抱きしめたまま、ルカは泣きじゃくっていた。異常だ。

何処か頭をぶつけたのではないかと心配になつた。

「ナナ！ 何処行つてたんだよ、お前！ 僕、心配で心配で……」

重症だ。

これは目を覚まさせないといけない。

そもそも、このままでは動けない。

「いい加減に……しろっ！」

シスカは、ルカを殴り飛ばした。

その衝撃でルカは倒れて大の字になつてている。

「ルーカー……。起きてよ……」

ルカの身体をシスカが擦ると、むくりとルカは起き上がつた。

「あー、ねつみい。あ？ おー、シスカ。何そんな疲れた顔してやがる」

「別に。ただ、そんなところで寝てたら風邪引くよ。せめて服着なよ」

見るとルカは、腰にタオルを巻いているだけで全裸だつた。

しかも下半身のタオルも緩くなつていて、いつ生まれた状態になるか分からない。

「おー、わりわり。……あ、パンツ忘れた」

腰のタオルを直し、自分の使用していたロッカーの籠を見ると下着だけ無かつたらしい。

「……もう付き合つてらんない。俺もう行くからね」

「おうっ！ 湯冷めすんなよ」

「それ、俺がルカに言いたいんだけど。……あ、そうだ。ルカ」

「あ？」

少し考えた様子だつたが、シスカはルカに尋ねた。

「ナナつて誰？」

「なつ…！」

シスカのその言葉にルカの瞳が戦慄いた。
あんな夢を見たから何か口走ったのか…。
何を言つたのか何をしたのか全く覚えていない。

シスカの口からその名前を出されるのは、何となく嫌だった。

「あー…ちょっとした知り合いだよ」「

歯切れが悪そうにルカは頭を搔いた。

「昔の彼女とか？ ルカも意外と…」「

「そんなんじゃねえよ…」

シスカがからかうように言つと、怒りを込めたような声でルカが叫ぶ。

怒鳴つたルカに驚いてシスカは硬直した。

二人しかいない脱衣所に沈黙が訪れた。

ルカの触れていけない何かに触れてしまつた気がした。

「ごめん」

その言葉しか出なかつた。

少し落ち込んだような表情を浮かべるシスカを見て、ルカは自分の行いを後悔した。

シスカはどう思つただろうか。

理不尽に怒鳴られて、どう感じただろうか。

「いや、今のは俺が悪かった。すまねえ」「

……。じゃあ、俺…行くから」

少し俯き加減のシスカの表情は分からぬ。

「待つてくれ！」

脱衣所を出ようとしたシスカの腕をルカは引っ張つた。

少し怯えた様子のシスカを見て辛かつた。

顔が重なる。

ナナリーが…悲しそうな顔をしている。

そうじゃない。

そうじゃないだろ。

こいつは、シスカだ。

家族同然の大親友の筈なのに。
おかしい。

あの夢のせいか？

「ルカ…手痛い」

「あ、ああ…。わりい…」

力強く握った手を緩めて離す。

何となく…何となく、心がちくりと痛んだ。
傷ついているのは、シスカの筈なのに。
シスカが出て行き、脱衣所の扉が閉まる。
扉の音が冷たく感じた。

少しだけショック…というよりも怖かった。
基本的にルカの笑つた顔しか見たことなかつたから、甘えていた
のかも知れない。

きつと何か逆鱗に触れてしまつたんだ。

それは多分、ルカも後悔している。

「そういえば、俺：ルカのこと何も知らない」
シスカは、ぽつりと呟いた。

ベッドでぴょんぴょん跳ねるスフォルをキャッチした。

「埃飛ぶから飛び跳ねちゃ駄目」

「きゅー…」

「…ねえ、スフォル。俺、ルカにいつも助けてもらつてばっかりだ
けど…俺がルカを助けるつて出来るかな」

「きゅつ」

シスカの問いに応えるかのよにスフォルは、シスカの頬を舐め

た。

ぎゅっとスフォルを抱きしめ、悩み困ったような表情を浮かべて
シスカは溜息を吐いた。

ズキッと足が痛んだ。

昼間の戦闘が終わってから、痛みが全然解消されない。

脈打つよう熱い。

医者に見せると言われたが、創傷も痕も無いからあまり意味のないようを感じた。

「…考えることいっぱいだなあ」

ぼすんとベッドに倒れこみ、シスカは溜息を吐いた。

「これから、どうすればいいんだろ…」

シスカのその言葉には、複数の意味が込められていた。

スフォルツアンドのこと。

ルーディメンツのこと。

今後の戦いへの対策。

スフォルツアンドと神経が繋がっている以上、まともに戦えない。だから、知りたい。

そして…ルカのことも、どうしたらいののか分からなかつた。

＊＊＊

翌日。

シスカとルカのそれぞれブレスとの同調試験結果を見て、ロックとジョントは訝しげな顔をする。

二人とも、不安定だった。

常に安定している筈のシスカとスフォルツアンドは、メーターのラインが歪んでいる。

ルカに至つては、ラインが子供の落書きのように滅茶苦茶だ。今迄で一番最悪だった。

「…どうした、お前ら」

ロックの問いに一人とも無言だつた。
妙にピリピリとした空気が漂つ。

「少し休んだら、もつかいやるぞ」

「はい…」

ロックの言葉に返事をしたのはシスカだけだつた。

「ルカも分かつたな？」

「あー、はいはい！ わかつてらあ！ ただ、時間ずりしてくれよ」
投げやりにルカは、ロックに返事をした。
しかし、気にかかる言葉があつた。

「時間をずらす？」

「…シスカがいると集中できねえんだよ」

「…え？」

ルカが投げ捨てた言葉に、シスカの表情が固まつた。
しかし、その顔を見ずにルカは立ち去つた。

「何だ、お前ら。喧嘩でもしてんのか？」

頭を搔いてロックは、シスカに尋ねる。

「いや、そういうわけじゃ…。…多分」

「何でもいいが、これから戦闘でお前らの連携がキーになるんだ
から早く伸直りしとけよ」

「…はい」

少し落ち込んだ様子でシスカは頑垂れた。

「それで、足の調子はどう？」

ジェントがシスカの足を見て尋ねた。

「あ、大丈夫です」

「…ていつ」

「うわっ」

ジェントがシスカをどんと押すと、シスカはバランスを崩して
座り込んだ。

「うぐっ…！」

足に激痛が走り顔を歪めたシスカを見て、ジェントは目を細めた。

「嘘つかないの。やつぱ医者に見てもらいいな。そんなんじゃ戦えないから」

「でも…」

「これ、命令だから。ソルフェージュ内の医務室に腕利きの医者がいるから行つておいで」

「…はい」

溜息を吐いてシスカは立ち上がり、足の痛みに耐えながら歩いていく。

その背中を見送り、ロックは腕を組んだ。

「重症だな」

「色んな意味でね」

シスカの足や同調試験だけじゃない。

ルカの問題もある。

あからさまにシスカを拒絶しているその意味が分からなかつた。

これが解決しないと、連携なんて夢のまた夢だ。

ロックが恐れていることが現実になるかもしない。

執着にしても拒絶にしても、ルカは判断力を失つてしまつ。

それを止められるのは、きっとシスカだけだ。

しかし、出来るだらうか。

ルカの態度に戸惑いを隠せないシスカには、話しておいた方が良い氣がする。

だが、シスカは耐えられるだらうか。

様々な悩みを抱えている今のシスカにルカのことを…自分達が教えて良いのだろうか。

「きつかけを与えたほうが良いかもね」

「そうだな。俺達から話すと、悪化しかねない…。当人同士が解決した方が良いだろ」

ちゃんと言葉で話さないと通じるものも通じないのは、彼らが一番よく分かっている筈だ。

この件が解決されるまで敵が攻めてこないことをただただ祈るば

かりで、手のかかる子供達にロックもジョンも頭を露出せずに立たなかつた。

医務室と表すにはその部屋は広すぎた。

部屋の規模からいと町中の診療所並。いくらソルフェージュが万能の施設を常備しているといつても、

大袈裟な気がしないわけでもない。

税金がどのくらいかかっているのか、それも気になる。

しかし、それ以上に気になるのは…。

「骨や筋肉にも異常はなし。それでも激痛が走るって言うなら、あなたの方話した通り神経に異常があるのかも知れないわね」レントゲン写真を見て顔を顰めながら女性特有の喋り方をするその医者は、長身の男だった。

黙つていれば美男子にカテゴライズされ、周囲の女性は黙つてしないだろ？

しかし、彼は正真正銘のオネエな男だった。

名前は、グレイス＝ローズ。

名は体を表すと言つが、彼のセカンドネームは何となく似合つた。

「痛み止めを出しておくわね。多分、一日くらいで治ると思つわ」「…ありがとうございます」

処方箋を書いて看護師に渡すと、グレイスはシスカに興味が沸いたような目を向ける。

「しかし、ブレスとの同化なんて珍しいわね。一体、どんな構造しているのかしら」

「俺も知りたいんです。メカと人間の神経が繋がるなんて理屈じゃ考えられないし」

「でも、現にそれは実現している」

「……はい」

膝の上でぎゅっと拳を握り、シスカは俯いた。

「でも、あなたがやっていることも理屈じや通せない」とばかりよ？」

「俺が…やっていること?」

不安そうな表情でシスカは顔を上げた。

「そう。搭載されている筈の無いシールドや爆発的な攻撃力、蘇生やエネルギーの復元に機体の性能を超えた機動力。本当に理屈じや理解出来ないわ」

「俺は、知りたいんです。スフォルツアンドのこと…それにルーディメンツのこと」

「いち医者のあたしには専門外ね。ただ知りたいだけじゃ駄目よ、坊や」

「え…?」

「聞けば答えが返ってくるといつ考えは捨てなさい。社会つていうのは常に自分で努力して掴むこと。意味が分かる?」

「…自分で、調べろってことですか?」

「大佐が答えてくれないといつのなら、これ以上のことは言えないわ。あたしも立場があるから」

「…分かりました。ありがとうございます」

シスカは立ち上がり、グレイスに頭を下げて踵を返した。

「あ、これ独り言なんだけど」

「え…?」

グレイスの言葉にシスカは振り返った。

「ルーディメンツを撃退するブレスを開発したブルーネル夫妻って、どういう経緯で開発まで至ったのかしら? 本当に天才の頭の中は不思議だらけね」

その言葉にシスカの瞳が戦慄いた。

ブレスを開発した両親…。

もし、その意図や構図が分かれば近付けるかもしない。

立場的に助言は出来ない。

だからグレイスは、独り言と言つたのだろうか。

「またいつでもいらっしゃい。可愛い騎士さん」

につっこりと笑い、グレイスは手を振る。

시스カは頷いて、医務室を後にした。

バタンと扉が閉まり足音が消えると、グレイスは시스カのカルテを見た。

「시스カ＝ブルーネル……これも、巡り合わせかしらね。余計なことまで調べなきゃいいけど……」

ふうと息をついてグレイスはカルテを看護師に渡して、次の患者を呼んだ。

夕飯時、いつものように시스カ達四人は一緒に食事を取っていた。しかし、それはいつものように和気藹々としたものではなく何とか気まずい雰囲気だつた。

原因是시스カとルカ……いや、ルカだけかもしれない。

そのびりびりとした空氣に、コリアとアーニーも話しかけにくかつた。

「あ、あのさ……ルカ。あれから、同調試験どうだつた？」

「…………」

シスカが恐る恐る声をかけるも、ルカは返答をしないで食事を口に運んでいる。

「あ、そうだ。そういえば、もうルバート使えるみたいだよね。ルカがいてくれたら、俺も安心して戦えるような気がするんだ」

「…………」

またもや返答が無い。

ずっとこの調子だ。

シスカがいくら声をかけてもルカは無視を続けていた。

「…ねえ、ルカ。本当にどうしたの？俺、そこまで怒らせるよくなことした？」

食事を食べ終わりトレーを持つて席を立つルカは、イラついた様子で溜息を吐いた。

「別にしてねえんじゃねえの？」

素つ氣無くそれだけ言って、ルカは去っていく。

あまりにも理不尽…というよりも原因が分からぬ。

脱衣所での件はお互いに謝つたし、普通だつたらそれで水に流される筈だ。

いくら逆鱗に触れてしまったとしても、こんなあからさまに拒絶されるのはおかしいと思った。

「…何あれ。いくらなんでも酷いんじゃない？」

「シスカ君、大丈夫？」

ユリアとアーミが心配で声をかけると、シスカは苦笑を浮かべた。

「大丈夫…って言いたいけど、ちょっときついかも。…あんなルカ見たこと無かつたから」

このどじょうもない気持ちをどうすればいいのか分からなかつた。

どうしたら、ルカと仲直りできるのか。

そもそもこれは喧嘩をしているのか？

それすら分からぬ。

「……ナナ」

「え？」

小さく呟くシスカにユリアもアーミもきょとんとした表情を浮かべる。

「俺を見てナナって言つたんだ。ちょっとそれから様子おかしくて

「何それ、昔の彼女？」

「俺もそう思つて言つたら、激怒して…。お互いに謝つたけど、怖くて…俺逃げちゃつたから」

「まあ、いきなりそんなことで怒鳴られたらびびるわよね。ほんと何考えてんのかしら」

「それはルカにしか分からないだろうな」

シスカ達の席の近くにロックが座った。

「あ、隊長。お疲れ様です」

「お疲れ様です」

ユリアとアーニーがロックに挨拶をするとシスカもそれにならって頭を下げた。

「シスカ。お前、ルカとタイマンで話せ」

「へ？」

「今日の二十一時から小会議室Bを借りた。ちゃんと一人で腹割つて話せ」

「でも……」

「大丈夫だ。逃げたら罰則を取ることにしたから。一ヶ月ソルフエージュ内の掃除。どうだ？ たまらんだろ」

「そ、それは確かに……」

考えるだけで目が回りそうだ。

ひとつ町に匹敵する大きさのソルフエージュ内の掃除を一ヶ月

なんて、ある意味戦闘よりきつい。

「だから、色々話して解決して來い。多少の暴力沙汰は許可する」

「さ、先読み済みですか？」

「お前ら見たら分かるよ。シスカ、お前もただ大人しいだけの人間じゃないだろ」

「えっと、それは……」

「確かに、シスカがブチ切れるとやばいもんね」

「ちょっと、ユリア……」

ユリアが笑うとアーニーがそれを制止しようとすると。

シスカもそれはあまり口外しないで欲しかった。

「そんなわけで、行つて來い。お前らが解決するまで戻つてくんないは……はい」

ロツクに押されて苦笑を浮かべながらシスカは頷いた。

ロツク達にとつては、戦力的な意味と士気的な意味で早く仲直りしてもらわないと困るというところだろう。

シスカも早くルカと普通に話せるようになりたい。だから、このきっかけの場を作ってくれた上司に感謝した。

約束の二十一時。

三十分は過ぎていた。

三十分間、二人は部屋で無言のままだった。

「あ、あのさ…ルカ」

「……」

シスカが声をかけても相変わらずルカは無言だ。

「その…俺のこと嫌いになつた？」

暫しの間。

ルカは頭をがしがしと搔いた。

「そんなんじやねえよ…」

「じゃあ、何でだよ…。どうして俺を避けるんだよ！」

「うつせえな！ 別に俺のことなんか放つておけばいいじゃねえか

！ 自分のことでいっぱいいっぱいだろ、お前はっ

ルカが叫ぶと、シスカは怒りを抑えられなくて震えた。

「何だよ…それ」

震える手でシスカはルカの胸倉を掴んで壁に押し付けた。

勢いよく叩きつけられルカは小さく呻いたが、それにも構わずシスカは自分より大きなルカの身体を強く壁に押し付けていた。

「放つておけるわけないだろ、こんなことされて！ お前、俺のこと家族だつて言つたよな？ ずっと一緒にいるつて言つただろ！ それなのに逃げんのかよつ」

「逃げる？ おい、俺がいつ逃げたつてんだよ！」

「逃げるだろ！ 何も言わないで勝手に避けて無視して…。俺から逃げるじゃないか！」

「何言つてやがる。別に俺は…」

「俺のこと嫌いになつたとしか思えないよ…こんなの。ルカがいたから此処まで来れたのに…そのルカに捨てられたら、俺…」
泣きそうな顔のシスカは俯いて抑えきれない感情をぶつけていた。地獄から太陽の下に戻つた今の自分があるのは、ルカのお陰だ。ルカにはいっぱい助けてもらつた。自分にとつてかけがえのない存在なのに…。

それなのに何も言わないので避けられるのは悲しかつた。

「捨てるも何も…俺を捨てたのはお前だろ！」

ルカが叫んだ。

その言葉の意味が分からなくて、シスカは顔を上げてルカの胸倉から手を離した。

「え…？」

捨てた？

何を言つている？

誰が誰を捨てたつて？

ルカが何を言つているのか分からぬ。

「俺が…ルカを捨てた？ え、ちょっと待つて。意味が…」

「お、覚えてねえのか？ 今朝のことだぞ」

ショックを受けたような表情で今度はルカが泣きそうだ。

「へ？ 今朝つて…」

皆田見当がつかない。

何かルカの機嫌の損ねるようなことをしただろうか。

「朝によ…風呂一緒に入ろうぜつて誘つたの覚えてるか？」

「え、うん。確かご飯食べた後に…あつ！」

思い出した。

朝食が終わつたら風呂に入ろうとルカに誘われていたが、朝食を終えた後にメカニックに呼び止められスフォルツィアンドの整備の手

伝いを頼まれてそこからすっかり忘れていた。

それを忘れたまま、同調試験を行った。

昨日のことで怒っていたのではない。

今朝の風呂に入るという約束をすっぽかしてしまったことを怒っているのだ。

「俺よりスフルツアンド取つたんだもんな、お前は！　俺の方が先に約束してたのに…いつもいつも俺より目の前のことばっかりで…傷ついたんだよ俺は！」

「うわっ」

ルカが叫び、シスカを押し倒した。

「この際だ。はつきりしようぜシスカ」

「は、はつきりって…？」

「俺とその他大勢どっちが大事だ？」

「え…？　な、何その嫉妬に燃えた恋人みたいな言い方…」

「嫉妬に燃えてんだよ！　何か…こう…お前が色んな奴に頼られるの見えてるとモヤッとしてよ。そんで、お前見てたら妙にイライラして…」

本当に嫉妬に狂った恋人のようだった。

それじゃあ、何か？

ルカは、ずっとそんな目で…。

シスカの顔が引き攣つた。

「ご、ごめん。ルカ、俺そういうのは…いや、本当に勘弁して」

「あ？　何言つてやがる」

「…とにかくどいて。重い」

「お、おう。すまねえ」

ルカがシスカを解放すると、シスカは乱れたシャツを整えてルカを殴り飛ばした。

「いつ…でええええっ！」

拳が顔に当たり、ルカは悶絶した。

「俺は、昨日のことでのルカが怒ったんじゃないかつて…傷ついたん

じやないかってずっと悩んでたんだよー。お風呂くらいいつでも一緒に入つてやるから勘違いさせんなつ。この馬鹿ルカ！」

「は？ 昨日つて…。ああ、あれか」

軽い調子で何でもないようにルカは苦笑浮かべた。

「いや、お前に言われると逆上しちまつてよ。ほら」

ルカが鍊機手帳を渡す。

「え、何？」

鍊機手帳を開き画像フォルダに至ると、シスカの瞳が戦慄いた。何枚もある家族写真。

幸せそうに四人の家族が笑っている。

その中にいる一人の少女。

シスカに瓜二つだった。

「これつて…」

「俺が養子に出された家族。ま、その女は妹に当たるわけだが… そ

っくりだろ？ お前に」

「う、うん。… もしかして、ルカが俺を助けてくれたのって…」

「ちょっとだけな。でも、違うもんは違う。そうは思つてもたまに重ねちまうんだわ。死んだ人間と生きた人間を混同するなんて、トチ狂つたことがたまにあつてよ。最悪だよな」

「死んだ人間つて… まさか」

ルカが大事にしているこの写真は… もしかして。

思えば、ルカはずつとビートと一緒に住んでいた。

でもビートは、一年半前に出稼ぎに出るつて町を出て行つて… それからルカは一人で住んでいた。

家族の話なんて聞いたことが無い。

「まあ… 病気でな。十年前に死んじまつた。多分、生きてたらお前と同じ年くらいだつたかもな」

「ルカ…」

「ま、育ての両親も暫くしてから事故でいなくなつちまつた。で、生みの親んとこ尋ねたら養子に出したんだから関係ねえつて門前払

いされてよ。ほんとに一人だった

気が抜けたようにルカは遠い目をした。

その瞳は何処へ向けられているのか分からぬ。

「そんで俺はビートと出会った。ビートに拾われたんだよ、俺は「ビートに？」

「おう。話してやろうか？　俺とあいつのくつだんねー昔話

「ルカの話は聞きたいけど…ビートはどうでもいい」

はつきりとした物言いのシスカにルカは喉元で笑った。

「くくっ…。あいつ完璧シスカに嫌われてやんの。つか、何でそこまでビートのこと嫌いすんだ？」

「…生理的に受け付けないってのもあつたけど、ビートに襲われたことあるから。そこから嫌い」

「あア？　お、襲われたって…お前、どういフ…」

「ルカがいなきに尋ねたらビートがいて、押し倒されてキスされて身包み剥がされそうになつた。ほんと、気持ち悪い」

考えただけでも悪寒がするとシスカの顔が青褪め、引き攣り笑いをする。

ルカは拳を震わせて怒りで顔を真っ赤にした。

「あんのくそ野郎！　シスカを穢しやがつて！　俺がいねえ間に手え出すたあ良い度胸じゃねえか。よし、シスカ！　俺とキスしろつ」「何でそうなんのつ？　おかしいから！　一人して気持ち悪すぎるつて！」

「あの野郎にだけは負けたくねえんだよつ！　いつもいつも俺が気に入つたもんに手え出しまくつて、上から目線で笑いやがつて！　シスカの貞操返しやがれ！」

「え、ちょ…な、何でそうなんのつ？　奪われてないから！　氣色悪い誤解やめろよつ」

「…あ？　身包み剥がされて掘られたんじゃねえのか？」
「ないから。剥がされそつになつて…氣がついたらビートがパンツ一丁で外に吊るされてた」

「……それ、お前がブチ切れてやつたんだろ?」「た、多分。記憶に無いから…」

目を逸らしてシスカは苦笑した。

恐らく危険を感じたシスカのスイッチが入りビートを脱がして縛り上げたのだろうということは、ルカには容易に想像出来た。

「…それ、ＳＭじゃね?」

「ルカ、喧嘩売ってる?」

「う、売つてねえ! そ、そうだ。あれだな、俺とビートの出会いの話だつたよな。いいぜ、話してやらあ。と…途中で暴れるなよ?…少し怯えた様子でルカがシスカに視線を送ると、少し不服そうな顔をしてシスカは溜息を吐いた。

「…分かつたよ。俺は、ルカの話を聞きたいだけだから」

気持ちを落ち着かせて言うシスカの表情は笑顔だったが、何かしら引っ掛かる場所があつたら間違いなくビートを殴りに行く。いや、殴るだけじゃ済まない。

締め上げて重石をつけて海に沈める可能性も否めない。

それほど、シスカはビートに対して容赦は無い。シスカがビートを半殺しにしてきたのなんか何度も見てきた。

だから、ルカにビートが余計なことでもしたら…その先の地獄絵図は容易に想像出来る。

話をする上で覚悟が必要だとルカは思った。

十年前

「一度外に出た身で無様にのこのこと帰つてくるな！　お前はもう我がトーン家の者ではない！　一度とこの敷地を踏み荒らすな！」
都市で一番大きな豪邸の扉が男の怒鳴り声と共にバタンと閉じられた。

大きな扉の外にいるのは、小さな子供：八歳のルカだつた。

「お願いします！　此処に置いて下さい！　あてがないんですつ！　お父さんつ、お父さん！」

子供なりの精一杯の力でルカは泣きながら扉を叩く。

「ルスティカ様、お引取り下さい。少しでもあなたに我がトーン家の誇りがあるというのなら此処にいるべきではありません。自らの足で生きていくしかないのです」

執事のクロニカがルカの扉を叩く手を引いて静かに諭す。

「だ、だつて…これからどうすれば…！　どうやって生きていけばいいんだよっ」

「それが甘えだといふことがまだわからないかつ！」
扉が開き、大きな手がルカの頬を平手打ちする。

「旦那様…」

「貴様はこれまで一体何をやつて來た！　外でこれまで何を学んだ！　恥を知れっ」

「ふつ…う、うう…ひつ…ひつく…」

父親の罵声にルカは嗚咽交じりに泣いた。

今まで育てられてきた家族が死んで本当の血が繋がつたこの家しか頼りが無かつたルカにとつて、この結果は絶望的だつた。

「人前で泣くな！　みつともないと思わないのかつ！」

「あうっ」

もう一度、ルカの頬が叩かれる。

涙が止まらなかつた。

痛みよりも何よりも本当の親に拒絶されたことが苦しかつた。
「クロニカ！ とつとと、外に出せつ。この恥知らずな野良犬に、
これ以上我が家の敷地を踏ませるんじゃない！」

「は…」

大きく扉を閉める父親にクロニカは頭を下げ、ルカの手を引いた。
「さあ、行きましょう。外までお送りします」

「ひぐつ…ひつく…ううう…」

嗚咽を零しながらルカは、クロニカに手を引かれて歩いていく。
成す術もなく、ルカは泣くことしか出来なかつた。

敷地の外まで送られると、クロニカは一枚のカードをルカに渡し
た。

「ルスティカ様、これを」

「え…？」

「奥方様が亡くなる前に私に託してくれたものです。ルスティカ様
に何かあつた時に使つて欲しいと、個人で溜めていました」

「お母さん…が？」

ルカの涙が止まつた。

「旦那様もああ言つておられます、誇り高く強く生きて欲しいか
らきつく当たるのです。ルスティカ様はちゃんとお二人に愛され
ていたのですよ」

「…違う。…違うよ、それは。家の名に泥を塗りたくないだけで…
俺なんか…うつ、うつ…」

再びルカの目からぼろぼろと涙が零れる。

クロニカは優しくルカの頭を撫でた。

「強く生きてください。泣いていても誰も助けてはくれません。こ
のカードがあれば一生楽に暮らせます。これをどう使うかはあなた
次第です。このまま何かに頼つて生きていくか、自分が人から必要

とされる人間になるか…その選択はあなたにしか出来ません

「クロニカ…」

につっこりと笑い、ルカの小さな手を両手で包みクロニカはカードを握らせた。

「既に指紋認識システムでルスティカ様を登録済みです。…お元気で」

敷地の外に軽くルカを押すと、屋敷の柵が閉まる。

ルカはカードを眺めて放心していた。

気が抜けたように座り込むルカの瞳からはただ涙が零れるだけで、誰も見向きすらしなかった。

* * *

商店でルカは、食料品を買っていた。

適当でいい。

食べ物なんて何だつていい。

あの家の…育ての母親の料理が食べれないなら、どんな高級料理も質素なパンも同じだ。

「お、ルカじやないか。大丈夫かい？ ちゃんと食べてるだろ？ ね？」

「気さくに話しかけてくれる店の人間に對しても小さく頷くだけで、商品を受け取つたら身体を縮こまらせ俯き加減で歩き去つていく。心配そうにパン屋の夫婦は、その背中を見送つた。

「暫く立ち直れそうもねえな」

「そりやそりや。少し前にナナリーちゃんが死んで両親も後を追うように事故に遭つて…それで生みの親の所に行つたら門前払い。見てらんないよ」

前は元気すぎるくらい元気だったのにと付けたし、今後のルカがどうやって生きていいくのか心配だつた。

もしもの時は、自分達が支えてやろうと口には出さないもののそ

の目が物語っていた。

感傷に浸つていると、店の扉が開かれ慌しい足音と共にカウンターに少年が突っ込んできたことで現実に戻される。

「おばちゃん、クロワッサン十個！ お代は出世払いです」

元気よく明るい笑顔を振りまく少年に溜息を吐いて、パン屋のおかみが少年の頭に拳骨をする。

「いってえ！」

「うちは、その場その場の現金しか扱つてないんだよ！ ビート、あんたまた教会の鐘鳴らしに行つたね！ 悪戯もいい加減にしないとバチが当たるよ！」

「えー、だつて暇なんだよ。金も無いし貧乏臭いテント暮らしだし風呂は川の水だしさ。今時期の冬にはマジ拷問だつつーの」

「だから、ちゃんと家に戻れつて言つてているだろ。そつそりやせめて冬場凍えるつてことはないし」

「絶対やだ！ 頼むよ、おばちゃん。食つものないんだつてマジで」田の前で両手を合わせるビートを見て、おかみは食パンの耳を袋詰めしてビートに渡した。

「売り物はあげられないからね。こんだけ大量にあれば大丈夫だろ？」

「やつた！ ほんとありがと！ 此処のパン美味しいから耳もすっげー美味しいんだよね！ んじゃ、また来るよ！」

店の外に出てガラス張りの向こうでビートは笑いながら手をぶんぶんと振ると、人ごみの中で大きく振舞つていたせいか人にぶつかる。

ぶつかつた人間に謝りながらパンの耳を謝罪代わりに一本やるつとすると、相手は苦笑を浮かべてそれを断る。

断られると頭を搔きながらビートは笑つて、人ごみの中に消えていった。

「…あいつも痛々しい境遇なのに、すげえ前向きだな」

呆れたように店の主人は遠目でビートが消えた方向を見た。

「前向きじゃないと生きていけないと。金がなくても家がなくても前向きになれば生きていける。そつやつて自分に言い聞かせる。子供の癖にたいしたものだよ」

腕を組んでおかみは、溜息を吐いた。

「ルカもあの子くらいポジティブになれば苦労しないんだけどね」寂しげにおかみは苦笑を浮かべると、それにつられて主人も溜息を吐いて小さく笑った。

泣き腫らした死んだような目でルカは俯きながら歩いていた。

周囲の人間は心配したり同情してくれたりしたが、ルカにとつてはどうでもよかつた。

大金が入っているカードにはまだ手をつけていない。

怖かつた。
そのカードを使つたら、本当に落ちぶれてしまつような気がしたから。

なるべく何も考えないようにした。

悲しいことを思い出すと涙が止まらなくなるから、家に引きこもるようになるべく外へ出てふらついていた。

どんつと背中に何かがぶつかる。

持つていた食材がいくつか転げ落ちた。

「あ、ごめん！」

ビートだ。

転げ落ちた果物を拾つてルカに返す。

「はいっ」

笑顔だつた。

それを受け取り、何も言わずルカはそこから去りつとした。

「あ、ちょっと待つて！」

ビートはルカの肩を掴んだ。

「ぶつかつたお詫び。パンの耳食べる?」

「え?」

パンの耳?

ぶつかつたお詫びにパンの耳…。

お詫びとして払うにしてもこれはおかしい。意図が分からぬ。

「てか、何でそんな落ち込んだ顔してんの? 大丈夫? よしよしどビートがルカの頭を撫でる。

ルカの涙腺が緩んだ。

みんな心配はしてくれるけど触れては来なかつたから、頭を撫でられる感覚に優しさが直に伝わつて涙が出る。

「うつ…うつ…ふえ…」

「えつ? な、何で泣くの? いや、ちょっとこれ…俺が苛めてるみたいじゃん!」

「うつ…うつ…うつ…ひつ…」

「と、取り敢えず…こっち!」

街中の往来で泣かれたら困るのでも言つまつビートはルカの手を引いた。

手が温かかつた。

強く握るその手が、優しく感じて涙が止まらなかつた。

ただ、手を引いて走る幼いその後姿が…何となく昔の自分と重なつて…。

少しだけ辛かつた。

* * *

連れて行かれた場所は何の変哲もない川原で、ぽつんとテントが一つあるだけだった。

「ま、入れよ。つつても超狭いけど」

テントの中に押し込まれ、ルカは座り込む。

こんなものは見たことがない。

一時的な避難場所？

これでは雨風の時に耐えることは出来ない。

おまけに中にあるのはランタンと一枚の毛布だけだった。

「此処、俺の家」

「え、家？」

ルカは目を丸くした。

こんなものが家？

つまり、こいつは此処で住んでいるのか。

可哀相で今度は別の涙が出てきた。

「あー、泣くなつて！ ほら鼻水出てる」

ルカの鼻から垂れた鼻水を拭いてやり、ビートは頭を搔いた。

「泣いてばつかだと疲れるぞ。お前、名前は？ 俺はビート。ビート＝コンダクト！」

無邪気に笑うビートにルカの顔が綻んだ。

「ルカ…。ルスティカ＝ピツツイカード」

「ルカな。うん、ルカ。覚えた覚えた。んで、ルカどうしたー？」

あんな世界の終わりみたいな顔して

ぽんぽんとビートはルカの頭を撫でた。

「俺、一人ぼっちで…。家あつても、誰もいなくて…。ずっとこれからも一人で生きなくちゃ駄目だつて…。ううう…」

「ああああ：だから泣くなよ！ ほらほら、また鼻水。えーい、このティッシュ全部やるからちゃんと拭け！ な？」

ティッシュ箱を差し出して優しく笑うビートにルカは頷いてティッシュで盛大に鼻を嚙んだ。

「一人ぼっち…一人ねえ。よし、わかつた！ ジャ、俺がこれからお前の家に住むわ。ルカと一緒にいる！」

「え？」

「そうすりや一人じゃなくなるじゃん。俺も一人でずっと此処に住んでるし。いや、家っぽいものはあるんだけど逃げてきたからなあ

「え？」

「逃げた？」

頬を搔いて苦笑するビートに、ルカは皿をぱちくりとさせた。

「実の親に売られてさあ… 売られた先の家では、きつつい鉱山の強制労働させられて家に帰つたら掃除させられて埃がひとつでもあつたらその晩は飯抜き。あ、これ死ぬなと思って逃げてきた」

実の親に売られた？

売られた先の家でも辛い思いをして、それで自分で判断して逃げてきた。

そして現在のテント生活…。

もしかしたら、自分よりも辛い境遇なのかもしれない。

ルカは心配そうにビートを見た。

「そんな顔すんなって。んー… でも、実際逃げてきて正解だつた。いくら寝るどこあつても自由が全く無い場所より住む場所とか食べるの辛くても自由に突つ走れる方が生きてる感じがする。楽しいんだ」

「た、楽しい？」

「うん。だつて自由に出歩けるお陰で今日ルカとも会えたし。一人もん同士、一緒に住もうよ」

「それは…」

「まあ、初対面で一緒に住もうぜって言われて受け入れる奴なんて…」

…

「…いいよ」

ルカの言葉にビートが硬直した。

「は？」

思わず疑問形が口に出た

拒絶されると思った。

こんな震えていて泣きべそをかくような子供が、他人を簡単に受け入れるとは思つていなかつたから。

「俺一人しかいないし、ビートも一人だし…。ていうか、此処で生活するの見てられないし」

「ど、同情？」

「うん」

はつきりと言つる力に対して、今度はビートが目を潤ませた。

「同情でも嬉しい！ 心の友よつ！」

「うわっ」

ビートは思い切りルカに抱きつき、その反動で倒れこんだ。

「いたた…。はしゃぎすぎだろ。…ビート？」

「へへっ」

ビートはルカに抱きついて幸せそうに笑つた。

その様子を見てビートが何を考えているか分からないうが、悪い奴ではないと確信した。

ただ、ビートはルカの腰に抱きついたまま動かない。

「…ビート？」

「同情でも形で表してくれるなんて…嬉しいな。一緒にいてくれるんだなあ…。へへへ…」

幸せそうに笑うビートの目には涙が浮かんでいた。

先程潤ませた涙の残りか新たに浮かべられたものかは分からぬ。それでもビートにとつて…ルカにとつても、お互の居場所が出来た。

これからは、一人で一緒に生きていこう。

一人で抱える不安より、一人で分かち合えればそれだけで心が和らぐから。

人の温もりに触れたかった。

それが実現できると思うと、彼を信じたくなつた。

出会つて三十分。

友達になつたばかりの奴と一緒に住むことになつた。

ビートだつたら、一緒にいてくれる。

お互い一人ぼっちが手を繋げば一人になつてくれたから、一緒にいるに違ひない。

予想外の楽しそうな生活に胸が躍つた。

何の変哲もない一軒家。

生前の育ての家族と一緒に暮らしていた家だつた。

「おー、マジで家だ。屋根があるー やべえ、俺今日から此処に住めるんだな」

テント生活が長かつたせいか、屋根のある家に住めるという感激のあまりビートは田を輝かせた。

そんなビートをよそに、ルカは紙袋から食品を取り出し冷蔵庫に食材を詰めていく。

「食材多いなあ。ちゃんと飯は食つてんだ?」

「まあ、食わないと生きていけないし」

正論だつた。

しかし、そんな正論を解ぐルカの肩にビートは手を回し顔を近づける。

「この一週間、パンの耳と水道水で生きてきた俺に喧嘩売つてる?」「よく生きてたな」

「まあ、稀に雑草とかダンボール食つてた時もあつたけどな」

「それ絶対、腹壊しちだろ」

「それが意外と平氣。野生生活になると大抵何でも我慢できるんだ

わ

にしどと笑つてビートはルカの肩に顎を乗せて身を乗り出した。

「で、今日のお夕飯は?」

田を輝かせながらビートは、浮かれたよつた弾む声で尋ねた。

「こ、肉じゃが…」

「肉来たこれつー。うわ、マジで肉食つたのつて……。……えーと

記憶を探るようビートは首を傾げた。

唸りながら腕を組んで悩ましげな表情を浮かべるビートにルカは

不信感を持った。

「俺が最後に肉食ったのっていつだっけ？」

「知るかつ」

わけのわからない突飛な言葉ばかりを発するビートにルカは声を上げた。

「へえ、ルカって…実は元気っ子？ セツキ泣いてばっかいだから臆病なチキン野郎と思つてたのに」

目を細めてビートがにんまり笑うと、ルカは怒りが込み上げてきたようで近くの椅子を蹴り飛ばした。

そして笑いながらビートの胸倉を掴む。

「今すぐテントに戻るか？」

「やーん。ルカちゃんのいけずう。チキン野郎とは全く真逆のタイプなのね、実は」

冷や汗を流しながら苦笑するビートから手を離すとルカは溜息を吐いた。

「ちゃんと手伝えよ。その為の一人暮らし…だよな？」
確認も含め、ルカがビートに不安そうな視線を送る。

「当然つ。二人で助け合いしようぜ」

満面の笑みを浮かべて、ビートは石鹼と水で手を洗つた。
その顔にルカの表情も綻び、同じように手を洗つた。

「あれ、そういうやルカって何歳？」

「え、八歳」

「やつた、俺九歳！ これからは兄貴と呼んでくれ

「誰が呼ぶか！」

どや顔で自分を親指で指すビートの額を叩きルカは声を荒げた。
平和で楽しい生活が待つてゐる。

悲しいことは沢山ある。

それでも…少しくらい笑うこととを許してくれ。

これまで過ごした温もりを感じることは出来なくても、ずっと一緒にいる。

悲しいことも笑顔にしてくれるちょっと変な友達が一緒にいるん

だ。

そいつこれから生きていく。

だから、前向きに頑張ってみるから見守っていてくれよな。

第21話 小さな軌跡

ばたばたと慌しい足音を立てて、パン屋のカウンターに突っ込む。いつもならこのパートーンはビートだけだったが、今回は違つ。一緒に飛び込んできたのはルカだった。

「おばちゃん、クリームパン二十個！」

「ビート、お前ふざけんな！ 食パン一斤でよろしく」睨みあいをしながら騒ぐ一人に主人もおかみもぽかんと口を開けていた。

「る、ルカ？」

「ほら、早く！ 早くしなことこの馬鹿に店のパン食い散らかされるぞっ」

「あ、ああ……」

一週間前まで死んだ魚のような目をしていたルカだとは思えない。すっかり元気を取り戻して、ビートとじやれあいをしている。

一体何が起きたのか。

元気になつたのなら何よりだが、原因を考えるとすると……。

「だつて朝飯まで腹減つたんだもん。ルーカー、クリームパン食べたい」

カウンターに顎を乗せて腹を鳴らしてくるビート以外考えられない。

「ちよつとビート。おいで」

「へ？ ちょ…うわっ！」

おかみがビートを引き摺つて耳打ちする。

「あんた、ルカに何かしたのかい？」

「はあっ？ 何もしてないって。利害が一致して一緒に住んでんの」

「一緒に住んでるって…はあ、そういうことかい」

何か納得したよつにおかみは頷いた。

「え、何？」

「いや、何でもない。友達大事にするんだよ」

「うわっ」

おかみは笑つて訝しげに眉を寄せるとビートの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「おい、ビート。帰るぞ」

「おう、今行く」

買い物が終わつたルカに向かつてビートが駆け寄り外に出た。

「おばさん、何だつて？」

「よくわかんない。友達を大事にしろつてさ」

「ふーん？」

ビートと同じくよく分かつていな様子でルカも首を傾げた。ガラスの扉越しに一人の背中を見送るおかみは何となく嬉しそうだった。

「ビートも中々やるな」

主人も同じように嬉しそうな笑みを浮かべる。

「ま、天然だろうけどね。これからはルカも大丈夫だろつさ」

「しかし、まだ八歳や九歳のガキだ。何かあつたら面倒見てやるだろ？」

「はは、そんなお人好しでもないさ。ただ、見守つてやりたいだけだよ」

我が家を見るかのような優しい瞳で夫婦は心地良い気持ちになつた。

苦境を乗り越えた一人だ。
きつと助け合えば生きていけるだろつ。
そう思つた。

「「」のそつさまでした！」

朝食が終わると一人は手を合わせ、食器の後片付けに取り掛かった。

ルカが食器を洗つてビートがその洗い終わった食器を拭いて片付ける。

最初は何処かぎこちない一人だが、今は慣れて生活に馴染んできた。

「あ、そうだ。ルカ」

「あー？」

食器を片付けるビートはテーブルを拭ぐルカに声をかけた。

「今日さ、ダンボールでソリやんない？」

「は？ ダンボールで？」

「そつ。プラスチックのあれよりダンボールの方が滑りがいいんだぜ」

「つきつきと楽しそうにするビートを見て、ルカは噴き出して笑つた。

「え、どうしたの？」

「いや、何でもねえよ。んじゃ、滑りまくつか！」

「よしきた！」

ガツツポーズをするビートはルカと共にハイタッチをした。

「あ、その前に」

「え？」

「雪かきしねえと」

ルカの言葉にビートは苦笑した。

大雑把に見えて中々細かいと早く遊びたくて仕方ないビートは、ルカと共に急いで家の周囲の雪かきを始めた。

「よつしー。今度こそ行くぞ」

「あ、ビート。ほれ」

ルカがビートにマフラーを渡した。

「今日すつげー冷えるらしいぜ。風邪引くなよ。病院代とか薬代と

かかるから」

「心配してくれんのは嬉しいけど、なんかちょっと胸苦しい」

「もつ風邪かよ」

「…ひげーよ。もついい、行くわ」

ルカからマフラーを奪い取り膨れた様子でビートは歩き出した。

「あ、おい。ビート！」

膨れた理由が分からず、ルカは小走りでビートを追いかけた。しかし、足並みを揃えると一人は笑って走り出した。

「ひやつほーい！」

ダンボールに乗つて坂道の上から、雪道を下る。

確かにプラスチックのソリよりもこつちの方が良く滑る。

滑りすぎて転んでしまうこともあつたが楽しかった。

お互いに雪の積もつた場所にダイブすると、雪の冷たさで赤くなるお互いの鼻を指差して笑つた。

滑りすぎてダンボールが水分を吸いすぎてしまふになると、苦笑を浮かべた。

「やっぱ、ダンボールは消耗品だな

「いっぱい持つてくればよかつたな。なあ、ルカ」

「ん？」

「お前、雪合戦とか好き？」

その言葉にルカは硬直した。

「雪…合戦…？」

冬の初め、ナナリーが初雪ではしゃいだ日を思い出した。一緒に雪合戦をしようと約束した。

あの小さな手を握つて約束を…。

その晩、ナナリーは急に倒れて翌日の朝に死んだ。元々、身体が弱くて…肝臓の病気を患っていた。

病院にはワクチンがなくて、漸く輸送されるという時には遅かった。

もつと早ければ…ナナリーは死なかつたかもしれない。

そして、あの約束も。

「…ルカ？」

ビートが目に大量の涙を浮かべてるルカを見て心配そうに顔を覗き込んだ。

「大丈夫か？ お前、泣いて…」

「…ナナ」

「え？」

小さく呟いたルカの言葉にビートがきょとんと目を丸くした。

「いや、なんでも無い」

目を「じ」し「じ」と擦り、無理矢理ルカは笑顔を作った。

「やんうぜ、雪合戦！」

そこでビートは自分の失言を悔いた。
知らなかつたこととはいえ、ルカは家族を失つていて。
その中で思い出もあつた筈だ。

それは、きっと…。

「ルカ…ごめん、俺！」

「なーに謝つてんだよ。ほら、早く…」

無理に笑顔を浮かべるルカの姿を見ていられなくて、ビートは力を抱きしめた。

「ごめん、ルカ。…無神経だった」

「んだよ…そんなもん知らなくて当たり前だよ。寧ろ、知つてたら怖いつづーの」

「ルカ！ 我慢すんな。泣きたかつたら泣けよ」

「泣きたいつて…・大丈夫だよ…。俺は、だ…大丈…つ。う、うう

…」

ぎゅっと抱きしめられるビートの温もりが、あの日のナナリーの手の温かさに似ていた。

「ナナ…！ ナナ…つ！ う、うわああああん。ひぐつ…ひつく

…」

「ルカ…」

「何で…何で死んじゃつたんだよつ！ 僕、僕つ…僕があの時連れまわさなかつたら…」

あの日、寒い中連れまわさなかつたらナナリーは死なずに済んだかもしねりない。

連れまわそ者が連れまわさなかうがナナリーはもう長くないことは知つていた。

知らないのはルカだけだつた。

だから、両親はベッドで死まで退屈な日々を送らせるよりも少しでも楽しい思い出を作つて悔いの残らないよつにとルカと二人で遊ばせていた。

その事実を知つたのは、両親が事故に遭う直前だつた。気がついたら、みんないなくなつていた。

何もかも自分が悪いのではないかと責めていた。

いや、今もルカは自分を責めている。

何の根拠も無く、家族が死んだのは自分のせいだと。

「ルカのせいじやない。…ルカのせいじやないよ」

「ビート…！ ビートはいなくならないよなつ？」

「いなくなるわけないだろ、馬鹿。俺、ルカ大好きだもん」

「う、ううう…うえええんつ」

その後、盛大にルカはビートの腕の中で泣いた。

周囲はその姿に目を見遣つたが、気にすることはなくビートはルカの背中を撫でながらルカが泣き止むのを待つていた。

(家族…か)

ビートは悲しそうな表情を浮かべた。

どうして両親は自分を知らない場所に売つたのだろう。

確かに貧しくて毎日食べるのも苦労した。

でもそれでも…家族がいれば幸せだったのに。

自分を売った本当の両親は、札束を受け取って歓喜の声を上げていた。

「たった三十万ネカ…」

自分の子供より金を取つたんだ。

愛されてなかつた。

いいじやないか、ルカは。

家族に愛されていたんだから。

「いつ…！」

ルカの呻き声が聞こえた。

いつの間にか、ルカの背中に爪を立てていた。

「ごめん！」

「あ、いや…。サンキュー、ビート。すつきりした」

泣き腫らした目でルカは笑つた。

最低だ。

ルカに嫉妬した。

失つたとしても愛されていたんだからいいじやないかと、一瞬とはいえそう思つた自分が恥ずかしかつた。

大丈夫。

大丈夫だ。

ルカがいれば何も怖くない。
きっと、これからは楽しい。

希望が見えてくる。

そう自分に言い聞かせた。

落ち着いて少し休んでいると、いつの間にか空がオレンジ色になつて陽が沈みかけていた。

普段のルカとビートに戻り、一人はベンチから立ち上がつた。

「そろそろ帰るか」

「おう。今夜はすっげー冷えるつて話だし、鍋でもするか?」

「お、いいねえ！ 肉もよろしく」

「ビート…お前は、肉肉つてうるせえな。ま、多分豚肉あつた筈だから…」

そんな今日の夕飯の話をして家に向かって並んで歩いていると、中年の男女がルカ達の家の周囲をうろついていた。見たことの無い人物にルカは訝しげな表情を浮かべたが、ビートの顔は青褪めていた。

「や、やべえ…」

ビートは震えて一歩散に逃げた。

嫌だ。

捕まつたら…もう戻れない。

ルカと一緒にいられなくなる。

あれは…あれは…ビートが最も恐れている存在だった。

「え、おい。ビートっ？」

ビートが何故逃げたのか分からず呆けていると、中年の男女も走り出していとも簡単にビートを捕まえた。

「このガキッ！ 散々手間取らせやがって！」

「嫌だ！ 嫌だあつ！ うづぐつ」

男がビートの腹を蹴るどビートは呻いて倒れこんだ。

「ビート…」

状況が分からず、ルカはビートに駆け寄った。

「こつちは高い金払つてめえ買つたんだ！ 何こんなところで遊んでんだ？ ええつ？」

男がボールのようにビートを何度も蹴り飛ばし踏みつける。

その痛みに耐えるビートは倒れたまま蹲つて頭を抱えていた。

「全く…ただでさえ、親に売られた屑なのにこれ以上迷惑かけんじやないよ」

葉巻を吹かして化粧の濃い女は、蔑んだ瞳でビートを見た。

「な、何なんだよ！ お前ら、ビートに乱暴すんなつ」

ルカが叫ぶと男女は振り返った。

話の流れからすると間違いない。

「いづらは、ビートが逃げてきた家の夫婦…。そして、ビートを連れ戻しに来た。

連れ戻されたらビートはどうなる？

辛い労働を強いるので、自由が全くなくなってしまう。それどころか、こんな酷い田に毎日遭ってしまうかもしれない。嫌だ。

ビートに会えなくなるのは嫌だ。

「何だ、このガキ」

「び、ビートに触るな！」

ぎろりと男がルカを睨むと、それに怯む。

しかし、友達を…ビートを助けたい為にルカは叫んだ。

「ルカ…駄目だ。お前まで…！」

「あ？ 何だ、てめえの知り合いか

「坊や、あんたは何も見てないわ。さつやとおつむに帰りなさい」

優しげに女が言つと、悪寒が走つた。

子供のルカでも分かる。

こんな場所で巻き込まれたくなかったらせつと帰れとその顔は言つていた。

何をされるか分からぬ。

怖い。

こんな奴らにビートは飼われていたのか。

きっと理不尽な暴力だつて受けっていたのかもしれない。

それでも、此処ではちゃんと笑つていた。

ビートの笑顔が消えるのは嫌だつた。

「ほんと、あんたはろくでもないガキだね。何であたしらがあんたみたいな肩を探さなきゃいけないんだよ！」

女が吸つている葉巻をビートの右手の甲に押し付けた。

「ああああうつ！」

葉巻についた火の熱さでビートは悲鳴を上げた。

駄目だ…。

「このままじゃ…」このままじゃ、ビートが殺される。例えこの場で助かつても、いつかは殺される。

足を震わせながら、ルカは何か無いかと周囲を見渡した。人もいなければ、対抗する手段も無い。

商店街の誰かに助けを求めてくても、何処も閉店済みだ。

（どうしよう…。どうしよう）

そこでルカはハツと気付いた。

ポケットの中に平べったく硬い感触があった。

（…そうだ）

何か思いついたのか、ルカはその場所から走り去った。

「あーあ、怖くて逃げちゃった」

「おら、立て！」

くすくすと女がルカの背中を笑い、男も下卑た笑みを浮かベビートの腕を引いて引き摺る。

「…ルカ…ルカ…ツ」

ビートの目からぼろぼろと涙が零れた。

危険だから逃げた方がいい。

そう思つても、辛かつた。

友達に…ルカに見捨てられてしまつた。

その事実が痛い。

今まで過ごしたこの一週間の生活が走馬灯のように震む。「ダチにも見放されちまつて可哀相に。ま、戻つたらそんなもん忘れるくらい忙しくなるんだから関係ねえだろ」

「やだ…嫌だ！ ルカ…ルカつ！ ルカあああつ！ 嫌だ、離れたくないつ。一緒にいるつて約束したんだ！ ルカ、ルカッ！ 助けてしまえ！ 助けつ…ぐはつ」

男がビートの髪を思い切り引つ張り腹を殴ると、ビートの叫びは止まつた。

「うつせえ、ガキ！ 勝手に喋つてんじやねえぞ！」

「あんま騒いでると一度と口利けないようにしてやるよ！ ただで

さえあたしらに迷惑かけてんだから、せめて大人しくしな！　このゴミガキが！」

「うぐつ、うつ……ルカ……ルカ……。ひつ……ひぐつ……」

嗚咽を零しながら泣くビートを無理矢理連れて行くべく、強い力でその小さな腕を引き夫婦は歩き出した。

「待ちやがれつ！」

叫び声が聞こえた。

振り返ると息を切らせたルカがそこにいた。

「ルカ……！」

ビートの涙が止まつた。

「何だよ……逃げたんじゃねえのかよ」

悪態をつく男にルカはにやりと笑つた。

「逃げる？　馬鹿言つてんじゃねえぞ」

顔を上げてルカは夫婦を指差した。

「このルカ様が、てめえらみてえなくそ野郎相手に逃げるわきゃねえだろうが！」

ルカは大声で叫んだ。

その言葉に夫婦の顔に青筋が浮かぶ。

「このガキッ！」

殴りかかるうとする男の前にルカが小切手を差し出した。

「七億ネカだ」

「は？」

小切手とルカから発せられた七億という言葉に男が止まつた。

「この七億で、俺がビートを買つ！」

誰もが驚いた。

夫婦もビートもその巨額の小切手とルカを見比べた。

夫婦は、小切手の名義を見て更に瞳を戦慄かせた。

「ルスティカ＝リデイル＝トーン……って、まさかトーン財閥の……！」

「じゃ、これ本物つ？」

子供だからと思っていたが、それが世界一の金融機関であるトン財閥と言つたら話は別だ。

現に、小切手は普通と違う上質な紙で作られている。どう見ても子供が作る偽者には見えなかつた。

女が目を輝かせると男はルカから小切手を奪い、ビートを投げ捨てた。

「こんなガキで七億貰えるなんて豪遊し放題だぜ！」

「子供雇つて働かせなくてもいくらでも遊んで暮らせるつてことねつ。最高！」

笑いながら夫婦は、ルカやビートに見向きもせずその場を去つていく。

投げ捨てられたビートは、身体の痛みを堪え起き上がつた。

「ルカ…」

「ははつ。生んでくれた母親が俺の為に溜めていた金、全部使つちまつた」

笑つてルカは、あの日クローラに渡されたカードをビートに見せた。

「何でそんな大事な金…！」

「大事？ 馬鹿言つなよ。あんな金、ダチ守るためならいくらでもくれてやらあ！」

「…何かつこつけてんだよ」

「かつこつけてんじゃなくて、かつこついてんだよ… ま、これで完全に縁切れたつてわけだな」

ルカは手に持つたカードを両手で割つた。

パキッと音がして歪んで真つ一つになつたカードを近くのゴミ箱に捨てた。

「てか、お前…トーン財閥つて」

「…まあ、この名前使うのも最後だよ。俺はルスティカ＝ピツツイカード。田舎町の一軒家に住むただのガキで、ビートつていう馬鹿

の友達だ

笑つてルカはビートに手を差し伸べた。

そのルカの笑顔を見て、傷だらけの顔のビートはその手を取った。

「しょうもない買い物で七億使った馬鹿に馬鹿つて言われたくないよ」

ビートも笑みを浮かべると、空から白い結晶が降つてきた。

「雪だ…」

「ほんとだ。これ、積もるかもね」

手を繋いだまま一人は空を見上げた。

さらさらとした雪を見てルカは、少しだけ涙を浮かべた。

いつか見たナナリーとの雪景色。

あの頃も心が凄く温かかった。

だけど、これからも楽しいこと嬉しいこと…ビートと一緒に積み重ねていく。

あの家の温もりを新しい温もりに変えて、生きていく。

だから、ナナリー。

お前に負けないくらい笑顔を絶やさないで生きていくよ。

お父さん、お母さん…。

向こうで、ナナリーをよろしくな。

「あれ、ルカ？ 泣いてる…？」

空を見上げて涙を零すルカの顔をビートは覗き込んだ。

「…ああ」

小さく呟いた。

「俺、意外と泣き虫みてえだ」

そう言つて涙を流し続けるルカにビートは「知ってるよ」と微笑んで、垂れたルカの鼻水を拭いてやつた。

「帰ろつか。俺達の家へ」

ぎゅっとビートはルカの手を握つた。

涙を浮かべたまま、ルカは満面の笑顔を浮かべた。

「おうひー！」

白い息を吐いて手を繋ぐ彼らの後ろには、薄っすらと積もった雪に小さな足跡が続いていた。

話が終わった後、ルカはすつきりしたような顔をしていたがシスカは微妙に不機嫌そうに目を細めていた。

「ま、こんな感じだつたけど…シスカ？」

「……何？」

少し膨れたような姿のシスカに対して意図が読めたのか、ルカはシスカの肩に腕を回した。

「何だよ、嫉妬か？ このこのつ、可愛いじゃねえか！」

「うつさいな…！ 大体、それルカがビートに拾われた話じゃなくて…ルカがビートを買った話じゃないか」

ルカの手を振り払つてシスカが言つと、眞面目な顔でルカと向き合つた。

「ルカ…」

「あ？ うおつ！」

訝しげな顔をするルカに笑顔を向けてシスカはルカの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「よしよし。よく頑張つたね」

「てめえ、喧嘩売つてんのか？」

「う、売つてないよ。ただ…」

じつとシスカはルカを見た。

シスカの翡翠色の瞳に吸い込まれそうでルカは動けなかつた。

「シスカ…？」

意味深にルカを見ていたシスカは再び不機嫌そうに顔を顰めた。

「……ビートむかつく」

顔を顰めたのは一瞬で、シスカは優しい笑顔を浮かべていた。その笑顔には、完璧に殺意が込められている。

ルカの背筋に悪寒が走つた。

「シスカ、待て…。落ち着け…」

「何言つてんだよ、ルカ。俺は落ち着いてるよ

シスカは鼻で笑い、立ち上がった。

その足は何処か、ふらついている。

（や、やべえ…）

ふらついているその足取りは、怪我によるものではなかつた。

今、シスカとビートが会つたらとんでもないことになる。

ビートが海に沈められることを予想したルカの顔が引き攣つた。

嫉妬。

そう、シスカはビートにルカを取られたようで嫉妬しているのだ。からかいがあつて可愛い奴と普通にそう思えればいいのだが、シスカ相手では無理だ。

とてもじやないが、喧嘩ではルカも歯が立たない。

止められる時は、シスカがブチキレた時に目を覚まさせる一撃くらいで喧嘩になると話はまた別だ。

何度も喧嘩したことがあるが、見事にシスカにぼっこぼこにされた記憶しかない。

下町で荒くれルカなんて言われているが、その称号は無茶ばかりして荒々しい程のトラブルメーカーという意味で喧嘩が強いというわけではない。

いや、一般的に言えどルカは喧嘩が強い。

その辺のチンピラより腕つ節は良いが、相手がシスカでは歯が立たない。

何処で鍛えたのか分からぬが、強すぎる。力があるから、尚更一撃が重い。

弱虫シスカなんていうのは、シスカの消極的な性格から通つただけだ。

その強さを知らない奴らがそんな名前で呼んでいたり、本人も面倒ごとが嫌いなだけに彼の強さを知る者はルカとビート…それから被害に遭つた者達と傍観者だけだ。

こんな危険な香りを仄めかしているシスカを放つておくわけにはいかない。

「落ち着け！ ほんとに落ち着け、シスカ！」

「言わせんなよ！」

「は…？」

シスカは振り返つてルカを見た。

そして、ルカの両頬を片手で掴んだ。

「ふぐつ！」

「ずるいよ！ 何でビートが俺の知らないルカを知つてんだよ！」

「へあ…？」

両頬を掴まれて上手く喋れないまま、頭の中に疑問符を浮かべてルカはシスカを見た。

「…言わせんなよ。ルカを取られたみたいで悔しかったんだ。何で、ビートの方がルカを一番よく知つてんだって思つたら腹が立つて…。子供みたいだつて笑いたかつたら笑えばいいだろ！」

恥ずかしさに顔を赤くして手を離すシスカを見て、ルカは笑いが込み上りてきた。

「ぶつ…ぶはつ…だーははははつ！ 何だよ、その発想！ お前、ぜつてー乙女だろ！」

ルカは半分涙目でシスカを指差して爆笑した。

その言葉に更にシスカの顔が赤くなる。

「お、おとつ…？ ルカ、ほんとに喧嘩売つてんのつ？」

「んだよ、笑えつたのお前だろ」

くくつと笑いながら楽しそうにするルカにシスカはどつ反論するか迷つっていた。

しかし、どんな言い訳をしたつてルカには通用しない。話を聞く男ではないのだから。

「うつ…で、でも…その…も、もういいつ

そつぽを向いて歩いていくシスカにルカは気付いた。

「おい、シスカ。おめえ足大丈夫なのか？ もう引き摺つてねえけ

ど

「え？ ああ、うん。痛み止めが効いてるみたい」

「…ならないけどよ」

心配だったが、何をどう言えばいいのか分からぬルカは頭を搔いた。

「…ねえ、ルカ。ひとつ聞いて良い？」

「あ？」

少し言い辛そうにしながら表情を曇らせて、シスカは何度か口を小さく開閉させた後に漸く言葉を発した。

「やっぱり俺にナナリーちゃんを重ねて…一年前、俺を助けたの？ 俺がいいって言つてくれたのは、あれは…」

「あー…やっぱ、お前だからそう考えるよな」

深い溜息を吐いて、ルカはシスカの額を指で弾いた。

「いてつ」

「確かにちょっとは重ねたけど、俺はお前だから選んだんだよ。ナナは関係ねえ。気にすんな。まあ、気にさせた俺が悪いけどよ」

「でも…」

「俺はお前がいいんだよ」

ルカはシスカの頭を撫でて微笑んだ。

「…ルカ？」

シスカが見上げると、ルカは歯を見せて子供のような満面の笑みを浮かべた。

その様子にきょとんとするシスカだったが、その笑顔に絆ほだされて小さく笑みを浮かべた。

言葉を通さなくても分かる。

ルカは出会った日からシスカを大事にしてきた。

シスカもルカを大事な家族だと思つてゐる。

それだけでいい。

今、此処でこうしている事実が証拠だ。

理由なんていらない。

例え、誰かと重ねられたとしてもそれを受け入れる。それでガル力の気持ちを和らげることが出来るなら…。ほつと気持ちが一段落した。

「じゃ、戻ろうぜ」

「そうだね。ある意味どつと疲れたかも」

大きな溜息を吐いてシスカは先を歩くルカに続いて部屋を後にして、そこでルカと別れた。

時計の針は一十三時近くを回つていて、明かりがついているフロアは少ない。

両親のことを調べるとしたら今かもしれない。

誰もいないうちに調べられたらそれに越したことは無いが、リスクは高い。

もし見つかつたら…。

逆に昼間の人が多い時に調べた方が周囲に溶け込んで怪しまれないうかもしない。

でも、それだと表面の薄っぺらい情報しか手に入れられない。足は自然に技術部の資料室に向かっていた。

自分のIDカードをカードリーダーに通すと、扉が開いた。

「…もしかして、基本的にこの建物の施設つて全部入れるのかな」通したIDカードを見て、シスカは「ぐりと息を飲み資料室へと入つた。

胸が高鳴る。

いつ見つかるか分からぬという恐怖と、この場所に両親の手掛かりがあるかもしれないという期待と不安。

それを知った時、もしかしたら謎が解けるかもしれない。ひとつずつ保管記録を探していく。

調査を始めて、どのくらいの時間が経つただろうか。

一晩でこの大量の資料を見るには全然足りない。

「此処の棚終わったら、明日に回すか」

何の手がかりも無いまま溜息を吐いて一つのファイルを手にする。ページを捲っていると、ファイルに間に挟まっていた一枚のメモリーカードが落ちた。

足元に落ちたメモリーカードのケースを見ると、"研究記録・ジエシカ" "ブルーネル" と書かれている。

「母さんの…？」

間違いない。

シスカが探していたものだ。

この中に間違いない、シスカが欲しい情報が入っているに違いない。

その小さなメモリーカードを持つて、資料室の端末まで行くと電源を入れた。

そして、メモリーカードを差し込むとパスワードの認証画面が出てきた。

「パスワード…」

ロックをかけるということは、重要な資料だということが分かる。

思いつくパスワードが見つからない。皆目見当もつかない。

どんな気持ちでこの資料を作ったのか…それが分からないと。

何か無いだろうか…。

もし、間違った答えを入れて本格的なロックがかかって開かなくなつたら…。

調べるものも調べられなくなる。

手がかり…。

ブレスの製作、ルーディメンツの対策、研究…。

二人が託したもの。

「託した…？」

シスカは抱えていた頭を離し、慌てた様子で鍊機手帳を取り出した。

そして、昔の日記を検索する。

一人が忙しかった頃に日記を綴っていた。

ずっとさせられていたことだった。一人にそう教育された。自分のこと、周りのこと…日記に毎日のことを綴ればいいと言わっていたが、常に気がついた細部まで細かく描いていた記憶がある。子供ながら面倒だと思っていたけど、それで二人が喜んでくれるなら…褒めてくれるなら…。

そう思つて毎日、書いていた日記。

「あつた…！」

六年前の五月十一日。

両親が亡くなる半年前…。

内容は、両親がその日ずっと帰つて来なくて暗くて寂しくて夜中に泣きながら布団を被つて寝たというもの。

帰つてきたのは、朝方で…その後すぐにまた慌しい様子で仕事に行つたんだ。

でも、帰つてきたのは父親だけで母親が帰つてきたのは翌日の朝だった。

父親も忙しい筈なのに、シスカが一人で寂しい思いをしないように早く帰宅して家で仕事をしていた。

母親は一週間、家に帰つて来なかつた。
仕事が忙しいから。

父親はそれしか言つてくれなかつた。

「この時に母さんがこの資料を作つていたとしたら…。いや、こつちじやなくて…これだ」

五月二十六日。

母親は、謎の言葉を残した。

”今日の日付と刑死者の数字が仲良しになるの。覚えておいてね”

何の話か分からなかつた。

五月二十六日といふのは分かつたが、刑死者の数字といふものが分からぬ。

「刑死者……。刑死者を表す……数字……」

手帳の更にページを捲る。

そこでシスカは気付いた。

その後に両親に連れて行かれたある場所。

今後の家族の未来を占つてもらつたことがある。

軽い気持ちでたまにはやつてみようと連れて行かれた。

そこで占つてもらつた占いの方法……。

「タロットカード……」

それなら納得がいく。

更にページを捲ると、大アルカナと呼ばれる日々の名前と数字が書かれていた。

「五月二十六日と刑死者の番号十一が仲良しになる。合わせる……。

足し算?」

試しにシスカはキー ボードで全ての数字を足した解を打ち込んだ。

” 4 3 ”

しかし、パスワードは認証されない。

「多分、数字だけじゃ駄目なんだ。母さんの名前じゃバレバレだし

……

首を傾げて再びシスカはキー ボードに手を添えた。

「俺に教えたつてことは……俺の名前?」

試しに打ち込んだ。

シスカ=ブルーネルに続き、先程解き明かした数字を。

パスワードが認証され、ソフトウェアが起動する。

「……これ、俺じゃないと分かんないんじゃない?」

はつとシスカは気付いた。

このパスワードは明らかにシスカにしか分かる筈が無い。

母親が伝えたかつての暗号に、シスカの名前。

それは、つまり…。

「此處に辿り着いた時、俺に教えるため？」
本当は他の要因があるかもしれない。
しかし、そう信じたかった。

この中に知りたいものがある。

きっと大事な何かが…。

ごくりと息を飲んでシスカは、資料に目を通した。

”ルーディメンツ対策兵器、ブレスに関する研究成果”

一枚目のタイトルにはそう書いてあった。

”人類を脅かすルーディメンツが開発されたのは、二十年前の国境戦争によるもの”

「国境戦争…？ 二十年前？」

新たな謎が増えた。

二十年前、国の領地を争つて行われた戦争。

話には聞いたことがあるが、詳しくまでは分からぬ。

シスカは続きを読んだ。

”戦争の最中にルーディメンツのAIが暴走。故に周囲の判別が出来なくなり、その後人類を脅かす存在になつた”

何もかも驚きで言葉が出なかつた。

知らない事実…。

ルーディメンツは意志のあるコンピューターAIで起動していた人類が作つた兵器。

つまり、人類の敵を人が作つてゐたということになる。

”だが、ルーディメンツの製造は終わることなく世界を蝕んでいた。この世界の崩壊を望む者こそ眞の人類の敵と言える。故に私達は、ルーディメンツの研究を元にした対ルーディメンツ用戦闘兵器であるブレスを開発した”

「誰かが…ルーディメンツを操つてる？ そんな、それじゃ…！」
動搖する気持ちを振り払うようにシスカは首を横に振った。
まだだ。
まだ全部読んでいない。
少し冷静になれ。

この研究記録で何を伝えたいのかを…意志を受け止める為に。

”その中の一機、スフォルツアンド。これは、あるもの…私達にとって欠かせない存在を元にしたプログラムを組み込むことにした。いつか、あの子がこの場所に辿り着けた時にこれを読み、気付かされる真実…”

「スフォルツアンドは、あの子の脳に埋め込んだカデンツアチップの覚醒で本来の力を引き出す。故に思考・神経共に繋がったひとつの中として私達はスフォルツアンドを遺す…」

文面の続きをシスカは口にして震えた。

”ごめんね、シスカ。あなたの身体を兵器の実験なんかに使ってごめんなさい。私達は、親という立場より研究者としての立場を取つてしまつた。最低な親なのは分かっている。でも、あなたに賭けたかった。あなたが平和に暮らせる世界をあなた自身で作つて欲しい。あなたを実験につかつたその意味は…”

そこでシスカは、端末の電源を切つた。

ダンツと机を叩き、目からは止め処ない涙がぼろぼろと零れてい

た。

「この先は見たくない。言い訳なんかいらない。
事実…。

カデンツアチップ…。一体何なんか分からぬが、スフォルツア
ンドを作るための実験として身体を弄られたのが事実だということ
が分かつた。

だから繋がっていたんだ。

スフォルツアンドは、自分だから。

ルーディメンツを倒す兵器として、身体を…。

「何で…何で、こんなの…！ 嘘だ…こんな…嘘だつ…！」

叫び、シスカは周囲を荒らした。

薬が切れかけている足の痛みなど関係無しに、怒りと悲しみをぶ
つけるように資料室を滅茶苦茶にした。

それでも晴れない。

信じたくないが、全ての辻褄が合つて苦しかつた。

泣き疲れて目が腫れた状態で、シスカは俯いて座つていた。
頭にゴリッと冷たく無機質なものが押し当てられる。
感触でなんとなく、それは銃だということが分かつた。
震えたまま俯いたシスカを見下ろしたのは、カペラだった。
「随分暴れたようだな」

「世の中には知らない方が幸せな真実もある。お前がそうなつてしまつたのは、お前自身の責任だ」

「お前は脆いな。この程度で壊れたらこの先やつていけないぞ」

声は聞こえているが、シスカは俯いたまま動かない。
その様子に痺れを切らしたカペラは、シスカを押し倒し銃口をシ
スカの額に押し付ける。

「お前は兵器なんだ。ルーディメンツを倒すための道具だ。お前は人間じゃない。戦う以上の価値など無い」

「なつ……！」

「……そう言われば満足か？ 何を埋め込まれようが身体を弄られるようが、彼女達の息子であるシスカ＝ブルーネルに代わりは無い筈だろ」

「俺は……」

「悲観的になるのは誰でも出来るんだ。眞実を知りお前は絶望したのか？ この先もそんな顔で生きていくのか？」 答えひ

「……分からない」

「あ？」

渴いた目から再び涙が零れた。

しかし、表情はなく憔悴しきつたような顔だつた。

「何をすればいいのか……分からない。俺は実験に使われる為に育てられた……。二人は、俺を愛してなかつたんだ」

「それは違う。二人は……」

「何も聞きたくないっ！」

シスカはカペラを振り払い、資料室から走り去る。

こんな足よりも心がずっと痛い。

誰にも触れられたくない。

何もしたくない。

利用されただけの戦いなんて、嫌だ。

「ツ、こんなものっ！」

シスカは床にエオリアーキーを叩き付けた。

何処へ行くかも分からぬまま、シスカはソルフェージュを出てひたすらに走つた。

目的も無いまま。

誰もいない場所を探して。

第23話 出会い

翌日、朝。

騎士隊は急遽力ペラに呼び出され、シスカの失踪を知った。昨晩から帰つてこない。

恐らく、もう戻つてこないのだろうと予測できた。

「シスカが、失踪つて…。何でだよ！ 何であいつがつ

「ルカ、落ち着け」

「でもよつ！」

「いいから、落ち着け！」

ロツクに痛いほど肩を掴まれ制止の言葉をかけられると、漸ぐル力は押し黙つた。

「レント少佐。これを預ける」

カペラがロツクに渡したのは、シスカが投げ捨てた工オリアキーだつた。

これが此処にあるということは、シスカは放棄したのだ。戦うことを…プレスに乗ることを放棄した。

「一体何が…」

その疑問を誰もが抱いていた。

暫く黙つていた後、カペラは重い口を漸く開いた。

「あることを知つてしまつた。私の口から言えるのはそれだけだ

「あることつて…何だよ」

「それは言えない

「何でだよつ！」

今にもカペラに掴みかかりそうなルカを周囲のクルーが抑えた。

カペラは、ルカの心中を察するようになるべく冷静に取り繕つた。

「お前らがそれを知つたということが分かつたら、シスカ＝ブルーネルの傷が広がるだけだ。昨晩の段階で錯乱していたんだ。これ以上の心の負担は危険だ」

その言葉に全員が硬直した。

言っている意味が分からぬ。

シスカにとつて絶対に知られたくないこと。

それを他に…自分達に知られたら、傷ついた心が更に傷ついてしまう。

それほどに追い詰められているのか。

「しかし、奴は重要なブレスパイロットだ。我々も捜索をしている。私が話したいのは、今後の作戦の話だ。ブルーネルを抜いた戦闘についてな」

「シスカ抜きの戦闘…つまり、それは」

「ああ、そうだ。ルバートが使えるようになつたのは不幸中の幸いだな。ピツツイカード、奴が戻つてくるまでお前一人で戦うしかない。分かっているな？」

カペラの言葉にルカは拳を握つて踵を返し背を向けた。

「シスカは絶対に帰つてくる。絶対にな！ それまで、俺があいつの居場所守つてやらあ」

それだけを言つてルカは部屋を後にした。

一人で戦う。

そんなものどうでもいい。

シスカに何があつたのか、知りたい。

しかし、その理由を知つたらシスカを傷つけてしまう。

だつたら、待つしかない。

立ち直つて戻つてくるのを待つしかない。

その為に、此処は自分が守る。

いつか帰つてきた時にシスカが不安な顔をしない為に。ルカは、そう心に誓つた。

話が終わつた後、部屋に残つたのはカペラとシロフォンだけだつ

た。

吸殻の山になつた灰皿に新しい吸殻を落とし、カペラはシスカのデータが纏められた資料を見た。

「資料なんて、初めて見るな」

小さく笑い、目を細めてカペラは机に資料を投げた。

「…あの様子だと、やっぱり覚えていないよつだな」

「覚えてない…と申しますと?」

「これを見ろ」

カペラは一枚の資料をシロフォンに渡す。

それを受け取り、シロフォンは資料を見ると目が戦慄いた。

「二、これは…」

「ああ、そうだ。七年前の事故…。それを覚えていたら、あんな状態にはならなかつたかもしれないが…。もう過ぎたことだな」

「もし、ブルーネルを発見された場合どうするおつもりですか?」

「…決まつている」

一呼吸を置いて、カペラは新しい煙草に火を点けた。

「それ相応の処分を受けてもらう」

強調されたその言葉に、シロフォンは、ぐくりと息を飲んだ。

それ相応の処分…。

「一体、どのようなことを行つのか…。」

ブレスパイロットであることを放棄したシスカに「えられる罰は、

きつと軽いものではない。

それを察じて、シロフォンはカペラから目を離せずにいた。

* * *

「お父さんに会いたい?」

「二ムの父親が見つかつたと伝えた後日、同じレストランでビートは二ムにそう尋ねた。

しかし、二ムは腕を組んで少し考えた後に首を横に振つた。

「どうせあの人のことだから、失踪先でもお気楽元気にやつてるんでしょ。てか、行方不明なの忘れてたわ」あつはつは、ニームは笑う。

その様子にビートは苦笑を浮かべた。

「忘れてたつて…。それ、酷くない？」

「えー…何処がよ。うちの家族は普通じゃないの。お互に元気だつて分かればそれでいいのよ。強がりでも何でもなくね」「うーん…。俺も普通の家庭つてのは知らないけど、ニームちゃんの家は特別変だということは分かるよ」

少し困ったような表情でビートは溜息を吐いた。

折角親子の感動の再会を取り図るつとしたのに、存在すら忘れていたニームの父親に同情した。

しかし、ニームにはひとつ疑問があった。

「で、何でビート君が父さんのこと知つてんのよ」

「秘密」

笑顔を浮かべるビートにニームは怪訝な顔をした。いくらなんでも胡散臭すぎると。

「ビート君、何やつてる人？」

「おつ、察しがいいね。流石はいくつもの有名企業を牛耳っているカリスマ女子高生社長」

「茶化さないで。どうこうことなの？」

「あ、そうだ。そろそろ帰らないと…」

「ビート君」

逃げようと席を立つビートにニームは少し怒りが籠った口調で彼を制止する。

「…分かつたよ」

頭を搔いて観念したとばかりにビートは座った。

「俺、情報屋だから。君のお父さんの件は、別の仕事をしてたまつま手に入れた情報だよ」

「別の仕事つて…？」

「それは企業秘密」

自分の口元に人差し指を当てて笑うビートを見て、二ムは怪訝な表情を浮かべた。

「なーんか、シスカがあんたを嫌う理由が分かつてきただわ」「え、何それ。酷い」

わざと傷ついたような素振りを見せるビートが白々しそぎて、二ムは疲れたように溜息を吐く。

「ビート君の用件ってそれだけ？ てか、ほんとにたまたまなの？」「ほんとだって。何なら君のお父さんの居場所に案内しようつか？」「いや、別にいらない」

「ほんとに冷たい娘だね、君。まあ、いいや…。案内も何も近いうち戻るだろうし」

「ふうん…」

「コーヒーを啜りながら言つたビートの台詞を流す二ムに、ビートは限界なのか泣きそうな表情を浮かべる。

「な、何？」

「喜ぶとか驚くとかそういうのないの？」「だから言つたじやん。お互いに元気だつて分かればそれでいいつ

て

本当に強がりでも後ろめたさでも何でもなかつたようでは、二ムはあつけらかんと答えた。

「貴族つて本当に凄い人達多いんだね…」

頃垂れたビートは、このやり場の無い切なさを何処にぶつけたらいいのか分からなかつた。

一晩中走つた先には、深い洞窟があつた。

街から離れて、今現在何処にいるのかも分からぬ。

呼吸が乱れて漸く隠れられる場所を探していく、いつのまにかこ

の洞窟で意識を失つた。

それからどのくらいの時間が経つたのだろうか。

薄れた意識は、洞窟の天井の氷が解けた水滴が顔に触れたことで覚醒する。

「う……ん……？」

意識を取り戻し、起き上がり現状が理解できない頭を動かせる。

「うつ！ も、さむ！」

周囲が氷に覆われた洞窟…寒さを感じない筈が無い。

壁も地面も天井も一面氷で覆われていてこの場所に覚えは無かつた。

こんな所で寝ていたのかと思つと背筋に悪寒が走る。

このまま眠り続けていたら、凍死していたかも知れない。

寒さで身震いをして、呼吸をするたびに白い息が吐き出される。

「早く、出なきや……」

凍える身体で足を前に出そうとした。

「あれ……？」

周囲を見渡すと分岐点がいくつもあって、道がこじれていった。

「ど、ど、ど、じ、よ、う。このま、ま、じ、や、凍死、しち、や、つ、く、し！」

不安に搔き立てられるが、くしゃみをすることで改めて思考を巡らせた。

「とにかく、出口探さないと……」

立ち止まつていたら死んでしまう。

シスカはあてもなく、前へ進んだ。

前へ進んだのはいいのだが……。

「ふ、うう……寒い……」

寒さで感覚が麻痺してきた気がする。

手や足の指先の感覚は無く、上と下の歯がぶつかりあってカチカチと音を立てる。

呼吸時に吸い込んだ冷気が喉奥を凍らせるような錯覚さえしてしまつ。

それでも、歩くしかなかつた。

(こんな所で…俺は、死ねない)

誰もいない場所で孤独に死んでしまうのは嫌だつた。

今はとにかく、この洞窟を抜けなければその嫌な方向へ向かつてしまう。

「え…」

暫く歩いた先に光が見えた。

もしかして外へと続く光かとシスカは希望を抱いてその光へと向かつた。

「何だ、これ…」

しかし、それは抱いていた希望とは違う光だつた。
踏み込んだ先にあるのは、一面に光り輝く白い花に覆われた場所だつた。

まるでそこだけが世界から切り離された不思議な場所だつた。

白い息を吐きながら、歩いていくと白く咲き誇つた花の絨毯の中にあるそれに目を奪われた。

その白い花と同化するが如く、綺麗な長い銀髪の少女が眠つていた。

少女の人形のような白い肌に触れる。

雪のように冷たかつた。

こんな寒い場所で眠つているとしたら、もしかして…。

「ま、まさか…死ん…っ」

肌が冷たさが冷氣のせいかそうじゃないのか分からぬ。

この少女が死体なのではないかと思うと怖かつた。

このまま此処にいたら、彼女と同じ運命を辿つてしまひのかもしない。

シスカは後ずさりをしてその場から去りつとした。

「また逃げるの?」

静かな…それでいて凜とした声。

後ろを振り向くと、銀髪の少女が立っていた。

生きている…？

いや、それ以上に…。

「逃げていても失うばかりで何も手に入れられないの。逃げないで。

…シスカ＝ブルーネル

「な、何で俺の名前…」

「あなたの脳にあるものと私の中にあるものが接触したから。だから、私はあなたのことを知っている」

脳にあるもの？

彼女の中にあるもの？

接触？

一体、何を言っているんだこの子は。

「俺の脳つて…。まさか…！」

口に出して、はっと気付いた。

昨晩得た情報…。

スフォルツァンドを作る時に脳に埋め込まれたもの…カーテンシアチップ。

それが彼女にも？

彼女も身体を弄られたのだろうか。

実験の為に…。

「それは違う」

「え…？」

「あなたは全て勘違いしている。あなたの両親のこともスフォルツ
アンドのことも私のことも…あなた自身のことも」

「は…？」

少女が何を言っているのか分からぬ。

全て勘違い？

何を…何処から何処まで間違っているというのか。

「本当に覚えてないの？ 七年前の事故のこと」

「七年前…？ 事故？ 一体何を…？」

「一体何を言つてゐるんだと言おうとしたが、それは防がれた。いや、塞がれたのだ。」

呼吸が鼻でしか出来ない。

唇に柔らかくて温かいものが触れる。

身体の温度が上昇して、動機が早くなるのが分かる。

少女からの優しいキスは、ただの口付けじゃなかった。

（何だ？ 頭の中に…）

脳内に様々な情報が飛び込んでくる。

機械が散乱したその場所で両親が研究に勤しんでいた姿。

ノイズが入る。

高い高いビルの屋上。

燃えるような赤い夕焼け。

足元が崩れる音…。

瓦礫の下敷きになつた子供。

血の匂い…。

人のざわめき声に救急隊。

「ひひやひひやとした医療器具…そして、見たことの無い小さな機械。

誰かが…泣いている。

白衣を着た人達が…泣いている。

あれは…。

あれは…！

「…ッ！」

シスカは少女を押し倒した。

「な、な…何だよ、これ… 何で父さんと母さんが…」

「七年前の事故」

「え…」

戸惑つた表情をするシスカを少女は無表情で見ていた。

「あなたが忘れてゐる記憶。無理も無いのかも…。悪戯であんな古

いビルで遊んでいたあなたは、瓦礫の下敷きになつて生死の狭間を彷徨つたのだから

「俺が…死にかけた？ 七年前に？」

それじゃあ、今脳内に映つたあの子供は…。

あの子供は自分だというのか。

そんな話は聞いたことが無い。

事故に遭つたというのなら、その話を知らされてもおかしくない筈なのに。

「詳しく述べ？ それとも、これ以上余計なことで傷つきたくないからまた逃げる？」

「別に俺は逃げてなんか…」

「逃げてる。傷つるのが怖いから真相を知りたくない。本当は知りたいと思つた癖に都合が悪くと逃げる。自分は傷ついたんだって、可哀相なんだって…」

「違う…。俺はっ…！」

「自暴自棄になつて逃げ出して、周囲に迷惑をかけたことも気に留めず自分のことばかり。それ故に視野が狭い」

「な…何なんだよ、さつきから…俺の何を知つてそんなこと…」「全て」

はつきりとした物言いで少女は答えた。

「私はあなたの全てを知つてゐる。あなたの知らない記憶も。こうして接触したから」

「ど、どうして…」

「……」

その答えを少女は語ろうとしなかつた。

何のことか分からなかつた。

少女の素性も言つていることも自分との繋がりも。

彼女の存在が…分からなかつた。

「それで、どうするの？」

「え…？」

「聞く？ それとも逃げる？」

「……」

シスカは、ぐっと拳を握つて俯いた。

悔しかつた。

全て見透かされていて、図星ばかり突かれて反論できない自分が恥ずかしくて悔しかつた。

確かに傷つくのは怖いし、逃げたい気持ちはある。自分が情けないほど臆病なのも分かる。

だけど、一度は決めたじゃないか。

みんなを守つてやるんだって、逃げ道は作らないって決めたじゃないか。

「分かつた、聞くよ」

シスカの答えに静寂が訪れる。

少女は微笑んだ。

その微笑みが天使のように見えて、一瞬だけシスカの顔が紅潮した。

「七年前の事故で、あなたは死ぬ筈だった。脳に大きなダメージを負つていて、医者ですら諦めていた。もう手の施しようが無いと」

「俺、そんなに……」

そんなに酷かつたのかという言葉を飲み込むシスカに少女は頷いた。

「それでも諦めない人達がいた。それが、ゼウス＝ブルーネルとジエシカ＝ブルーネル

「父さんと母さん……？」

「二人はあなたが生きるためにカデンツアチップを埋め込んだ。本来なら、スフォルツアンドは他のブレスと同じただの戦闘用メカとして開発される筈だった」

少女は続けた。

「カデンツアチップは、バイロットを強化する為の道具……カノンドライヴの一部のパートとして開発される筈だった。でも、その時は

まだ設計段階でカノンドライブの要となるカデンツアチップしか出来ていなかつた。そして、二人は賭けたの。身体を強化させるカデンツアチップを人間の身体に埋め込んだら、あなたを助けられるんじゃないかつて」

「まさか、それつて…」

「あなたの命を救う為に行つた実験。そのデータを元にスフォルツアンドは作られたのは確かだけど…それでも、あなたの命を救つたのはその実験のおかげなの」

「それじゃあ、俺は…」

「そう。結果的にあなたは元の生活を送ることが出来た。ううん、事故に遭う前よりもずっと健康で身体能力が高くなつた」

「…俺は、強化人間つてこと?」

ブレスパイロットを強化する道具として使われる部品であるカデンツアチップを実際に埋め込まれたとなつたら、それは…。「そこまで大袈裟なものじゃない。普通の人より少しだけ丈夫になつただけ。たつたそれだけ…」

シス力を助ける為に苦渋の選択として実験に使つてしまつた両親。昨日の資料を最後まで読んでおけばよかつたとシス力は後悔した。そうすれば、両親を憎むことなく更に尊敬することになつたのだろう。

愛情…。

二人の愛情を一身に受けたのだと認識させられた。

何も考えず、勝手に誤解して勝手に裏切られたと錯覚した自分がこの上なく恥ずかしい。

胸に熱いものが込み上げてくる。

「…俺、馬鹿だ」

シス力は涙声で呟いた。

「父さんと母さんが俺をモルモットとして考えるなんてありえないのに…」

「私の話…信じてくれる?」

少女が不安そうに尋ねるとシスカは頷いた。

「うん、信じる。何となく……君がこんな嘘言つとは思えないから」涙目で笑みを浮かべるシスカに少女は嬉しそうに笑った。

「セリカ」

「え？」

「私の名前。セリカ＝ハウル。よろしく、シスカ」微笑みながら名乗る少女……セリカにシスカは、戸惑いながら頷いた。

今更だが、他人が自分のことを細部まで知っているといつのは不思議な気分だった。

「というか、君は何で……つくし！」

少女の素性を尋ねようとしたといいでくしゃみが出て再び凍えるような寒さが蘇つて来た。

「ひとまず、此処から抜けよう。話はその後で……」

シスカは少女の手を引いた。

洞窟を抜けようと歩き始めたその時だった。

「心配には及ばない」

男の声がした。

慌しい複数の足音がして、それは止まった。

振り返ると、その声の主らしき背の高い黒髪の青年を中心に軍人がシスカ達を取り囲んでいた。

「シスカ＝ブルーネル。一緒に来てもうつよ。……どうこうことなか、分かっているね？」

力ペラの命令でシスカを取り戻しに来たということは一目瞭然だ。このまま逃げていてもきっと罪が重くなる。

逃げる必要もなくなつたのだ。本当の真実を知つたのだから。

だから、勘違いをして人に迷惑をかけた罰は受けよう。

その罰がどんなものか恐怖を感じたが、シスカは受け入れることにした。

「……分かりました」

頷いてシスカは軍人に両腕を拘束され、歩き連れられていく。

「君にも少し話を聞きたい。悪いが、一緒に来てもらうよ」

シスカと一緒にいたセリカからも事情聴取したいのか、青年は優しくセリカに語り掛ける。

「シスカに乱暴しないで…」

「それは僕達が決められたことじゃない。さあ、行くよ」

青年は、セリカの手を引いて歩き出した。

セリカはシスカの背中を田を逸らすことなく見ていた。

洞窟を抜けようと少し歩いた時にそれは起つた。

ゴゴゴと地面が響く。

洞窟の岩や氷が軋み、天井から細かい石粒が落ちてくる。そして衝撃。

一際大きな揺れに倒れこんだ。

「うわあああっ！」

大きく揺れるその地震…。

きつと地盤が緩いせいで余計に揺れを感じるのだろう。

このままでは、生き埋めになつてしまつ。

「この揺れはっ」

シスカには分かつていた。

何か巨大ものが歩いているよつた規則的な揺れ。

その原因は分かる。

今まで、それと戦つてきたのだから。

「ルーディメンツ…！」

震える声を振り絞つて、シスカはその名を呼んだ。

その一言で敵の奇襲だということを確実に認識させられた軍人達と共に、急いで洞窟を抜けた走つた。

第24話 自分に出来る」と

警報と共に騎士隊は作戦を開始する。

シスカのいないルカ一人の出撃。

近接戦用のルバート一機のみとなると、不利。

以前はジェントが一人でルーデイメンツと戦つてきたが、それは彼に経験があつて頭も切れることもあつて出来た技だ。

初めて出撃するルカにとつては厳しい状況…。

冷静に戦術を組むなんてことはルカには出来ない。

此方から指示を出しても、イレギュラーなんていくらでも考えられる。

その時の対処方法なんか知るわけが無い。

ただ感情的に戦つたら危険…。

ルカは、その危険性を分かつてているのだろうか。

「へつ、武者震いが止まんねえぜ…」

ルカは強がつたような笑みを浮かべた。

初めて戦場に出る緊張感…。

いくらルカでも戦場へ出る恐怖くらいはある。

こんな気持ちだったのか。

シスカは、こんな気持ちで戦つていたのか。

手に汗を握り、ルカはエオリアキーを鍵穴に差した。

スフォルツアンドとはタイプが違う、近距離戦に適した少しづつめの黒い機体…それがルバートだ。

起動と共にルバートの目が光り輝いた。

「どうだ?」

ロックがジェントにルカとルバートの同調率を確認する。

「…緊張してるので、少し乱れてるね。多分、普段のペースで感情

的になつたら切斷される

「切斷されたら、どうなる?」

「俺みたいになつちやうよ。だから氣をつけて。敵じやなくて、ル力に。特に今はシスカがいないから、不安なんだと思つ」
ジョントのように……というのは、彼の左目と右足のことを言つてゐるのだろう。

ジョントの戦闘不能により、シスカがスフォルツィアンドに初めて乗つたあの時のことを。

「あの日、俺も同調が切れてされるがままだつたから……。だから、隊長」

ジョントの言葉にロックは、力強く頷いた。

「作戦を始める! ルカ、死にたくなかつたら指示に従えよ」

ロックは、ルカに通信を送つた。

「……」

その指示に対してもルカは返事をしなかつた。

ただ、操縦桿を握つて何度も深呼吸をしていた。

『ルカ、聞いているのかつ!』

ロックの怒号が飛ぶ。

「うつせーな! イメトレしてんだから邪魔すんなつ」

噛みつかんばかりにルカは牙を剥き出しにして大声を上げた。

そして再び深呼吸をして、操縦桿を握りなおした。

『ルスティカ! ピツツイカード、行くぜつ!』

ルカの言葉を合図にルバートは、飛び出した。

着地をしてルーディメンツに対峙すると、ルカは息を飲んだ。

視界に入つたのは、沢山の触手が生えた二足歩行の形をしているルーディメンツだった。

「うつわー! キモすぎんだろ」

わざと吐きそうな素振りを見せてルカは構えた。

『ルカ、まずは…』

「一撃入魂！ おらああああつ！」

ロックの指示を待たずにルカの掛け声と共にルバートは走り出した。

そして、ルーディメンツとの距離を縮めて拳を構える。

「ダイナミックメガトンシャイニングパアアンチイイ！ ルカ、ス
ペシャルウウウ！」

古臭いヒーローアーメンばかりの必殺技を発し、勢いよくその拳をル
ーディメンツ目掛けて振るつた。

しかし、至近距離であからさまに殴りうとするルバートの隙をつ
いてするつとルーディメンツは避けた。

「うおっ」

重心を保てない操縦のまま、ルバートはその直線状に転んだ。

「いててて…。いってえな、くそつ！」

「コクピットが揺れた衝撃で頭をぶつけたのか、ルカは頭を抑えた
手で再び操縦桿を握る。

しかし、遅かつた。

全てが遅かつた。

ルーディメンツの無数の触手が「コクピットにいるルカ」とルバ
ートを貫いた。

「がつ…！」

ルカの瞳が戦慄く。

触手がルカの身体から抜けると、貫かれた身体の箇所から血が噴
き出した。

「は、はは…。マ…ジ…かよ…」

身体から噴く血を見てルカは、信じたくない死への恐怖に震えて
自嘲気味に笑つた。

連行されたシスカとセリカは、漸くソルフェージュに辿り着いた。しかし、後ろ手の拘束はまだ解かれる事なく解放される雰囲気は無かつた。

「お願いします！ 行かせて下さい。俺っ……！」

遠目だつたが外の様子を見てルカが苦戦していることを知つてしまつたシスカは、いともたつてもいられなかつた。

助けないと、死んでしまう。

ルカが、死んでしまう。

今、ルカを守れるのは自分だけだとシスカは思つた。
しかし、依然として解放はされない。

「それは、此方では決められない。この件は大佐からの承認が…」
「それじゃあ、このまま大人しく見てろつて言つのかよ！」
シスカが声を荒げて叫んだ。

「落ち着くんだ。ブルーネル君」

「解放してくれないなら…！」

ぐつと力を入れて、シスカは拘束する軍人から離れ蹴り飛ばした。

「ぐはっ！」

シスカが本気を出せば、このくらいの拘束は簡単に解ける。
それを知らなかつた軍人達は驚いた様子を隠せずにいた。
「手荒にしてでも行かせてもらいますっ！」

「こんな子供に…！」

倒れた軍人が起き上がりつて歯を食い縛りシスカに飛びかかる。
しかし、それは簡単に避けられてしまい周囲の軍人もシスカへと向かつてくる。

その動きを見てシスカは、向かつてくる全員を倒していく。
軍人がシスカ一人に引けを取るには理由があつた。

子供だからと本気を出せないこと。

確保を頼まれていては、乱暴なことはあまりしたくない。
それは、このリーダー格の青年の教育の賜物なのかも知れない。
だから、シスカ一人で彼らを簡単に伸すことが出来た。

「ブルーネル君、やめるんだ！ これ以上、罪を重ねたら…」「罰だらうと何だらうと、そんなもの後でいくらでも受けます！ でも…今は…今は、行かせて下さいっ！」

必死に抵抗するシスカを見て、セリカは青年の腕を抑えつけた。「なつ…！」

「シスカ、行つて」

「セリカ…。でも、君はっ」

「私は大丈夫。みんなにとつてシスカは必要な人なの。だから、早く行つて」

大人しい喋り方だが、その声には強い力が込められていた。必死で青年を抑えるセリカに心配そうな表情を浮かべたが、すぐに頷いてシスカは走つた。

その背中を見て、青年は溜息を吐いた。

セリカに抑えられていたのではない。抵抗しなかつただけだ。

シスカの必死な表情を見て、束縛することなんて出来なかつた。

「こりゃ始末書かな」

小さく笑つて、青年は優しくセリカの手を解いた。

「…『ひめんなさい』

セリカは小さな声で男に謝罪をする。

しかし、後悔はしていない。

シスカには、今出来ることをやらせてあげたい。

だとしたら、自分はその背中を押すだけだ。

「私は、少しでもあの人の方になりたいから…」

「だらうね。…ほんとに、若いなあ」

青年は苦笑しながら、頭を搔いた。

「でも、きつと辛いよ。この戦いが終わつたら…」

「覚悟してる。でも、大丈夫。あの人だつたら…きつと、大丈夫だつて思える」

セリカは小さく微笑んだ。

青年は、セリカの手を取った。

「それじゃあ、行こうか」

青年の優しくも厳しさの残る声にセリカが頷いた。

「ルカッ！」

貫かれたルバートとルカの身を素じ、ロックは叫んだ。
「ルバートの装甲をぶち破る硬さとパワー…？ かなり、まずいか
もしれない」

ジョントが呟いて気難しい表情を浮かべる。

戦況はかなり悪い。

もし、あのままルバートが攻撃を受け続けたら… 確実にルカは死
ぬ。

警報が鳴り響く。

「パイロットの生体反応、イエローからレッドです！」

アニー＝ニのオペレーションを聞いてロックは歯を食い縛り拳を握
つた。

今のルカは、瀕死の状態。

想像以上に戦えないルカへの対処を巡らせる。

敵を倒すのが最優先。

しかし、パイロットの命を助けたい。

最前線で戦う者を優先して救いたい。

「…ルカを下げる」

「え…？」

低音で呟くような声量でロックは俯きながら言うが、ジョントは
その言葉をはつきりと聞き取ることが出来なかつた。

「ルカを下げる！ これ以上の戦闘は無理だ」

今度は怒鳴りつけるように叫んだ。

ルカを下げたら戦う者がいない。

それならば、限界まで戦わせるべきだ。

それが、力ペラの望んだ作戦だった。

「まだ持つだろ？」

ブリッジの扉が開くと同時に力ペラの冷たい声が聞こえた。

「まだ意識も保っている。死んでいるわけではない」

「しかし、これ以上の戦闘はつ！」

「まだだ。まだ持つ。… そだらう？ ピッシィカード

依然として腕を組んだまま表情も声色も変わることなく、力ペラはルカに通信を送った。

流れが止まらない血を抑えるように腹部に手を当てていると、苦悶の表情を浮かべ大量の汗を搔くルカは無理矢理笑みを浮かべた。

「… つたりまえ… だらうが… ！ こんぐりいで俺が… 死ぬかよ… つぐ…！」

身体を動かすたびに、血がぼたぼたと流れ落ちる。

小さく呻くルカは、痙攣している血塗れの手で操縦桿に手を伸ばす。

『ルカッ！』

ロックの怒鳴り声が聞こえる。

『いいから、下がれ！ 本当に死ぬぞ！』

力ペラの意向を無視してロックは叫ぶ。

ロックは、自分が何をしているのか分かっていた。

感情に任せて上官であり最高責任者の力ペラに楯突くといふことが、どれほどのものかと。

降格される可能性だけではなく、司令官として外されるかもしれない。

それでも、見殺しには出来ない。させるわけにはいかない。

しかし、ルカはそんなロックの心中を知る由もなくルバートを再起動させた。

ルーディメンツの手がルバートの頭を掴み、他の触手で動きを封じて殴り続ける。

「ぐあっ！ あっ、ぐうう！ く… つそ…！」

意識が朦朧とする。

機体が軋み、激しく揺れて火花が散る「クピットでルカの指先の力が抜ける。

（こんな所で死ぬなんて…ありえねえだろ。俺は、あいつの居場所守つてやるつて決めてんだ。まだ死ぬわけにはいかねえ…）

ガツ！ ガンツ！ ガンツガンツ！ バキッ！

遂にルバートの頭部に亀裂が入った。

直にルーディメンツの姿を視認した。

（…これまで…なのかよつ…！）

全身の力が抜け、ルカは倒れこみ意識を失った。

一方的に轟られるルバートとルカを見てカペラは思慮深そうにモニターを見ていた。

「…作戦は失敗か。買い被りすぎたようだ。まだブルーネルの方が使えるかもな」

カペラの冷徹な言葉にその場の全員が一斉に驚愕した様子で彼女を見た。

あまりにも酷な発言に震える。

「仰る意味が分かりませんが…」

ジョントはあくまで冷静に取り繕つて問う。

「そのままの意味だ。ピツツイカードは使えない。兵器として機能しないと言つてている」

「彼らは人間です。兵器ではなく、生きている人間なんですよ。機械と違つて、一度壊れたら直すということは出来ません」

「ブレスは兵器だ。それを動かす者もそれと同等だ。それ以上でもそれ以下でも無い。今回の作戦は失敗だ。ブレスを回収しろ。パイ

ロットの生死は問わん」

「大佐つ！ あなたという人は！」

ロックが怒りに叫ぶと、その肩をジェントが掴み首を横に振った。そこで上氣した顔が若干解れたが、悔しさで爪が食い込むほど拳を握った。

ブリッジに重い空気が漂い、機体が敵の視界から消えるようにステルス機能を沈黙したルバートに発動させ、回収作業に入った。回収が終わって少し時間が経つたところで、廊下を走る音が聞こえブリッジの扉が開かれた。

「はあ…はあ…」

息を切らしたシスカだった。

「シスカつ？」

誰もがその人物に驚いた。

失踪していたという彼が、こんなに早く帰つてくるとは思わなかつたからだ。

顔を上げてシスカは、息を整えた。

そのシスカの表情は、決意に満ち溢れていた。

「俺を…スフォルツィアンドに乗せて下さい！」

シスカの声がブリッジに響く。

希望。

戦う術が無い自分達に希望が訪れたと誰もが思つた。

しかし、カペラは腕を組んでシスカを睨んだ。

「駄目だ」

その言葉に全員が驚愕した。

「ブルーネル。何故、戻ってきた」

「そ、それは…」

カペラの言葉にシスカは押し黙つた。

「自分の勝手な都合でやるべきことを放棄しておいてのこのこと戻つて今度は戦わせろというのは、都合が良すぎるんじゃないかな」

「わ、分かつてます。でも…」

「此方で軍を向かわせたのは、あくまで罰則を与えるためだ。大事なブレスパイロットには変わりはないが、今までは示しがつかないのだよ」

カペラの言いたいことは分かる。

人に迷惑をかけて、都合よく戻ってきて今までと同じように…といふのは、通じない。

それが人類を守るためにしても、カペラは社会を守る義務がある故に簡単に認めるわけにはいかないのだろう。

他の者に示しがつかない。

勝手なことをして迷惑をかけたシスカの行動を認めてしまったら、周囲に影響を与えてしまうかもしれない。

その為には、シスカの願いを叶えるためにはいかない。

「罰は受けます。…どんなことでも。でも、今は…今は俺が戦つてみんなを助けたいんです！俺はもう逃げない。これは、俺にしか出来ないことだから。だから、戦わせて下さい！」

今までのシスカとは違っていた。

頼りなく怖い怖いと言い訳をして逃げていたシスカとは、全くの別人のようだつた。

何處か、成長したようにも見えた。

「お前は本当に似ているな…。奴らと」「似ている…？」

鼻で笑うカペラが何を言いたいのか、シスカには分からなかつた。

「似すぎていて…反吐が出る」

怪訝な表情を浮かべ、カペラが銃口をシスカに向けた。

シスカの瞳が戦慄き、彼女がこれから起こすかもしれない行動に身体が震えた。

一体何を考えているのか分からない。

今、優先することはそうじゃない。そうじゃないだろ。

人を殺すことではなく、人を守る方が大事なのではないか。

身体を震わせ恐怖でぐつと目を瞑るシスカを嘲笑うように、カペ

ラは薄ら笑い浮かべた。

「大佐！ そんなことして、一体何をつ

ロックが声を荒げると同時にブリッジに銃声が轟いた。

目を瞑つていたシスカがゆっくりと目を開く。

シスカの近くの壁に弾痕が残る。

銃を持ったカペラの腕を取つていたのは、シロフォンだった。

「大佐、今ブルーネルを殺したら戦力が減るだけでは…」

「戦力？ こんな周囲を焼き乱す子供が戦力になるか。今までのまぐれが今後通じるわけが…」

「本当にそういう思つていらっしゃるのですか？」

「……」

シロフォンの言葉にカペラは舌打ちをして掴まれた手を振り払つた。

そしてブリッジを出ようとシスカを横切る。

「ブルーネル…。先程の言葉、覚えている。この戦闘が片付いたら、お前は私のものだ」

横切る際、カペラはシスカにだけ聞こえるように小さく呟いて足早にブリッジを出る。

それにならい、シロフォンは一礼をしてカペラの後を追つた。

「……」

シスカは、カペラが何を考えているのか分からなかつた。

ただ、何か憎しみのようなものが込められている…。

それだけは確かだつた。

先程の言葉とは、どんな罰でも受けると言つたそれを示しているのだろう。

何をされるか分からぬ…。

覚悟が必要だと思つた。

ロックがシスカに向かつてエオリアーキーを投げ、それを受け取つた。

「シスカ、必ず生きて帰つて来い！」

ロックの言葉に呆然とするシスカだったが、その場のクルー全員が行つて来いと背中を押すように力強く頷いた。

手の中にあるエオリアキーを見て、再び握り締めるとシスカは頷いた。

「はいっ！」

シスカのその目は、とても頼りがいのあるものだった。

今までとは違う。

一体、彼に何が起きたのかはわからないがこれなら何とかしてくれる。

そんな彼を見て安心出来た。

今の彼なら、安心して任せられる。

だから、そんな彼の背中を押してあげよう。

一緒に戦つていこう。

彼に負けないくらい、自分達の出来ることをしてみせる。

その場の全員が、本気でそう思えた。

戸惑うことなくシスカは、ブリッジを出て格納庫を目指した。

格納庫に辿り着くと、一点に人が集まつて慌しい様子で声を荒げている。

その近くには、ズタボロになつてているルバート。

じゃあ、ストレッチャーに乗せられている血塗れの人物は…。目を閉じて力なく動きが止まっている人物は…。

「ルカ…？」

信じられないとでもいう目でシスカの顔が青褪めていく。

普段だつたら取り乱してルカの名前を叫んでいるかもしれない。心の中が爆発しそうだった。

「ルカッ…！」

しかし、堪えた。

拳をぐっと握り、歯を食い縛った。

今は、倒さないといけない。

ルカが生きていることを願つて…田の前の敵を倒さなくてはいけない。

傷ついたルカのためにも、必死に生きようとするみんなのためにも…。

荒ぶりそうな気持ちを振り払つて首を振つて、シスカはスマオルツアンドへ向かつて走つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1948x/>

鍊機動騎士スフォルツアンド

2011年11月30日14時48分発行